

---

# 異世界と私と時々ウサギ

酢昆布

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界と私と時々ウサギ

### 【Nコード】

N5878P

### 【作者名】

酔昆布

### 【あらすじ】

学校の帰り道でウサギに銃殺されました。目覚めたら異世界で、あれよあれよと恋人ができて、しかも溺愛されています。隙あらば襲って来そうなイケメンをやんわりいなす、そんな話。ああ、神様、あなたは私にいろいろ背負い込ませすぎではないでしょうか。

倒れてましたか。

偏差値高めの公立に通う高校2年生、板垣 薫はダークブラウンの髪をなびかせて、今、全力疾走中だ。

薫は勉強も普通にできる、普通の高校生だったが、日本人離れした高い鼻は顔全体を整えて見せる。

そのため兄と同様にモテるが、彼氏は出来た事が無い。

あっあり得ない…。

ウサギが…ウサギがああああ！あれなに？！はつまさか宇宙人？！

…イヤないないないない。

ともかく今は逃げよう！うん！

あああああ！、と叫びながら、薫は街を疾走していた。薫は今、銃を抱えたウサギに追いかけている。

初めはいつも通り学校からの帰り道を歩いていただけだった、それなのに友達と離れてちょうど曲がり角を曲がったときだったか、ウサギがひよっこりと顔を出したのだ。普通なら、その黒々とした瞳に騙されて迷わず抱きしめたかもしれない。だけど目と共に黒々と輝く、形からして明らかに銃としか思えないその物体を自分の眉間にまっすぐ向けられて、考えるよりも先に足が動いた。

おかしい！

うわあああ！ウサギさん足早い！重いもの背負っているから走るの遅いと思ったのに！

さつき目印にしてた電柱を通り過ぎた。確かコレで3回目だ。陸上部で良かったとか、初めて思ったね！でも流石に疲れて来たし、限界は近い。ど、ど、どうしよう！そんな事を考えながら走ったからなのか、目前に迫る行き止まりに気がつかなかった。

あ、と思ってUターンしたが、遅い。それを見たうさぎが逃がさんとはかりに発砲した。

あ、死んだかも。

死の覚悟なんてそんなもの、出来るはずがない。青春まったただ中では、しかも、まだ恋もしてないのに！

一瞬の後、何かグルグルしたものに引き込まれた。

薫は今まで普通でまっとうで、平凡だけど楽しい人生を送ってきた。だから、こんな事には免疫がないわけで。

お母さん、お父さん、そしてお兄ちゃん、ダメな子でごめんなさい。今日、私は星になります。

と、1人家族に別れを告げ、意識を手放した。

目が覚めると、知らない部屋。ここどこ？あー、天国？うん。天国か。生前悪い事なんかしてないもんね。

ああ、私死んだのか。打たれたからね。あー日本も怖いところだ。

でもしんだと言うのに、自分のこの落ち着きっぷりはなんだか気持ち悪い。もうちょっと悲しんだりとか。

やっぱり死の実感がないんだろう。当たり前だけど。

まあ、ここが天国ならよく見ておこう！

1人で納得してうんうん頷いていると、後ろでドアの開く音がする。入ってきたのは男の人。天使みたいのを想像していた私は、ちょっと、がっかりした。

紺色の髪と目に少し目つきが悪いが整った顔。程よく筋肉がついた体。俗に言う細マツチヨ？

誰？天国にそんなものがあるのか不安だけど受付の人？

いやそれにしてもカッコいい。うん、スゴく。スゴいカッコいい。お兄ちゃんは世間一般で言うカッコいい顔だったけど、それに見慣れた私でもカッコいいと思う。

あ、そうかじゃあアレか、雑誌とかで紹介されちゃう感じの。イケメン受付 みたいな感じで。ああ納得。

「あの、もしかして受付の……」「大丈夫か。そこで倒れていた」

低いテノール声で遮られる。むう。

「倒れてましたか？なんか変なウサギに追いかけて……それで、なんかグルグル？」

「グルグル？なんだそれ。ここは俺の家だ。俺の書斎の前で倒れた」

書斎という事は、天国という可能性は低い気がする。

じゃあ、まさかタイムスリップとか……ええっそれは……！

「あー。うーん。えっと、今何年でしょうか」

「……？なんだ？今は2010年だ」

違うな。

「あー、私日本から来たんですけど、ここはどこでしょうか」

「ニホン？どこだそれ。ここはビンパールだ」

ええっ?!じゃあ…

「魔法が使えたりしちゃいます?」

「俺は無理だが、魔術師はいるぞ?」

どうやらタイムスリップでも、天国でもそして受付の人でもなく、  
ここは異世界……ベタな!

「で、お前は誰だ?」

「あっはい。私は板垣 薫と言います」

「そうか、薫…俺はイシユだ」

「イシユさんですか。助けをいただいても」

とにっこり微笑んでお礼を言うと、なぜか赤くなるイシユさん。

「いや…気にするな。イシユでいい」

倒れてましたか。(後書き)

始めましてっ！酢昆布です。

甘めなラブコメにしたいですが、初めて書きます。

不定期な更新ですが、よろしく願いますっ。

コメント、応援でもバッシングでもなんでもいいんでくださると、  
起動力になります。



倒れてたんだ！

王城勤務、7番隊、隊長のイシュは今日、自室にこもって始末書を書いていた。

全くあいつらは…。イシュの部下が不注意で、女王お気に入りの花瓶を割ってしまったのだ。

イシュに免じて許してもらえたものの、本当だったら極刑もんだ。それで今に至る。もともと始末書は花瓶を割った本人が書くはずが、持ってこられたのは余りに残念な文章であった。

これでは、許してもらえるものも許されないと、隊長自ら手直ししているわけである。

「隊長お茶持つて来ましょうか？」

その声をかけるのは、少々影が薄い、7番隊副隊長、ルーさんこと、ルシファールだ。

影が薄いものの、剣の腕は確かだ。

「えっああ、居たのか。頼む。」

ルシファールは存在を無視されていたことを気にする様子もなく、お茶を持ってくる為に席を立つ。

イシュもまた作業を続けるつもりだったのだが、突然驚いた様な声がかかる。

「どっしたっ！」

「おっ女の子が、倒れてます。」

取り合えず寝室に運んだのだが、少女の格好は不思議だった。

白い太ももが見えてしまっているスカートに、何かの紋章が書かれたジャケットのようなもの。

イシユは少女をまじまじと観察する。

ルシファールはいまお茶を取りに行っているので、へやに少女と二人つきりだ。

「可愛い…」

思わずつぶやく。

長いまつ毛に、しろい頬、眉間にシワがよっていて苦しそうだ。

「ぐるぐる…」と呟いていたのが気になるが。

イシユは何かに引つ張られるように思わず少女の頬にキスをする。

イシユの父は割と残念な顔だったが、母が美しかった。

どうやらイシユは母に似たらしい。小さな頃から女につきまとわれ、鬱陶しいと思っていた所だ。

それが……こんな気持ちになるのは始めてだった。

「何をっしているんだ俺は…」

イシユは気を落ち着かせながら自室に戻って行った。



倒れてたんだ！（後書き）

はいっイッシュさんー目惚れです。

いいですねーひとめぼれ。王道です！

## お家の問題

イシユとの自己紹介を簡単に終えたし、ちょっとコレからの事を考えてみようと思う。

異世界トリップって．．．引くわ！自分！ベタ！しかも魔法って．．．  
．．．楽しそうだけどさあ！

あっそっすいや食文化ってどうなんだろ。ムシとか食べれないぞ、私は。いやそれよりも寝る場所。まさかここに置いてもらえるなんてそんな話があったらいいけどね！でも仕方がない、全くアテのない私は会ったばかりのこの人に頼るしかないのだから。ちらりとイシユを見上げると明後日の方向をむいてなにやらぶつぶつ。

スゴく真剣そうだし、何となく邪魔出来なくって、お家のことについてお伺いを立てようと思って開いた口を閉じて、イシユの意識がまたこちらに戻るまで待つ事にした。

やる事もなくて、目線をフラフラと動かしていると、不意にドアがきいっと細かい音を立てて開いた。う、うわ、ビックリした。入ってきたのは、目じりの下がったちょっと地味な感じの男の人。うーん、誰だろう。というか私はどうなるんだろう。違法侵入とかで捕まったりしないんだろうか。私もビックリしたけど相手の人も私を見ると目を少し見開いた。

「あっ目さましたんですね。大丈夫ですか？」

ということは私を保護してくれた人の一人なのか。そうだお礼、ちやんとしなきゃ。いやもうホント、死ななくてよかった。

「あつえつと、はい。ありがとうございます」

座ったままだけど、頭を下げてお礼を言うと、ニコニコ笑って頷いてくれた。ああ、いい人だこの人。そんな人に会えたのが嬉しくって私も微笑み返していたら、イシュがいつの間にかぶつぶつをやめてこちらの世界に戻ってきてた。

「お前も自己紹介したらどうだ。ルー」

さっきの男の人を上から、威圧しているような言い方。てことはイシュ、上司なのかしら。

「そうですね。失礼しました。私はルシファールと言います。7番隊で副隊長やってます。ルーとか適当に呼んでください」

ああ、こちらの名前もなんと日本からかけ離れた．．．というかそれよりも気になるのは、7番隊？副隊長？

「あつえつと、板垣 薫です。薫で良いです。．．．．．7番隊って何ですか」

単純な疑問だった。いや本当に素直に疑問だっただけなのに、私になにか変な事を言ったらしい。2人とともに微妙というかなんというか、変な顔でこちらを見て一言。

「知らないのか」

うん、まあ知らないよ。知る訳ないじゃん！と開き直ってみても、生まれてしまったんだコイツ的な空気は消えないのだ。ここはあまりがたく説明を受けるべくイシュをお願いしてみよう。

「あの、なんていうか、頭打ったから記憶がないのかなー？みたいな。あ、あの説明とか・・・していただけますか」

うん、我ながらよくあるいい訳だけど状況が状況だけに、すぐリアルだ。

と、説明を聞き始めたのは良いものの……長すぎだ。1時間は喋り続けている気がする。ルーさんは既に寝ている。

いいなあ。私も寝たいよ……でも説明を受けてる身として、寝てはいけない気がする。イシュ眼力すごいし。

まあ、話をまとめると、世界は4つの大陸に分かれていて。

南がサバ。農作に長けた国。

東がビンパール。武術に長けた国。

西がウエリントン。鉾山が沢山ある国。

北がノーデル。海の漢が住む国。

ここはビンパールで、城には10番隊まで部隊があるそうだ。その中の7番隊が1番強いらしい。そんでもって、有名ならしい。

だからさつき驚かれたのねー。あ。ちなみにイシュが隊長だそうです。すごいなあ、強いんだなあ。

「最初から説明したほうが良いとおもったんだが……長すぎた。すまない」

「いえ、嬉しいですよ？ありがとうございます」

そんな、謝るだなんて、大きな声では言えないけれど、私的にはスゴく助かった。この国の基本といっても本当に初歩だけど……とにかく少し知識を得たから今度はコレからの生活に着いて考えよう。それよりもイシュさんがさつきから私の事をじっと見てくるんだけ

どなんなんでしょう。真つ正面から見返すと、少し難しい顔のまま頬をなでてくれた。

「薫が誰なのかとか、いろいろ気になる事はあるが。つらい思いをしたのだろう？無理に話さなくていいから、話したくなったら話してくれ？」

少しかすれた声で言われると、頷く事しかできない。イケメンパワー！それを抜いてもイシユはいい人そうだ。

今日はここに寝かせてもらえたりしないかななんて、期待を込めて微笑むとイシユがまた顔を赤くして、抱きしめられた。ギュツと。うをえっ?!ちよ、何で?!何でそうなる!驚きながらも、良い匂いがして思わず吸い込むと、イシユが口を開く。

「家は、あるのか」

ビックリしたし、何でいきなり抱きしめるのか意味わかんないけど、きたその話題!でもないです!って元気よく私が答える前にイシユが話したした。

「ないなら、ここで住んでもいいぞ?」

えっ?えっ?マジですか?ホントね?ホントなのね!ひゃっほう!超嬉しい。まさかホントに今夜ここに泊まれるとは思わなかった。今私の目は嬉しさを隠しきれずにららんと輝いているであろう。

「部屋もある」

どんだけサービス満載なのさイシユさん!おいしすぎる話は危ない



っていうのはもちろん知ってるけど、外で野宿なんて絶対にイヤだもん。特にこんな、得体のしれない世界では。」

「え、じゃあ、お言葉に甘えて。ありがとうイシュ！」

いけると思ったら押せ！という母の教えに忠実に勢いよく答える。やったー！寝床確保！にこにこ笑っているとイシュの私を囲う腕が強くなって、なんだか甘い空気が漂った。ん？とか思ってる時に、突然場違いな声が響く。

「あのー？隊長？薫ちゃん？」

さっきまで寝ていたルーさんである。影が薄いだけあって全然気がつかなかった。ちなみに今、まだ私とイシュはなぜか抱き合っているのである。えっえええ！は、恥ずかしい！とっさに離してもらおうとしてもイシュの強靱な腕はびくともしなかった。上から冷たい声が響く。

「いつからいた」

「最初からいましたけどっひい！」

抱きしめられていて顔は見えないが、相当怖い顔をしているようだ。

「まだ誰にも言うなよ。わかったな。あ？返事はどーした？」

「はっははいいつ」

「分かったら出て行け。」

ルーさんが出て行った音がする。  
うむ、イシユは少しさっ気があるようだ。気をつけねば。とか考え  
てたら上から声が降ってくる。  
今度は優しい声で。

## お家の問題（後書き）

イシユさんここではもうつべた惚れです。

## イシユの理性（前書き）

イシユ目線です。

## イシユの理性

「部屋すぐには用意できないから、俺の部屋でいいか」

聞くと薫はこくりと頷いてくれる。可愛い。

会ってまだ1日もたっていないのに、こんなに好きなのはおかしいと思う。

始めて見た時は衝撃だった。一目惚れ。

何か惹かれる。目を離せない。守りたい。

どうしたらお前は俺を愛してくれる？

抱きしめても抵抗しない所を見ると嫌われてはいなさそうだ。脈ありと受け取ることにする。

そこで不意に先ほどの事を思い出してイシユの眉間にシワがよる。

ルーだ。ちっやられたな。口止めはしたが、喋りはしないだろうか。

一応釘を刺しとくか。

そうだ、最初はばれないようにやらなくてはどんな事になるかわからない。

薫は可愛いから俺以外の男に言い寄られるかもしれない。

それを想像しただけで心に黒いものが立ち込める。

そんな事した奴は、もう二度と外に出れない顔にしてやる。

あとは女だ。いつもキヤーキヤー言いながらついてくる女達。鬱陶

しい以外の何物でもない。

しかし女は陰険だ。ネチネチいじめられるかもしれない。そうはさ

せないがな。

考え始めるとキリがない。

でも大丈夫、薫は俺の物だとゆっくりゆっくり知らしめて行けばいい。

だれも手を出さないように。

といるいる考えていると、背中にまわった薫の手がシャツの裾を握りしめてくる。

ビキツッと動きが止まってしまふ。

理性だ。理性だ。理性だ。理性だ。

大丈夫。大丈夫。俺は大丈夫。

そう唱え続けないと理性がちぎれそうになるくらい殺人的に可愛い行動だった。

「薫？寝室にいくか？」

気がついたらもう夜更けだ。

「行きたい」

それを聞いて、イシユはさっと立ち上がる。

重いからいいと少し抵抗されるが、何も言わず抱き上げる。

寝室に向かう途中、メイドのマーサに女物の夜着を持ってくる様伝える。

ここにそんな物があるのか少々不安だが、優秀なマーサだ、何とかするだろう。

寝室につき、薫に風呂に入るかと聞くと、入るといっているので、今度は風呂へ向かう。

薫が風呂にはいつている間、廊下で待っているとマーサがやってくる。

「イシユ様、こちらでよろしいでしょうか。」

黒いレース編みの夜着だ。薫によく似合いそうだと想像しながら許可すると、マーサが中に入って行った。程なくして薫が出てくる。

しろい頬を蒸気させて、髪をあげているので頂が見えている。  
そこに黒いレース編みだ。色っぽい。

筋金のようなだったはずの理性はもう糸のようにちぎれそうだ。

今度は歩くというので2人並んで寝室に帰る。

それにいまの薫を抱き上げるのはいろいろヤバそうだ。おもに俺の  
理性が。

ベットに寝転ぶとすぐに寝息を立てはじめる薫は、俺を信用し過ぎ  
なのではないだろうか。

薫の無意識、隙があり過ぎの行動が俺を誘惑する。

思わず抱きしめると、んつと小さな声を上げる薫。

可愛いくて、さらに強く抱きしめる。すると寝言だろうか、小さく  
俺の名を呼んだ。

…なにかが切れる音がした。何がって理性が。

薫に覆いかぶさって、首に顔を埋め香りを吸い込む。

いい香りがする。俺と同じ・・・石鹸の香りだ。

今度はそのまま首筋を舐める。甘い。いままで食べたどんな物より  
甘美な味がした。

優しいキスを繰り返す。キスが耳まで達し、耳を舐める。甘噛みす  
る。

唇をペロリと舐めた所で薫がまた声を漏らす。

そこで我に返る。ダメだ。

さっと離れてもとの位置に戻る。でも、薫の香りが懐かしい。

初めのほうこそ我慢していたが、しばらくたって、また薫が声を漏

らすので我慢できなくなって抱きしめて眠った。



## イシユの理性（後書き）

やっちゃんいましたね！イシユさん！

笑顔を向けられてもヤバイです。

突然ですが、時代背景。

そこそこ古めかしいです。でも水洗トイレとかお風呂とかあります。

洗濯機はないです。微妙ですみません（、、、）

## エマとサラ

目が覚めると、イシユの腕の中だった。またしても。

イシユは抱きしめるのが好きなんだ。絶対。

まさか所構わずいるんな人にやってたりするんだろっか…？

そう思っただけになる。何で？

昨日はすごく疲れていたから、お風呂に行っただけから何も覚えてない。

記憶喪失みたいなの？！うわーっ

イシユはまだ寝ているので一人で悶々と考えていると、イシユがもぞっと動く。

「おはよう」

「ん。おはよう。」

そこまで言うと、なぜか頬にキスされる。

えっ。なに？いまの自然な流れ！おはよう、ハニーみたいな！！甘い！変だコレは！

でも居候している身として、我慢出来る所までは我慢したいと思えます！よし！私偉い！！そっぴいやお腹空いたなあ…

「イシユ、おはよう。朝ご飯はどうするの？」

「…マーサが用意して…持ってくる。」

まだ眠いみたいで、途切れ途切れに言う。朝ご飯はまだ先になりそう。一人で起きているのも嫌なので、もう一眠りしようとした所で、ドアがぱっ！と開け放たれる。私はびっくりしたけど、イ

シユはビクリともしない。

入って来た人は、年配なんだけど洗練したふいんきがあつて、豊かな茶色い髪をお団子にして結び上げている可愛いひとだ。着ているのはメイド服のみただけど、あんなじゃなくてもっと、上品な感じ。

うん、ていうか誰?!これは、まさかのお手伝いさんだろうか。そう考えるとイシユはお金持ちなのかな、部屋も大きいし、広いし、いやでもカナダ辺りではお手伝いさんは普通って聞くし……文化の違いだと思つておこつ。

「イシユ様!起きてください!マーサはまだそちらのお嬢様のお名前もお聞きしていないのに、ずるうございます!朝食の用意はできています!持つて来てくれなどとはしたくない事は言わないでくださいね!!さあ!起きる起きる!」

可愛い見た目からは想像もできない様な声を出す人だなあ。そうそれはまるで……お母さんなんだかとても懐かしい。私がそんな事を考えているなんて想像もしていないだろうマーサさんは私にっこりと笑いかけてくれた。暖かみのある人だ。

「イシユ様は、しつかり準備して来てくださいね。薫様はこちらはどうぞ」

私がマーサさんに連れられて部屋を出る時もまだイシユは起きてなかった。朝弱いんだね……案内された部屋には5人ほどのメイドさんがいた。マーサさんがその中の2人を前に出して紹介してくれる。

「おはようございますっ薫様！」

「こちらの2人が主に薫様のお世話をする事となります」

思わず耳を疑いました。 . . . . は？ちよつ、えっ私居候だし、そんないやむしろキッチンでジャガイモの皮むきしてる位がちょうどいいのに！なんでそんな . . . . 気まずいよ！それ以前に申し訳ないよ！

「そんなっ！なんか側近みたいな！申し訳ないですから！私はもう適当に、なんていうかホラ、雑用でもしておくので . . . . そんな物つけられる身分ではないですし」

何か変な事を言っただみたい。なんだかすごくニヤリとされた。

「いえいえ、私たちは薫様を慕ってお世話をしたいと思ったので、遠慮などなさらないで下さい。私、サラと申します」

じつ自己紹介が始まっちゃったよ！これもう引き返さない感じ？助けを求めてマーサさんを見ると、またニヤニヤされた。多分、助けはくれない。うわあああ、もう仕方ない。流される他なさそうだし。

サラは見事な赤い髪に、少したれ目の、優しそうな顔だ。もう1人の青い髪に碧眼の子も挨拶してくれる。

「私はエマと申します。」

エマかわいいーっ！なんだかみんな人当たりが良くて優しくそう。私も挨拶をして自己紹介を終えると、早速身支度が始まった。顔を洗う。着替えさせてもらう。髪を結びあげる。

途中まではよかったけど流石に着替えるのは恥ずかしかった。でも何で私は流されてるのかって？ドレスの仕組みが分からないんです。難しいんです、着るの。お正月にやる着物の着付けだと思って我慢しました！

着ていた夜着もそうだったけど、またしても黒だ。そういえば、私の制服はどこだろう？聞くと保存してあるそう。よかった。

身支度している間に聞いたんだけど、イシユがあんなに心をすぐに許した女性は初めてって。え、それってイシユがそういう人種なんじゃなくて？まあ、マーサさんたちがこんなに良くしてくれるのは多分、珍しさからだし、感謝しよ。

さらに言う私の側近？になるためにトーナメントがあり30人の中から選ばれたらしい。もちろん監督マーサさんで。

「それにしても、イシユ1人暮らしてしょ？このでかい屋敷に30人の使用人は多いでしょう。え？執事もいれたら31人？いや多い」

「正直私もそう思いますけど、貴族なので。仕方ないと思いますよ？」

き……ぞ……く？

「ええええええっ?!」

ホントにビックリだよ、どちらかという文化にだけど。日本からはかけ離れてるなあ。って、有名な部隊の隊長でしかも貴族って、どこのエリートだよ！

「ご存知なかったんですかっ?!」

当たり前だよ知らないよ！昨日会ったばかりかだってば！私！ただの！居候ですから？

朝食を食べに行くまでの間、エマとサラがいろいろ話してくれた。2人とは上手くやれそう。よかった。

## エマとサラ（後書き）

ノいっぱい新キャラ出てきました。名前忘れるかも…。  
メモメモっ！

## 朝食の会話

朝食。いろいろあつてがっぽり忘れてたけど、食文化。どうなんだろう。

朝食になんか変な物出たら泣きそうです。ぐすん。

かなり覚悟を決めて行ったけど、普通だっ！よかったーっ！

嬉しさも助けて普段の数倍食べる。あとから聞いた話によると、すごい食べっぷりが良いのでコックさんに気に入られてしまった様です。嬉しいのやら、恥ずかしいのやら。

ここはなんかテラスの様な作りになっていて、吹き抜けだ。日の光が気持ちいい。

イシユと食べているけれど、映画に出てくるみたいにすごい長いテーブルとかではない。もちろん。

割と近めだ。イシユはさつきから少し不機嫌そうにむすつとして食べている。低血圧？

エマが耳打ちしてくれた所によると、

「イシユ様が朝あんなに機嫌が良いのは初めてですっ！」「らしい。普段どんだけ不機嫌なのよ。」

「美味しいね。イシユ」

と微笑んでみる。……満面の笑みが帰ってきました。眩しいです。星が飛んでる。星が。

「昨日はよく眠れたか」

「うん。安眠できたよ。ありがとう」



「そうか…今日はどうするんだ？俺は城に行かなきゃいけない。…薫もくるか？」

「え。いいの？仕事でしょ？」

「ああ。ただし俺から離れるなよ？」

こうしてお城に行く事が決定しました。行くって言ったのは完全に観光気分だけだね。

でもこのままじゃ格好がなんか…的な事を言われたので再び着替える。

今度は白をベースにした花柄のドレスだ。ドレスといってもワンピースのような物で漫画に出てくる様なものっそいふわふわドレスなんかじゃ勿論ない。

支度を終えて外に出ると馬車の用意ができていた。イシユはもう既に外にいて、少し待たせてしまったようだ。

「お待たせ」

顔を上げると、イシユの顔が赤い。口元を手で抑えている。

どうしたんだろー？

はっ！まさか笑ってるのか？

よく見ると肩が震えている事もなくはない。

そーだよね…。折角可愛いのも着ても、私が着るんじゃない、ちんちくりんですよね。ははは。うん、笑えない。

「薫、可愛いな。似合ってる」

うわ、なんか、なんか、なんか恥ずかしい！

あーっ多分、今顔赤い！

不意打ちはすると思いますっ！

ルックス最高だからそんな事して引つかかった人いっぱいいるんだろっなあ。

そう思つて少し落ち込む。さっきもあつたなこんな事。何でだ？

そんなこんなしてる内に、馬車に乗り込む。

なぜか私はイシユに後ろから抱きかかえられるように座っている。

お膝にお座り状態だ。

もちろん抵抗はしたけれど、やっぱりお世話になつて身だし、期限を損ねられたら野宿になるかもしれないということが頭をよぎつて取りあえず、我慢でいくことにする。頑張れ！私！

馬車の中は苦痛だった。快適ではあつたけど、イシユが。可愛いと囁かれ、ほつぺたに口付けられたりした。何なのこの人。

1度は本当に逃げようかと思つた。

なんかおかしくないですかイシユさん？

昨日はこんなじゃなかったじゃないですか。大体会つてまだ1日ですが。

おかしいとは思つただけど、本当に嫌なわけじゃないから拒めない。

薫は自分のそんな気持ちに戸惑っていた。

-----

主人が出発した後、使用人たちは。

「イシユ様ベタ惚れですねー」

「薫様も何だかんだ言っ  
てまんざらでも無さそ  
うよね。脈ありかし  
らね？うふふ？」

「薰ってあの良く食  
べてくれたお嬢ちゃん  
かい？ありゃ、いい子  
だね」

「当たり前ですよっ！  
イシユ様の見込んだ子  
ですからね？」

「どうなるのかしらね」

「ふふっ楽しみですね」

と人の恋話に花を咲かせていた。

## アルテール王子（前書き）

――点線のしたからイシユ目線です。

## アルデール王子

薫の恥ずかしさも限界に達した頃、城に着く。

「ふうっやっ到着いた！」

着いてすぐ馬車の中もといイシュの膝の上から抜け出してきたから、背中にイシュの視線が痛い。  
うろうう。

「離れるなと言っただろう？」

そう言って手を絡め取られる。

離れるってイシュ…たかが3mぐらいじゃないですか…！  
あ。抱っこじゃないんだ。城だから？あっ！

「ねえねえイシュ。城って事は王子様とかもいるの？」

「…いる」

心なしかイシュが不機嫌になった気がする。でもいるのかー王子様！  
良いないいな王子様！会ってみたいー！ってそんな簡単に会えないか。

入ってすぐ脇道にそれて庭を歩いている。

バラが咲き誇っていてとても綺麗だ。ぽかぽかして気持ちいいし、  
今日はお散歩日和だ。

イシュと他愛もない話をしながら歩いていると正面から歩いてくる人物がいる。銀髪碧眼で顔立ちが恐ろしく整ってるひと。髪の色か

らなにまで、全部やっぱり異世界で、会う人会う人知りたくなる。

「イシユっ！正面から来る人、誰？」

イシユはまるで今気がついたというように正面を見据えて、その後でいかにも嫌そうに呟いた。

「……………王子」

えええ！？王子？会えないと思つてたのに簡単に会えちゃったよ！いやまで、いいのかそれでっ！王子つてもつところ、SP見たいのつけてるじゃん！しかし何なんだろうさっきからイシユは。王子を全然敬つてない。そんな会話をしている内に王子が近づいて来た。

「イシユが女性を連れてきているなんて珍しい。そちらのお嬢様、お名前は？」

海のような青い目をひゅるりと細めて笑う姿は、なんだかとても惹かれるものがある。なるほどコレが王子パワーか。

「薰です。あの…貴方は？」

「アルデルだ」

王子が答える前にイシユが答えてくれる。何だけど、すごく不機嫌です。あれ、ちょっと待って、呼び捨て？

「ちょっと待っててくれるか、薰。俺はこいつと話がある。」

え、なんか王子安くない？そんな友達感覚でフランクに接している

ものなの？……うん、異文化って不思議。取り敢えず平静を装って  
おじじじと。

「いつてらっじゃーい」

ひらひらと手を振る。話ってなんだろう？まあ仕事の事だろうけど。

――  
――  
――

「ん？イシユ。相当気に入ってるね？あの子の事。王子にそんな殺  
気のもった目を向けちゃいかんよ？君僕が薫ちゃんと話しただけ  
でこれなら、これから大変だよ？薫ちゃん可愛いからね？」

イシユは薫に聞こえない様、小さな声で言う。

「薫はダメだ。俺のだから。手だししたらお前でも容赦はしない」

「おっかないねー。冗談だよ冗談。」

「おまえの冗談は冗談に聞こえない」

「えっ？！なにそれちよつと酷くない？！」

「とにかく手を出すな。後、誰にも言うな。分かったな？」

「へーへー分かりましたよ。俺これでも王子なのに。泣くぞ。昔っ  
から変わらないねえイシユくんは」

2人は幼馴染である。

王子である立場を利用して薫の事に協力して貰おうと思ったのだが、

失敗だったかもしれない。

何たって楽しいのが1番と言う信念を掲げてしまっ程の、一言で言うところじゃらんぼらんだ。

公の場でこそシャキツとするが、普段は、先程も薫に自分の名を名乗るまえに名を聞くなど、失礼な奴なのだ。まったく。

それに、薫が王子の事をいろいろ気にしていたのも気になる。

俺だけ見て欲しい。

「取りあえず噂が広がらぬ様取り計らってくれ。」

「いいよー。イシユ、あの子まだ無自覚だけどね。後ちよつとだと思っよう?」

「……………」

「まあ頑張れよー。」

そう言っアアルデールは行ってしまっ。

薫の所に戻ると誰かと話している様だ。

あれは…親衛隊とか言っていつもしつこく付きまって来る女か…?

遠目でははつきりとは分からないのにイラつく。薫はあんなにはつきり見えるのに。

ん?薫?どうしたんだ?何だか様子がおかしい。

「イシユ様っ!」と言って鬱陶しい女が走り寄って来る。





## アルデール王子（後書き）

第1章はもうすぐ終わるつもりです） ^（ゞ

## タラシ疑惑。(前書き)

今回は目線がコロコロ変わります。  
分かりづらくです見ませんっ！

## タラシ疑惑。

イシュが王子と少し離れた茂みへ入って10分程経つただろうか。もつと少ない時間かもしれないが、実際、待つてる時間は長く感じるものだ。

イシュまだかなー。何話してんだろ。気になるなーっ。

でも覗いて嫌われてりしても嫌だし、暇だなあ……。結局の所、暇なんだなあ。私。

何か1人遊びを始めよう！うん！1人ジャンケンとか。……………絶対飽きるな……。

薫が1人うんうん唸る所に忍び寄る影が一つ。

イシュ様親衛隊 会員N0.3である。短く言うと、ストーカー3号である。

その熱心さは親衛隊でも幹部を務める程で、イシュにひつこく付きまとっている内の1人であった。短く言うと、重度のストーカーである。いろんな肩書きはあるが、一応貴族のお嬢様で、名をマリーナと言った。

実はイシュと薫が馬車から降り立った所からずっと後を付け、見ている。(ストーキングしている。)

今日もイシュ様は素敵であった。素敵であったがしかし、あの娘はなに?!正直邪魔だ!

曲がり並みにもイシュを慕っている者として、薫を捨て置く事はできない!あたりまえだけど。

-----

――――  
1人グリコに飽き始めた頃、突然、茂みから人が飛び出して来た。

「なっとなな?!」

キラキラとなびく金髪の髪だとか、真っ青な目だとか、明らかに外人さんデスネ!わかります。茂みから出て来て一瞬方向感覚がなかったのか、なんなのか、その女の人は今しがたやっと私を発見した。薫が自分のソレを眺め、かなしくなる程の胸をわっさわっさわ揺らしながら近づき、薫の前に立ったマリーナが堂々と口を開く。

「私はイシユ様親衛隊、幹部のマリーナと申します。あなたさつきから図々しくイシユ様にくっ付いてますが礼儀を知らないのかしら?」

「……まさか話しかけるなんて思っても見なかったけど?予想外の出来事に私のあまり多いとは言えない頭脳がくるくる回る。」

とりあえず返事をしようって、ん?イシユ様親衛隊ってなに……?  
「?親衛隊と言ったら、アイドルを出待ちしたり、追いかけたり、出待ちしたりする人たちだ。それが、イシユにも付いてるとか!……ぶぶ、おもしろい。というか、イシユって隊長じゃなかったっけ?もうちょっと厳しくしてるのかと思ったら、意外と緩いな城。」

ちよっと話がそれたな、えっと何だっけ、イシユにくっついてる理由?くっついてるといっつか、なんといっつか、居候なんだけどなあ。

「私、今イシユのところに居候してて、それである、手を繋ぐとか

はいろいろあつて……」

結局何が言いたいかというと、私のせいじゃありません！ってこと  
なんだけど……逆になんだか逆なでしちゃったみたいだす  
ネ。あーあ。

「まあっイシユ様の事を呼び捨てるだなんて！しかも居候？！手を  
繋ぐ？！あなた何者ですの！」

相当おこつてるなあ……遮られたし。いやまさか、名前のところで  
突っかかれるだなんて思っても見なかったよ！リベンジの為に再  
度言い訳しようとしたら、さっきまで真っ赤になって怒ってたマリ  
ーナさんが、こほん、と咳払いをして、体制を立て直す。

「まあ、いいですね。私達親衛隊でも手を繋ぐなんて事は日常茶飯  
事ですもの。私なんてこの間デートに誘われましたわ！」

と言つて少し頬を赤らめるマリーナ。妄想の産物である。

えっ？ちよ、ちよっと待つてよ、手をつなぐのが日常茶飯事つて、  
でも特定の人をデートに誘うつて、どんなタラシですか？まあ実を  
言つとそういう気配はひしひしと感じてはいた。だってさ、会つて  
一日の私にもほっぺにちゅうとかするし！異文化だと思つて流した  
のがいけなかつたか……今私の中でイシユのレットルが張り替  
えられた。いい人、から、タラシへ。

いやでも、やっぱりもう一つ位証拠をつかんでおこつ。じゃないと  
イシユが可哀想な気がするしね！うん。

「イシユは、親衛隊の皆さんにいつも優しいんですか？」

薫が嫉妬の炎に燃えているだろうと想像するマリーナはニヤリと笑ながら続ける。

「そりゃあ、イシユ様はいつも私達に良くしてくださいますのよ？ 会長などは特に」

嘘っぱちだ。完全なる嘘である。会長が特にと言えば、特に鬱陶しがられていたが。

はいはいはい、タラシ決定ー！なんだよイシユめ。さっきはちょっとだけ、ときめいたのに。

貝のように押し黙った薫を見てマリーナはほくそ笑む。いい気味。私を差し置いてイシユ様と親しくなるうだなんて、馬鹿がやることですわ。そのとき向こうからイシユが歩いて来るのが見える。

「あつイシユ様あー」

いつも通り、可愛く、可憐に走りよるものの、やはりいつも通りスルーされる。

だけど、いつもの様に心底めんどくさそうな顔はしない。かわりにイシユ様の目にはあの少女が写っていた。

「薫？どうしたんだ？」

多分私のゲンナリした顔を指しての事だろう。いやでも仕方ないよね！なんだかスゴく優しくいい人だなーっと思ってた人がタラシだったなんて！もちろん、感謝の気持ちは変わらないけれど、気持ちの問題は大きいから。

「いや……別にもないよ。大丈夫。イシュ、仕事は？」

なにげに話をそらしたけど、イシュはそれでも食い付いて来た。私のおごを持ち上げて、眉根をぎゅっと寄せる。

「言え」

命令系キター！というか何と言うか、ほんとそういう人ですね。でもそういわれると逆に言いたくなくなるよね！というか言えないですよ！言い訳しようと思っただけ口を開く。最後にちらりと写ったマリナさんは完全に蚊帳の外でした。

なんというか、まさか口喧嘩で負けるとは思わなくてちよっぴり放心中です。いやあれは口喧嘩じゃないな、断固としてなんでもないといい張る私にイシュが遂に攻強突破に出たと言った方が正しい。まさか、唇に、大事な事だから二回言うけど、唇に！キスされそうになるとは思いもしなかった。

まあ、全然よくないけどそれはいいとして、洗いざらい履く事になった私は現在、進行形でイシュのお話を聞いています。

お話によると、イシュは断じてタラシではないとの事。最後におまえは特別だなんだとか、照れながら言われました。え？そこ照れるところ？というかそれよりもね、一番の問題はそれを言われてまたしてもときめいてしまった私です。





## タラシ疑惑。(後書き)

マリナー登場です。

にくまれやくです。ちゃんと嫌な子になってますか？オロオロ。不安です。

でも、この子妄想癖があったりして、相当馬鹿なので、いろいろ楽しいです。

また出したいなあ。

## 運命的セクハラ。

おかしい、これはおかしいぞ、おかしい。

なんでこんなにイシユにトキメイてるんだろう自分。先程、お前は特別とかなんとか言われた私は、不覚にもときめいて、言われた時のそのまま固まってしまった。

とりあえず、この胸キュンを恋、と仮定するでしょう。

そしたら、正直自分でもドン引きする。恋愛はもつと重いものだ。少なくとも会って一日で好きになるはない。ないないない。だいたいイシユも恋人まがいな行動に出るのはやめて欲しい。

タラシじゃないにしても、あれは立派なセクハラだ。まったく。でも”特別”、なんて言われて気づかない程天然でもない。え、なにイシユは私のこと、好きなんですか！

「イシユは、なんなの。だ、誰か好きな人でもいるの！」

しまった、やっぱりそんな事を聞くのは図々しい気がして、変な事言っちゃったよ。イシユも変な顔をしている……. . . . .じゃない！私を見下ろすイシユのまなざしはなんだか、熱いです。

「好きな人？ 薫だな」

まさか、予想外だ。ふざけてるとしか思えない。とか思いつつもなんだか嬉しい私。あれっ？！繰り返し言うようだけど、私たちは会って間もない……. . . . .というか昨日会ったばかりの、そんな関係これが、一目惚れという物なんでしょうか。

「冗談？」

とりあえず、聞いてみようと思う。ちなみに私は冗談である事を願いたい．．．．．はずなんだけど。冗談だったらどうしようとか、そんな事を考えて背筋がひゅっと伸びたりもした。まあ、速攻で否定されたけどね！

「本気だ」

決して自慢ではないけれど、男の子に告白された事は、ある。けど今までは、ごめんね、で終わって来たというのに、今回は何が違うのか、なんだかとても断りづらいのだ。ここでさっきの事を思い出した。これを、恋だと仮定すると．．．．．うわー！いやだ、今なんだかスゴい事を自覚しそうになった気がしてならない。

「まあ、会って一日だしな。でもなぜか、惹かれるんだ。どうしようもなく」

追い打ちをかけるように言わないで欲しい。あとその熱い視線も。でも仕方がない事なのかもしれない、だって、順序だてて考えて行くと、私はどうしたってイシュが好きだ。おかしい！くはないけど．．．とても信じがたい。ふいに、イシュが私の手をギュツと握った。ああもう！だから止めてっばさういうの！さういうのがあるたびに．．．．．あるたびに揺らぐんだ。常識とかそんなのは捨てて、この人の所に行かなきゃって気になる。

次にイシュがアクションを起こしたりしたらもう、多分もうダメだ。常識を捨ててノックアウト。でもすぐに恐れていた事は起きてしまった。イシュは私と少し無理矢理めに目を合わせて．．．．．

「好きだ」

と呟いた。がーんつとまるで雷に打たれたように、ビリビリとイシユの気持ちが伝わった。ああもう、ゲームオーバー、はい私も少しは好きです。好きですとも。運命ってきつとこんな感じだ。上っ面では拒否したくても、心の底で肯定して、結局付いて行く。抵抗するのは無理だ。

「・・・私も、好き」

## 馬車の中で。

ああ、認めてしまった。私が肯定してからというもの、イシユの視線はもうとるところに蕩けてしまった。そしてニッコリ笑って言うのだ、好きだ、と。どうしたらそんなに恋愛にオープンになれるのかと不思議で仕方がない。

その後向かった執務室では特にやる事がなかったから、窓から外を覗いていたら部屋の中に連れ戻されました。無言でソファアに座らされるってことは、ここから動くなっということらしい。なんでよ？

イシユが仕事を始めたから、カリカリとペン先が紙を滑る音だけが部屋に響く。私来た意味ないなコレ。初めはお城を見てみたかったんだけど、恐ろしく暇だ。とうとうドレスのリボンと遊ぶのにも飽きた私は、イシユの観察を始めた。

イシユは集中していてこちらを向く気配がないけれど、ずっと通った鼻筋とさらさらの髪はここからでも分かる。それに、イシユの手は大きくて、少し骨ばっていて、さっき触った手のひらにはゴツゴツした豆が沢山あった。多分剣の練習をしていて出来たんだろう。――きゅん。

あ、また胸キュンした。努力する人は嫌いじゃないってじゃなくて！一秒ごとに新しい情報が刻まれてその度に好きになって行ってる気がする。一体どうした事だ。

イシユの観察は思っていたよりもスゴく時間をつぶしてくれた。でも大変なのはそんなことより、これからだった。そうそれは、帰りの馬車での事。

あ のとき、イシユは自分がタラシではないと力説してくれたけど、マリーナさんが言っていた事についてはノータッチだった。というか、私が聞かなかつた。だから、その辺が気になって、何となく聞いてみたのだ。

「マリーナさんがね、がイシユは親衛隊の人にいつも優しい、とかこの間デートに誘われたとか、会長にはすごく優しいとか言ってたんだけど、これ本当？」

別に素直な疑問だったのだ。他の意図なんてないはずなのに、イシユは無駄に艶やかな笑みを返して来た。

「気になるか？」

いやだから、そういうことではなくてですね……とか言っても無駄なことはわかつてる。ここは素直にうなずこう。しかしまだまだイシユの質問攻撃は続く。

「薫、嫉妬してたのか？」

嫉妬かあ、あの時はただただ混乱していたから、自覚がなかったただけでこれは、嫉妬……？うん、言われてみればそんな気がする。気がする程度ではあるけれど、これは驚きの新事実だ。流されている気がしないでもないけど。まあ、もうそういうことにしておこう。

ちらりとイシユを見上げると、……何て言っんですかね。すごく、嬉しそうです。何だか犬のような可愛さだコレは。

「薫、そんな嘘で嫉妬してくれたんだな。可愛い」

………っえ？嘘？嘘だったのあれ？仮にも嫉妬していた（という事にした）私としては、悔しい。

「嘘？なんか……悔しいっ」

嘘って……！

「ん。いつもついて来て鬱陶しいだけだあんな奴ら。優しくなんかした事ないぞ？」

それを聞いて少しホツとしてしまった。あー！もう、何なんだろうこの感じ！でもまだ少し気になるのは、デートのやつなんだけど。流石にデートは……ねえ？

「えっじゃあマリーナさんが言ってたデートは？」

はい、イシユはコレにも即答してくれました。

「妄想の産物じゃないのか？」

「……………」

まさかですよ。ことごとく騙された私は悔しくて悔しくて悔しくて………そういえば行きは膝に抱っこ状態だったけど、帰りは私の意思を尊重して、私は普通に椅子に座ってる。イシユが手を延ばして片手で私のほっぺたを包む。

「それから、俺が優しいのは薰だけだから、俺はタラシじゃない」



うわっ……それってそれってすごい殺し文句だとも思う。またきゅんって、きゅんってなったもん今！血が顔に集まって来て、ほっぺたが熱い。多分今真っ赤。思わず下を向いてもすぐにイシユの手が、起動を修正して、ごく自然にキスされた。考える間もなかったよ……！

私も熱い上に、イシユも唇が熱い。

「っふ………」

声を漏らしたすきまに舌が入り込んで来る。口の中で舌をつつかれ引つ張られ、上顎をねっとり舐められる。

「ん………あ………」

頭がクラクラするけど、酸欠にならない様、時折離れながら何度も何度もキスされる。……うん、なんか長い。私はこれがファーストキスだけど、世界基準的に見てもコレは長いはず。それに突然深いやつだし……！

イシユの唇が離れた。

「ん………ちょ、セクハラ！」

かっぺにうるんでくる目でイシユに訴える。

「タラシじゃないと言ってるだろう？真っ赤になったりして、可愛すぎるんだ」

「だっ、だっ、それはイシュが…」

「悪かったな…」

と言いながらまた顔を近づけてくる。イシュは絶対反省してない。

「あっ！また…」

拒む間もなくキスされてしまう。

どんだけキス好きなんだよ！キス魔か！

また舌を入れられては堪らないと、硬く口を結んでおく。

いつまでも口を開けない薫に業を燃やしたのか、イシュが強硬手段に出る。

イシュの指先が脇腹の辺りで動く。

「あっひゃひゃっつ…やめっ…あっ…う…」

そのすきを逃がすまいとイシュの舌がまた入り込んで来る。

ああ、もうダメだ…。

イシュに逆らわない方が良い事を学んだ薫であった。

馬車の中で。(後書き)

短くてすみませんっ

第1章はこれで終わり…にしたいですけど、後ちよっと続きます。

## 贈り物

馬車の中で強制的にイチャイチャさせられながら家に帰ってくる。

「なっ長かった…この道のり…馬車はもう、イヤ…イシュとは乗らない…疲れる…」

初めは新鮮だった馬車も今では、よほど強制イチャイチャマシーンに見える。

小さな呟きだったはずなのに、イシュにはバツチリ聞こえていたみたい。イシュはクスリと笑みをこぼしながら耳元で囁いた。

「毎日乗るぞ、交通手段だからな？」

う、わ、魔王です…魔王君臨…

どこことなくご機嫌のイシュとは反対にどんよりとした空気をまとっている薫にサラが不思議そうに聞いた。

「何かあつたんですか？」

「イシュに…キスされた…何度も…キス魔……………イシュの馬鹿……………」

ファーストキスを終えたよく分からない疲労感と、さっきのイシュのセリフがぐるぐる回って私の思考力なんて残っているはずもなく

しまった、と思った頃にはきゅーっと周りのメイドから声が上がっていた。いやなんで周りも聞いているの？

とも思ったが、そう言う話題には女子って本当、地獄耳だと思う。

はあああ。

それに、その次はきつと…

「あの堅物のイシユ様が！キスですって！薫様、ぜひご感想をお聞きしたいですわ！」

ほら来た。なんて言うの、詳しく聞こうとする女子。クラスに1人はいるよね…

うっかり口を滑らせた自分を呪いたい。

別に感想なんかないし…気持ちよかったですとか？

ぼーっと考えてたらイシユに抱き上げられる。

驚く気力もない。と言うか、もう慣れた。自分の対応力って凄いなと思う。

よく考えたら、異世界に来て1日でイシユと両思いだし、側近ついちゃうし、王子と会っちゃうしで、

小説の中でも一日でこれをやったのけた人はいないと思う。うん。

ギネス？ギネスいっちゃう？

イシユが向かった先はお風呂だった。

入ろうと思つて中に入ろうとすると、イシユも一緒に入ってくる。

「なっ何！1人ではいるよっ?!」

これには流石にびっくりだ。イシユめ、何を考えている。

「一緒に入ってもいいだろ?…ダメか？」

「ダメか?…ダメに決まってるでしょおお?!」

私の余りの剣幕にイシユは渋々出ていったけど、なんなの、これがここの文化なの?!

……そういえば、告白してからのイシユは油断ならない。そしてなんか性格変わってませんか？！  
あれが素なのかもしれないけど！隙あらば触ったり、キスしようとしてくる。  
拳げ句の果てに、魔王だ。ひどいひどい。

お風呂は流石、大貴族だけあってでかい。とてつもなく。銭湯みただ。

お風呂にエマかサラにお願いすれば、好きな入浴剤を入れてくれる。馬車から降りた時駆け寄って来たエマに泡をお願いしてみたんだけど、もう入れてくれたみたい。

すごい、仕事が早い。後でお礼を言っておこう。

…そんな事よりも。泡風呂はミスチョイスだったかもしれない。お風呂が大変な事になってる。

想像してみたい、とてつもなくでかい銭湯に、泡だ。いっぱい

の泡。  
シャワーを浴びて湯船、否、泡に浸かる。あー、何か雲みたいー。

暖かいお湯につかっている内、疲れがほぐれていつもの調子に戻ってくる。

イシユには私の事ちゃんと全部話すべきだろうな。異世界のこと、ウサギのことも全部。

信じてくれるか、正直その確率はすごく低いと思う。良くて妄想家だと思われるくらい。

余り長居すると廊下で待っているであろうイシユがかわいそうなので、そろそろ出る事にする。

昨日もそうだったが、何時の間にか用意されている夜着は今日もセクシーだ。

別にスケスケだったり丈がやたら短かったりする訳じゃないんだけ

ど、なんかエロい。

そう言えば、私の洋服とかは誰が用意してくれてるんだろう？後でエマに聞いてみよう。

夜着に着替え、外に出る。イシユはやっぱり待っていてくれた。悪いなあとは思っけど、やっぱり嬉しい。

「行こうか。イシユ、これからどうするの？」

お風呂に入ったりしてすっかり夜気分だけど実はまだ昼だ。

お風呂に連れて来てくれたのはイシユなりに疲れた私に気を遣ってくれたんだと思う。

「これから…お前にはやる事がたくさんあるそうだぞ？」

「へ？」

向かったのはイシユの部屋の隣。

「ここは？」

「お前の部屋だ。」

イシユがニコニコしながら言う。

「私の部屋？」

そっぴやあつたなそんな話。

中には5人程のメイドさんと、エマとサラとマーサさんがいる。それとたくさん箱。高い天井に届きそうな程のタワーが幾つもある。

「イシユ…この箱は…?」

「それはイシユ様からの贈り物ですよっ!」

イシユの変わりにサラが答えてくれる。

今までの服全部、イシユからみたいだ。何時の間に用意したんだろ  
う? 謎だ、でも、すごい嬉しい。

「イシユ、ありがとう」

「別に、これぐらいならやるし、喜んでもらえたなら何よりだ」

イシユは私の目をじい、と見つめてすぐにシュッと目を細め、キス  
をした。

唇に……あれ? あれ? んんんんんんー? おかしい! 人がいるの  
に!

きゃーっと歓声が聞こえる。あ、デジャヴ。

長い。人がいるのに! 私は離れた時に鳴ったちゅう、という音にと  
うとう我慢できなくなって叫んだ。

「ひとがいるのに!!」

イシユは悪びれる様子もなく笑ながら言う。

「恥ずかしいのか?」

当たり前だよ! 異世界だからこそ分からない、これは、私に変なの  
か、イシユが変なのか。

でもとりあえず私が一回一回死ぬほど恥ずかしいから、ここは私に



合わせてもらおう。

「イシユ！ちょっとしばらくき、キスとかしないでよね！」

そしたらイシユは平然と言い放った。

「いや、無理だろ」

イシユの思考が無理だろお、これは困った。けどもこちらもある意味死活問題なのだ。

「なんと言おうと禁止！」

「薫、考え直…」イシユ様！薫様はこれからやる事が沢山ありますので、出て行ってください！」

そろそろ対抗の意見がつきそうなとき、何ともナイスタイミングでマーサさんが割り込んできて、あれよあれよとイシユは追い出された。あ、ありがとう…！大好きだ！

「イシユ様に春が訪れたのはいいですが、全く…薫様も何か困った事があればいつでも私を頼ってくださいね」

う、うう！ここに味方が！姉御お！感動しました！

「薫様っ私達もっ！私達にも頼ってくださいね…！」

他のメイドさん達も言ってくれる。

うわぁ！皆ぁ！私達が友情を深めた一瞬だった。

「さあ！薫様！贈り物を解きますよ！私達だけでやってもよかったです！  
のですが、こう言うのは自分で開いた方が楽しい物でしょう？」

流石！女心をよくわかってらっしゃいます！

こうして私達は仲良く贈り物を解き始めたのでした。

## 贈り物（後書き）

1章が終わらない！

イシユ目線やろうか迷ってます。

希望があればお願いします（>人< ;）

襲われる?!

初めの方は、皆で喋りながら、和気あいあいと開けていったのだけ  
ど、

余りの量の多さにそんな余裕もなくなり、今は黙々と誰も喋らない。  
それでも根は女の子、楽しい。

イシュがくれたのは、まず、ドレス。開けたらマーサさんがクロー  
ゼットに運んでくれるんだけど、そのクローゼットに入りきるのか  
不安な程沢山ある。

後は小物、帽子、バッグなどなど、どれも豪華そうな物ばかりで下  
手したら家一個買えるはず。

中でも一番すごいのは、アクセサリ。目がしばしばする程キラ  
キラんだ。

大振りのダイヤモンドが出て来た時はどうしようかと思ってしまっ  
た。

一番恥ずかしかったのは下着だろうな。多分。

イシュがこんな物まで買っていたのだと思うと、恥ずかしいけど、  
それ以前に…際どくないですかああああ！イシュめ！

全部開け終わった頃にはもう夜だった。あの量をこの短時間で開け  
切ったのはすごいと思う。誰か褒めて！

「ついについにやりましたね…！薫様！」

皆も感動に浸る。それぐらいすごい量だった。元気なのはマーサさ  
んぐらいだ。

なんで元気なのがわからない！！

「薫様？贈り物も解き終わりましたし、部屋をまわって色合いを決

めましようか？」

ええええ！！まだあるんですかあ……。相当げんなりした顔だったんだろう。マーサさんが

「かなりお疲れの様なので、明日に回してもよろしいですが、そうしますと、今日もイシユ様とおやすみになる事となります、良いんですか？」

そっそっ言う事があああ……。なんか脱力感激しいです。

「その事については、頑張るんで……。今日はパスで」

「かしこまりました」

マーサさんは平然と言うが、周りの方達は私の言った「頑張る」にいろいろ勘違いした様で、  
顔が真っ赤です。その意味に気づいた時、私の顔も真っ赤になったと思う。

「ちっちちち違うから！！あれはああ言う意味じゃないから！！」

「えっそっなんですか？あら残念。でも薫様、イシユ様は絶対やる気です」

「うわあ！ねえ、私どうすればいい？！」

「あのイシユ様ですからねえ、諦めて受け入れるしか……」

「裏切り者っ！！！！」

てな感じで、あっという間に寝る時間。  
夕食の時もなんだか熱っばい目で見られてたし、もう私、どうしたら良いのか!!  
そしたら案の定、抱き上げられて連れ去られる。

「薫、寝に行くぞ」

イシユさん…笑顔が怖いです。

ヤバイこのままじゃ！確実にやられる！

どうにかして気をそらさねば!!

「いつイシユ！洋服とかありがとっ！大切に着るね!!」

作戦1 おだてる!!

「そうか…気に入ってもらえて良かった。さあ、寝に行こう?」

ああああ!!!!ダメだああ!!

いろいろやってみたけど、全然ダメでしたよ…。結局おとなしく連行されてます。はい。

イシユはもうご機嫌すぎて怖いぐらいご機嫌であります…はい。  
部屋について、ベットの上に優しくおろされ、瞬く間に押し倒された状態になる。

手首を抑えられて、身動き出来ない。

「っ!!!!イシユ?!」

「もう我慢出来ない……」

やっやっぱり……さよなら私のヴァージン！

「キスしてもいいか？俺、長いこと我慢しただろう？」

………へ？

ああ、そう言えばキス禁止令を出しましたね。うん。  
……気にしてたんだ！。なんか可愛い。

「可愛いとか言うな。お前のが可愛い」

あ。口に出してました？

「で、いいか？」

とか言いながらイシユは私の首筋に顔をうずめる。待ってよ！セリフと行動があつてない！

………つて！………あつ！

「ひゃあっ」

「ん？どうした薰？」

「どうしたじゃなくて………っなんで首筋舐めるの」

そうです。はい、首筋舐められました。

イシユの赤い舌がチロリと見えて色っぽい。でも、恥ずかしいし！

それにたいしてのイシユの答えは、

「可愛いから」

ちーがーうでしょおおお??

でもイシユはそんな私の事なんて全然察してくれなかったみたいで話題をずらされる。(と言っても同じような話だけど...)

「で、もういいよな?キスしても」

「そつそんな事言われても...人前でしないって約束できる?」

「...ああ」

「絶対に絶対だったら良いよ」

結局許してしまう私:なんて弱い!

これからの解決法なんて考える隙もなくキスされる。

「ん.....むっ...」

我慢してたぶん激しい気がするのは気のせい?

角度を変えて何度も何度もキスされる。

イシユの舌が入り込んで来る。熱い...

「っ...ふっ.....」

ああ、まただ。イシユと始めてキスしたときみたいに頭がクラクラする。

唇が離れたと思ったら今度は首筋にキスが降ってくる。



「いたっ！」

小さく痛みが走る。何？  
イシユが顔をあげて囁く

「痛かったか…？すまない。お前は俺の物だと言っ印を付けておきたかったから…」

印？！なんだよそれ！！

「薫…今までそう言う関係になった男はいるのか？」

そう言えば、彼氏はできた事がない気がする。

お兄ちゃんがいつも男の子に何か言っつと逃げちゃうんだよなあ…。

「いないよ？」

「そうか」

うん。ていうか何その質問？いるって答えていたらどうなったんだろ……

1人恐ろしい思いに浸りながら眠りについた薫であった。

襲われる?! (後書き)

次は番外編ですっ (^ ^ )  
-

## 番外編 シスコンお兄ちゃん

薫は可愛い。世間一般では美少女と呼ばれる程に。しかし、彼女に一度も彼氏がいた事がないのと、”そこそこ”にかモテないのには理由がある。

-----

薫の兄、板垣 海斗は完璧人間と呼ばれている。実際のところ、完璧ではないのだが、顔が良かった。普通の男がカップパ卷きだとして、彼は大トロだと言っても過言ではないだろう。

そして、スポーツ、勉強はいつも並を保っている男であった。並、である。

顔が特上の男が並を保っていたら、恋する乙女の目には自然に完璧に見えてくる物だ。

まあ、その完璧人間には1つ大きな欠点があった。可憐な乙女の恋心を軽々と踏み潰せる程の欠点だ。

彼は重度のシスコンであった。

時は授業中。

海斗は今日も女子のピンクい目線にさらされながらノートをとっているが、考えるのは可愛い可愛い妹の事である。

薫、今なにしてるかな…変な男に絡まれてたらどうしよう。とりあえず男は抹殺な。うん。

薫は高1、海斗は高3。

この時間帯、薫が学校を抜け出したりしなければ普通に授業を受け

ているはずだが、妹はとにかくモテる。何かあるか分からないのだ。それに今は一学期。害虫駆除も終わっていない時期だ。もう一度言おう、何かあるか分からないのだ。

心配で、心配で、お兄ちゃんはまともに授業が受けられないよ！薫！！

と、ちょうど良いタイミングで授業終了を告げる鐘がなる。

待ちに待ったお昼休みだ。

よっしゃっ！

立ち上がって廊下に出る。本当は走りたいところだが、注意されるとその分薫と話す時間が減ってしまう。

あと少しで薫の教室に着くと言っ頃、女子に呼び止められる。ふわふわした癖っ毛のショートカット。

「あつあの！！先輩！お話ししたい事があるんですけど、裏庭にきてくれませんか！」

「薫に会いに行くから無理。ごめんねー」

と軽くあしらって教室へ向かう。

後ろで泣き始めた気配がするがそんな物、気にしていられない。ガラッとドアを開けるとクラスの半数の女子が顔を赤くする。

…うぜー。おまえらが赤くなっても意味ないんだよ。薫があかくなんきゃ。

そんな事を考えながらも薫の席へ向かう。

薫の周りには女子と男子たくさんの方が群がっていた。そのせいでまだ薫は俺に気がつかない。

とうとう薫の前まで来る。ほとんどの奴らは俺に気づいて何処かにそそくさと逃げていったが、

数人の男子がまだ薫の机に張り付いている。

キモい。ウザい。今すぐ薫及び薫の所有物から離れる汚れる。

「邪魔。どけ。そして一生もどつてくんな」

その声をかけると男子どもは今気がついたと言う様に離れて行く。

「お兄ちゃん！」

この可愛い声は。もちろん、薫だ。

ああ可愛い可愛い。なんて可愛いんだろう。抱きしめようと手を伸ばす。

「流石に抱きしめるはないでしょう。お兄さん。そろそろシスコン卒業したらどうですか？」

「あん？お兄さんとか言わないでくれる？いまお前が発した不協和音の所為で耳が腐りそうだよ」

こいつだこいつ…何度排除しようとした隙間からはいでて来る。

いわゆるゴキブリだ。またの名を木野 翔太。

こんなのが薫と同じ空間で勉強していると思うとはらわた煮えくり変えりそうになる。

「お兄ちゃんも翔くんも辞めてくれない？ご飯が不味くなるでしょ？」

「ごめんね薫…って翔くんって何？いつそんなに仲良くなったの？」

「ちっき」

「…薫、いつも言ってるよね？俺以外の男と話したりしたら、薫な

んですぐ喰われちゃうんだって」

「でも翔くんお兄ちゃんが何言っても私と仲良くしてくれるし面白いんだもん」

くっそ、木野 翔太め。薫に名前呼ばれたぐらいでニヤニヤしゃがって。気持ち悪い。

「まあいいけどさ、俺とお昼食べよう?」

全然良くない全然良くない…けど、薫とご飯が食べられるんだってそれだけで良いや。

木野 翔太は後で絞めるし。

「うん。それは約束だからね。いいよ。でも今日は翔くんも一緒に」

「……………は?」

「俺も一緒にだって言ったんですよ。先輩」

予定変更。今、絞める。

拷問大百科持ってこい。一番効くので時間をかけてやってやる。

そして、今日もシスコン海斗の害虫駆除が始まる。

でも海斗も、この時点では彼氏ポジション有力候補だった木野 翔太も、

この先の未来、まさか薫が”運命の相手”を連れ帰ってくるとは思いませんでした…



**番外編 シスコンお兄ちゃん（後書き）**

海斗兄さんトSです。  
とくに男には。



## 甘すぎます

目が覚めると、もちろん、イシユの腕の中にいた。

私がおぞもぞしてもピクリともしない。ほんと低血圧だなあ……。もうひと眠りしようかと思った時、外で音がする事に気がつく。

「ちょっとサラ！あんた行きなさいよね！！」

「嫌よ！やることやった後なのよ？！入りづらいじゃないのよ！！」

「それは皆一緒よ！でもそこで行くのがサラ！あんたの仕事じゃない！！」

「何自分は違うみたいない方してんのよ！！」

何だか漫才を聞いているような気になる……

「じゃあ2人で一緒にあげましょっ！1・2・3で行くわよ！！1・2・3！！」

「……エマ！カいてないでしょ！！！！」

「そういうあんたも力が入ってるとは思えないけど？！！」

……いや小学生じゃないんだからっっ！！

ああ、もういろいろ面倒くさくなって来たなあ……

イシユの腕から這い出して、ドアの前に立つ。

外ではまだ言い争いが続いているようだ。

すっつと息を吸い込んでドアを開け放つ。

「うるさあああああああい！！！」

突然の大きな音に2人は目を丸くしてピタリと止まる。  
え？イシユ？奴はスヤスヤと寝ていらっしやいますよ？はい。

「おおおはようございます、薫様。お目覚めでしたか。」とサラ。

「どっどっでしたか、昨夜は、お楽しみになれました？……ああ、楽しかったんですね。分かりました。」

エマがそう言って、目をそらしてしまう。

「……………え？何？？」

「いや…あの…キスマークついてます。」

「いやああっあっあっあっ！！！」

もしかしてあの時の…印をつけるとかナントカ！！あのちくつとしたヤツかあっあ！！

嫌だもう。穴があつたら入ってる！…そうだ穴！穴を作らせよう！！  
まずはスコップかな！かなり大変な作業になりそうだから、エマとサラに手伝ってもらって…

はっ何を考えている？！自分！ヤバイやばい。あまりの恥ずかしさにご乱心だわ！

私のあまりの身悶えようにサラが水を渡してくれた。  
ごきゅっごきゅっ飲んだら、少し落ち着いた。よしっ

「2人の考えてるようなことはしてません。大丈夫です。」

「そうなんですか？しなかつたんですか。ふーん」

「なっ何よ！してないってばーっ！」

結局、信じてもらえたのかよく分からないまま身支度をしに、隣の私の部屋へ向かう。

今日のドレスは黄緑色の、ふんわりしたやつ。上からキスマークを覆い隠すようにスカーフを巻く。いや、しかし着心地が良いなあ。

とか考えていたら、隣のイシュの部屋のドアがぱんつと開かれる音がして、続いてマーサさんの声が聞こえた。

…朝のアレは恒例行事ですか。マーサさん…

時は朝食。イシュはまだ眠そうだった。

クロワッサン黙々と食べていたとき、イシュが言った言葉に咳き込んでしまう。

「げほっげほっげほ……え？」

「だから、俺は朝は早く起きられなくて、薫の事が見られないから、明日から起こしてくれ」

イヤそれ意味分かんないっす。

「私なんて別に見なくてもいいでしょ！」

「ヤダ。見たい。…それに、お前を見ないと安心できない」

安心出来ないって別にさらわれたりしないさ私は！拒否しようと思っつてすぐに気が変わった。なんていうか、イシュがじっと見つめて

来たから。イシュには絶対そういうチカラがある、人をまあいいか、みたいな方向に流すチカラ！

「わ、わかったよ！だけどさ…明日からも一緒に寝るの？」

「当たり前だ」

何の為の私の部屋よおお。グスン。朝食が終わり、イシュを見送る為に席を立つ。部屋の事をやらなきゃいけないから、今日はお留守番です。イシュと並んで歩いていたら突然思い出したかのようにスカーフを捲られて、首筋を愛おしげに撫でられる。昨日少しちくつとしたあの場所だ。「ちゃんといたな…」とか言っつて、首筋にちゅっとキスされる。

やめてよそういう恥ずかしい事！私は毎回毎回っ爆発しそうです！

「イシュ！恥ずかしいから…っ」

今度は唇にキス。周りには今誰もいないから、約束を守ってくれているみたいんだけど、やっぱり恥ずかしいからヤメて欲しい。でも今回は短い。少しほっとしてイシュを見上げる。

「行つて来ます」

つてにつこり笑われた。あ。やだな。離れると言っても少しの間なんだけど、イシュがいないと私暇だ！どうしよう、何しよう。

「バカップルですねえ。新婚みたいでしたよ？」とエマ。ちよっ何時の間にいたんですか！？

「し、新婚とか言わないでよ！私も現実に追いついてないんだから！」

とかいいつつ、バカップルと言われても、仕方がないのは自覚して  
ますよ……

甘すぎます（後書き）

甘すぎて気持ち悪い…。イシユも薫も…！

次回から立て直します。うん。

イシユとか完全にキャラ変わってる気がします…。気のせいですか。

私は…

イシユが出かけたのを見送ったあと、エマと一緒に部屋へ向かう。

「そう言えば、エマがサラと一緒にいないの珍しいね?」

「はい。今日は長に駆り出されてもう先に部屋にいるんですよ」

「……長って誰?」

「へ?長と言えば、マーサさんに決まってるじゃないですか。そう呼ぶと本人怒るので、まあ、あだ名みたいなものですが」

やっぱりそう言う役職だったんですか…: だいたい想像ついてたけどねっ!

部屋に着くと、たくさん布の中に2人が埋まっているのが見えま  
した。…: 気のせい?

「うう、助けて下さい…:」

あっなんか今声が聞こえた! ヤバイ本格的に埋まってる!  
待ってて2人とも! 今助けるからね!

「お待ち下さい、薫様」

「え?でも早く助けないといろいろヤバイんじゃないあ…:」

「はい。もちろん長…: マーサさんは助けますよ?でもサラはそのまままでいいです」

「は？なんで？」

「何でって、楽しいからに決まってるじゃないですか」

え。何。今なんか変なワードが聞こえた気がします。楽しい？…  
んん？

「マーサさんは上司なんでアレですけど、人が苦しんでるのって見てて楽しくないですか？」

あらまー。お目々キラキラさせちゃってー。エマさんや…Sだったのね。

「いや！ダメだから！助けようねっ！ねっ！」

「えーっまあいいですけど…」

了解してくれて良かったよ。うん。渋々だけど。

…とりあえず、救出に成功した私たちは部屋のインテリアを決め始めたのでした。

「へえ、さっきの布はカーテンね」

「そうなんです。先ほどは引き上げていただきどうもありがとうございます。…で。どの色になさいますか」

マーサさんが後ろのカーテンの山をさしながら言う。

「うーん、じゃあここは無難に白で！中の薄地は薄紫！」



「かしこまりました。部屋全体もその様な色合いになりますが、よろしいですか？」

「はいっ お願いします！」

エマとサラがテキパキとカーテンをつける。

その後もいろいろあって、椅子とか、ソファーとか、バスルームとか！

なんと大変だった事か！

2時までかかりましたよ。

…そう言えばこっちに来てからも生活感はそんなに変わらないなあ。異世界なのに。

都合良くで来てるなあ。食べ物に困らないしそっちのが良いけどさ。異世界… かあ。いままでイシュといて、一目惚れして、楽しくて、気にしてなかった。

私、戻れるのかな…？

…私は、戻りたいのかなあ？

多分… … 戻りたくない。イシュと居たい。でもずっとこっちで、戻れないのも嫌だ。

どうすれば良いんだろ。

あっちで私どうなってるのかな。… 行方不明？

あ。ヤバイ。お兄ちゃんとお父さんが。

薫は昔、大型デパートで迷子になった事があった。結局薫は車の前にもどって居たのだが。

後で母から聞いた話、その時の父と兄の暴走は半端じゃ無かったそっだ。

まず迷子センターに駆け込んで放送マイクをぶんどり、

「薫！どこだあつあ！おらロリコン野郎ども！いくらうちの妹（娘）が可愛いからって連れ去ろうとすんじゃねえぞ！特徴は肩につくぐらいの髪の毛の長さ、白いワンピースにめちやくちや可愛いだあ！見つけ次第、丁寧に迷子センターに持って来い！以上！」

と一通り叫んだ後、また探しに出て行ったそう。薫が見つかった時は、父と兄揃って泣いていた。それも、号泣。

この時、愛されてるなあ、と感じたのを覚えている。だから自然にごめんなさいと言った。そしたら抱きしめられながら怒られた。

まあ、とにかくだ。私が行方不明なんで事になったら大変だ。迷子の比じゃない。

私はどうしたら良い？

お茶の時間、その事ばかり考えていた。

私は…（後書き）

なんか…1章がおわんない。どうしよう。

ちよっと忘れといて下さい！うん。それがいい！

気づいたら2章だったーぐらいでー！はい。

こんの、役たたずが。(前書き)

イシユ目線です。

「ごんの、役たたずが。」

ああ、薫に触れたい。キスしたい．．．はやく帰りたい。  
馬車の中、薫と別れてまだ数分しか立っていないのに、イシユはもうこんな事を考え始めていた。

「イシユ様、城に到着致しましたよ」

「え？あ、ああ。今行く」

トムに言われてやっと気がついた。

気を引き締めなければ。これから戦いが待っているのだから。トムに礼をいい、外に出た．．途端、目に入るのは帽子、帽子、帽子。羽飾りや、動物をかたどったもの等たくさんの種類がある。まあ、いつもの事だが。今日は羽飾りの方が多いか？  
耳に入るのは、黄色い声。うるさい。うざい。ケバい。香水臭いんだよ。

「イシユ様あ！おはようございますう、噂聞きましたよお！！」

いつも通り、女の言う事には耳を貸さずんずん進んで行く。やっと城に入ったところに気づいた。

「――噂？何の事だ？……アイツに確かめる必要がありそうだ。」

「アルデル！！」

さっきまでついて来ていた女達も、流石に王子の部屋までは入ってこない。そのアルデルは、ビクツと肩を揺らし、冷や汗をかきながらこちらを向いた。絶対何か思い当たる節があるなコイツ。俺と、

目を合わせようとしない。

「おい。噂とは何の事だ」

「まあ、落ち着きなよ。朝の挨拶もまだだろう？」

引きつった笑顔で言っているが、そんな事でイシュの質問は止まらない。

「オハヨウゴザイマス、オウジサマ。で？噂ってなんだ？」

.....

「で、ばれたと。言うわけだなアルデル」

「そうなんだよねー。僕頑張ったんだけどねー。あはは。……」  
「うめんなさい」

「まあ、そのうちバレる事だが、こんなに早いと……」

アルデルの謝罪は完璧に無視して、イシュが続ける。

「薫の存在は知られても、姿形は知られてないよな？」

「多分？」

「多分？つておまえそれでも王子か？」

「だって知らないんだよね。どうせ噂流したの、何だっけ。イシユ様親衛隊とか言う人たちでしょ？」

「…多分な。おまえそれを分かってて何故止めない」

「だって、女の噂は止まらんよねー。いやー、参った参った」

「……………」

アルデルをシメてから、次に向かうのは執務室。女はもういない、良かった。

今のイシユはイライラ全開だ。その餌食となった悲しき被害者は、副隊長のルシファールだ。

「噂の事を話せ」

ルシファールは、昨日仕事のほとんどを任せて帰ってしまったイシユに文句を言おうと思っていたのだが、そのあまりの機嫌の悪さに口を閉じる。

「え？噂？あれですか。隊長に恋人が出来たとか言う」

「そつだ」

「昨日庭のあたりで誰かが見たそうなんですよ。確か…ダークブラウンの髪と目で結構可愛い、みたいな感じでしたけど…：…これ薫ちゃんの事ですよ？隊長連れて来たんですか？」

ルシファールの質問は無視だ。無視。容姿まで知られていたか…：…

・危険だ。というか、流石に何か手を打った方がいいのか？

「1度流れた物は仕方ない…ルシファール、何もしなくて良いからな」

「そんな事言われなくても何もしないでですけど…」

バツコーン！

突然、扉が倒れてくる。沢山の兵士達と共に。漫画とかで沢山の人  
が盗み聞きをして扉ごと倒れるアレだ。

「おい、お前ら……」

イシユの怒声を遮って倒れこんだ兵士達が悪びれもなく言う。

「隊長！！あの噂ってホントだったんですか！おらぁ、てっきりま  
た嘘かと」

「おめでと〜ございますー！」

「可愛いつてマジですか?!」

色々同時に叫んでいるが、言う事は一つだ。

「薫に手えだしたら命はないと思え。お前ら。アレは、俺のだから  
な」

低い声音に震え上がるも、直ぐに言葉を続ける兵士達に頭が痛くな  
ったイシユであった。



倒れた扉にルシファールが下敷きになっていたのはまた別の話。

こんの、役たたずが。(後書き)

トムさんは御者をやっています！白いひげですw  
アルデール王子にも親衛隊らしき物がありますよー。

## 嵐

「疲れましたねーっ薫様」

「だねー」

時はお茶会。今、庭の手入れが終わった所である。

もちろん薫がやると言っても、誰も聞き入れてくれなかったが、最後の方にこっそり混ぜっていたのだ。何故かって？やる事がなさすぎるから。

世のお嬢様方は何して過ごしてんだろ？

いくらなんでも、暇すぎる。今度イシユに聞いてみよう。うん。

「薫様、お茶のおかわりいかがですか」

「うん。お願い」

こっちのお茶ってホント美味しいと思う。

と言っても、私が今まで飲んだお茶と言えばリプトンのティーバックぐらいだけ。

「あら、イシユ様が帰って来たようですね」

ん？…あ。ホントだ。遠くで馬車の音が聞こえる。

「迎えに行った方が良いかな？」

「ええ。すぐく喜ばれますよ」

たたつと玄関に走ると、イシュは馬車から降りた所だった。私に気づくと、足早に近づいて来て、軽く抱きしめられる。

「おかえりなさいっ」

「ああ、ただいま」

イシュは少し離れてから私の手をぎゅっとなつかみ歩き出す。

「ねえ、貴族のお嬢様は普段なにしてるの？やっぱり皆、お人形遊びとかかなあ？」

最後のはイメージ。何となく。

「…？なんだ？いきなり」

「好奇心」

「普通にお茶会とかじゃないのか。後は…チェスとか…」

「へえ！チェス？」

「ああ、所で…」

突然、壁際に寄せられる。

「昼間、俺がいなくて寂しかったか？」

「えっ。うん。寂しかったよ。すごく」

イシユはクスツと笑うと私にキスをした。触れるだけの、軽いキス。

「…明日は一緒に城に行く」

「いいの？」

「もちろん」

ありがとものつもりで満面の笑みでイシユを見る。と、

「もうダメだ…！」

今度はさっきよりも激しいキスをされる。

「んんっ……………ん」

イシユの舌が入って来て、息苦しくなる。

「ふっ…はぁ、」

イシユは平気そうだけど、私はすっかり息切れしてる。

「っ！びっくりするでしょーっ！ー！」

「俺は我慢したぞ」

「全然、我慢になってない！！…ん？我慢？何を？」

「薫に触れること」

?!……あのー……いしゅさん。ほぼ最初から触ってますけどー！  
多分、deepに触っちゃいかん用にしたのね。…多分。

「何で我慢してたの？」

「あいつが居るからだ」

アイツ？イシユが指差した方をみると、白いヒゲに変なメガネのおじさんと目があった。

「だつ誰ええええ???!」

「噂を聞いて、薫を一目見たかったそうだ」

「え？噂？つて何の事？」

「薫が俺の恋人って言う噂だ」

イシユがニツコリしている。ご機嫌か！

「どうした？薫、顔が真っ赤だ」

大きな手でほっぺに触れられる。

「だって…そんな恥ずかしいこと…」

「気にするな？」

はっ！そう言えばおじさん！おじさん誰だぁあ！

.....  
イシュの話によると、おじさんの名前はパルカさん、魔術師なのだ  
そうだ。

んで今、皆でお茶会中…なのは良いんだけど…あの…そんなに見な  
いで下さい。パルカさんは一言も喋らずに私の顔を見つけてます。  
かれこれ10分。イシュは何にも言わない代わりに私を後ろから抱  
きしめたまんまお茶を飲んでる。…器用な人。  
この状態がいつまで続くかわからないけど、居心地が最悪なので何  
とかしようと口を開いた時、

「だっははははは！これはこれはお嬢さん！」

うわ、びびび、ビックリした！ちょ、止めてよいきなり話だすのは！

「うあっえっはっはい！何でしょう？！」

「お嬢さん、イシュ殿を落とした女なんてのは初めてだ！」

「そっそうなんですか」

「イシュ殿があんなにデレデレしてるのも初めてだ！」

「へっへー…」

何なのこの人？どう反応したら良いかわかんない！

「それから…」

ひい！まだ続くの？！

「こんなに魔力のある人に出会ったのも始めてだ」

……何ですかそれ。

これには、さっきまで微動だにしなかったイシュもかなり驚いている。もちろん私も。

「自分で気がついていないのか？貴方の魔力はこの世界全てをかけたも覆いきれない程あると言っのに」

「それ、本当か？」

「わしが嘘をつくど？」

「……それもそうだ。薰、どうするんだ」

は。どうする？え、どうするって何。何があるの。

「どうするって何？」

「…魔術師になりたいか」

イシュの目はかなり真剣味を帯びていて、真面目な問題なのだと言う事がわかるが、

「そんなもの決めなくても良いぞ？」

スッパリ。

「何故だ？」



「多分、薫さん程になると望むだけで魔法が使える、学校に行つて制御を覚える必要はない。現に今もお前じゃ魔力を感じ取れん程に抑えて居るだろう」

ええ！そんな事があつたのね！学校だなんて。イシュがホツとして  
いる。

「薫さん、何か願つて見てご覧」

「じゃあ…お茶おかわり！」

ギユツとつぶっていた目を開くと、何も入ってなかつたティーカップにお茶がなみなみと入っている。  
うわっ！すご！全然気がつかなかつた！

「成功じゃな。うむ。それじゃあ失礼する。お茶、ありがとう」

そうしてパルカさんは突然帰つていった。…：…嵐のようとはまさにこの事だな。

「薫、」

不意に存在を忘れていたイシュから声をかけられて、肩に顔を埋められる。

「お前が行つてしまわなくて本当によかつた」

「私はまだイシュのそばを離れたくないよ？」

大きな腕が2本伸びて来て抱きしめられた。

そして夜。

イシユはいつも通り私をベットに連れて行った。もちろん、いやらしい事はしてないですよ！

おやすみのキスをされて、それから、抱きしめられただけで。うん。

…あれ？結構変な事してる…

「俺のそばを離れるなよ。薫…」

マニユアルウサギ登場(前書き)

夢の中です。

## マニユアルウサギ登場

「おい」

…何。なんでこんな至近距離でウサギに見つめられてるの、私。

…ウサギ？…ウサギイイイイイイ？！

「ぎゃあああー！」

「いや…ちよつと落ち着いて…」

「いやああ！またグルグルに巻き込まれるーっ！」

「だからちよつと…」

「ふわあーん！帰るっ！」

「……落ち着けて、言ってるおがああああー！」

捕まえられた。

ていつか痛い！そこに乗るな！

「いいから、そこに座れ！」

「はっはい」

なんでこのウサギこんなに偉そうなの。ウサギはもっと可愛い生物なのに！

「あの…何の説明もなく異世界に送り込んだのは…その…悪かった」

「じゃあ、やっぱりあの時のウサギさん？」

「そうだった！あの時は俺も入社したてで、アレだ。緊張してたからまさかお前に逃げられると思わなくてよ」

「……だって銃を抱えてたし」

「それはっアレだ！異世界へ送るためのもので！」

「……怖かったし」

「本来はしまつとく物なんだがマニュアルにはすんげー小さい字でしか書いてなかったんだ！」

「……口悪いし」

ウサギさん汗だらだら。

「………すみませんでした」

「………気をつけてよ」

「とっとりあえず、俺の話聞いて欲しいんだ」

「うん」

「まず、俺は普通のウサギじゃない事はわかるよな？世界には無数のパラレルワールドがある。…異世界だ。その異世界の1つにウサ

ギが人間のような暮らしをしている場所がある。そこが俺たちの会社のある、バローンだ。」

バローン・・・ね。

「バローンには長年、異世界について研究している奴がいた。で、そいつはある日、異世界を覗く事に成功したんだ。しかし、そいつの目に写ったのは幸せな物ばかりではなかった。幸せな異世界がある分、崩れかけている異世界も沢山あったんだ。それでそいつは何とか異世界が救えないかと思った。そこで考えたのは自分がそこへ行きそこを救う事だった。それでこの銃が開発された。」

もうちょっと他の形は無いのか！怖いぞ。

「んで、そいつは自分に向けて銃をうち、異世界に降り立ったんだ。でも何にもできなかった。そいつは悔しくて悔しくて、一度自分の世界へ戻り、いろんな人をスカウトして研究を始めたんだ。それが今の会社、キングストーンだ。その研究の過程で異世界を救うには魔力の高い人が適している事、魔力の高さで言えば地球の人々が、しかも女子が、ダントツの事が判明したんだ。そこでだ、俺たちがそこへ行き異世界を救える人材をスカウトしようって話になったんだ。」

「ダントツと言っても実際、救世主になれる程の魔力を持つ人はあまりいない。結構大変なんだぜ？…じゃなくって！とにかくっお前はスカウトされた。でも…人によっては嫌がる奴もいてよ、探すのに苦労した分、それじゃ困るわけ。そこでだ！俺たちは特典をつける事にした。」

1つ 行った異世界で困らぬよう、脳内データを組み替える仕組みを銃につける事

1つ 行った異世界で運命の相手に出会えるようにする事

「これをつけた途端、スカウトは面白いぐらいまく行くようになった。女子つてのはアレだな。運命とやらに弱いんだ」

そこで、ふうつと息をつくとうサギさんは話を続ける。

「ここまで話したらわかると思うが、まずお前は異世界を救わなくてはいけない。そのかわり、言語とか食べ物とかも困らないだろ？ しかも運命の奴にも出会えた…よな？」

「うっ運命の人って……イシュなの？」

「へー。イシュって言うのか」

……………そうだったのか！

それならあんなに展開が早いのも頷ける。しかも脳内データって…いやああ！じゃあ今、私、日本語まるでわからないって事?! しかも異世界救わなきゃいけないの?! まさかの勇者！

「いつ異世界救うってどうやるの?」

「えーっと、ちょっと待てよ…」

と言いながら、マニュアルをだすウサギさん。マニュアルに頼りすぎだっ！

「おっあったあった。魔王を倒すんだ」

うーあーっ！ベタだーっ！やる気失せるわ！

「私が拒否したら？」

「お前に拒否権はないし、イシユとやらを置いていけるのか？」

「うっ…」

卑怯だ！断られないためじゃなくて、やらせるための特典じゃん！！

「頑張ります…」



目覚めよ！（前書き）

鍵カッコの際は一行開けて書く事にしました！

目覚めよ！

「よしっ良く言った！それでこそ勇者だ！」

やっぱり勇者…。

「で、私は魔王を倒したらどうすればいいのって言うかどうやって倒すの？」

「魔力があるだろ。お前なら思ったことをすぐ出来るぐらい、魔力がでかいから大丈夫なんじゃないのか？あと使い魔とかつけたらどうだ？」

「使い魔って可愛いのか？可愛いんだつたらつける！犬飼うの夢だったし」

「……………まあ、良いんじゃないのか。うん。まあ……………」

なんだか微妙な反応だが、気にしない気にしない。

「魔王はそのうちお前の元にやってくる…はずだ。待ってる今、確認すつから」

そう言つてまたしてもマニユアルをだすウサギさん。

マニユアルに頼りすぎだ。そんなんだから、最近の社会にはマニユアル人間とかが出て来て大変なんだ。人間じゃないけど。

「…うん。魔王はそのうち来るぞ。あとお前は戻れる。イシユと一

緒にな。…まあイシュが拒まなければだが、そんな事はあり得ないだろうな」

「そっか、戻れるんだ…でもその場合、イシュは自分の世界とサヨナラになるんだよ？あたしはそんな事したくない」

「それでも良いけどよ。お前らが離れたくねえんだったら、どちらかがどちらかの世界と離れるしか方法は無い」

「……イシュの希望も取り入れて考えるよ」

「それが一番良いだろうな。じゃっまた来るから！もうすぐ起きた方が良いと思うぞ」

「へっ起きる？あ、夢？えええっ？」

なんかすんごい混乱したけど、起きたみたいだ。目の前にあるのはいつもの天井。

イシュの腕によって、少しお腹がしまる感じ。大丈夫、全部いつも通りだ。でも初めて知った事がある。

イシュは…私の運命の人だ。

そう思っただけで、好きって言う気持ちが入み上げてきて泣きそうになる。

ただ今日はイシュを起こすと言う使命がある。グズグズしてられないし、イシュに全部話さなきゃいけない。ホントは起こしたくないけど、約束しちゃったし。

…さて、どうしよう。普通に起こしたところで起きないのは目に見えている。

しかも、起きたところで何かされるだろう。きっキスとか。うん。とりあえず、避難体制はとっておこう。

思案した結果、起こすのはマーサさん法でいこうと思う。じゃあいきます！

「いしゅー！ー！ー！ー！ー！ー！あさだよー！ー！ー！ー！ー！ー！おーきーてー！ー！」

「ん…薫？まだ早いぞ…」

いやいやいや、早くないから！普通の時間だから！でも上出来だ。もう一発いくか！

「いーしゅー！ー！起きなきゃ、構ってあげないよー！ー！ー！」

「……起きたら、構ってくれるのか？」

あ。ヤバイぞ。このままでは色々されてしまう！避難体制！！

「薫…」

まだ眠気を含んだ声で囁かれる。早くっ早く避難しなければ！

「可愛い…」

逃げようとするあたしの腰をがっちりつかみ首筋に顔を近づける。ちゅつと優しいキスを繰り返しながらとうとう唇までやって来て、トロンとした目で見つめられる。

……きゃーっ！！ヤバイヤバイ。逃げるとかそう言う問題じゃなかった！朝のイシユは色気が半端ない。

乱れたパジャマの襟から胸板が見えてて、フェロモンです。ムンム

ンです。

…とかやってる内にキスされる。

「おはよう」

私に拒否権は無い…

## 使い魔

朝私が起こしたおかげか、イシュの機嫌は最高だった。

問題は．．．いつ話すかについてだ。今日は一緒に城に行く事を約束しているからもう出かけるし。

「薫、もう行こう」

帰って来たらでいいや。

抱き上げようとして来るイシュを軽くいなしながら馬車に乗る。後ろから抱きしめられてるのに平然としている自分が怖い。これがスキンシップに慣れるというヤツか！怖っ！

「城で俺の側を離れるなよ？」

「うん。あっ！やっぱり、ちょっとパルカさんの所に行ってもいい？」

私の頭に顔を埋めていたイシュが顔を上げた。あああ！イシュの顔が見る見る不機嫌に！眉間にしわ寄せないで！お願いだから！

「なぜだ？」

声が露骨に不機嫌だ。

「あのね、使い魔が欲しいの．．．ダメ？」

イシュの膝に乗っても身長が届かないから自然に上目使いになる。

「っ！ダメじゃない．．．やっぱりダメだ。っ！わかった。俺も一緒に行く」

イシユは一人で葛藤してなんとか了承してくれた。ふうっよかった。

「ありがとう」

きゅうと抱きつくときシユの香りがする。懐かしい感じで安心する香り。ほっとかれたらこのまま寝てしまいたい。こうするとイシユはいつも抱きしめ返してくれる。

最近はその嬉しくて、よく抱きついてる。ああ日本人の控えめ美学はどこえやら……。

しばらくそうしていたら城が見えて来た。けど、外が騒がしい。

イシユの目が冷たい光をまとい、私を抱き上げる。

「イシユ？ 恥ずかしいから、自分で歩くよ」

「ダメだ。絶対離れるな。危険だから」

「危険？ なんで？」

出ればわかると言いながら、イシユはそのまま外に出る。

「イシユ様あ！！」

．．．は。何これ。

アイドルの追っかけを連想させる。イシユの追っかけ？ あっマリーナさんの言ってた？

じゃあ、私って．．．

ちろりと横を見ると、私を睨みつけるお嬢様の姿がありました。ひ

い！危険の意味が分かりました！

イシユは人垣をもろともせずズンズン進んで行く。慣れてる感じだ。毎日こんなのと戦ってたんだ。．．．お疲れさまです！

「イシユ様！あの噂の女ですの?!」

あちゃー相当怒ってる。隠れとこ。噂ってアレかイシユが言ってた。

「そつだ．．．薫を泣かせたら、城に居られないようにするから」

抱き上げられてて見えないけど、相当怖い顔をしているんだろうな。言ってる事も恐ろしいし。こんな事思っちゃいけないけど、愛されてると感じられて嬉しくなる。

イシユの剣幕に押されて撤退したんだろう、周りが静かになった。

「イシユ？ありがとう」

「．．．ん」

すたすた歩いて着いた先は古すぎて触ったら崩れ落ちてしまいそうなドアの前だった。

ここがパルカさんの部屋だろうか。

「俺だ。入るぞ」

ぎぎつとドアを開けて入って行くと、相変わらず変なメガネをかけて、お茶を飲んでいるパルカさんの姿があった。

「お？ああ、いらっしやい。薫さんも来たね」



ししつと笑ってお茶の準備をしてくれるパルカさん。  
ここでやっと私もイシユの腕から解放された。．．よかった。恥  
ずかしかったし。

「あ。おいしい」

「そうか、そうか。それは良かった」

最初は不思議な人だと思ったけどパルカさんの柔らかいふいんきが  
好きだ。

ニコニコしているとイシユが不機嫌そうに話します。

「今日は要件あるんだ。薫が使い魔が欲しいそうだ。なんとか出来  
るか？」

「そりゃ出来るとも！でも何時までかかるか分からん。それでも良  
いのか？」

「はいっお願いします」

多少気になる所があったけどまあ気にせずに行こう。うん。

やっぱり魔方阵とか書くのかなとか思ってた密かに楽しみだったんだ  
けど、パルカさんは私を別の部屋に移しただけだった。

床を見ても何も無い。

「じゃあ、まず自分の魔力を感じ取るんだ。体に流れているものが  
あるだろう？」

目を閉じたら、血の流れを感じ取る事ができた。ん？もしかしてこ  
れが魔力かな？

「そしたら今度はソレをゆっくり外に押し出すようにしてっらん」  
ゆっくりゆっくり．．．魔力の流れは激流でなかなか路線変更してくれないけど、なんとか動いてる

「その作業を続けるんだ」

かれこれ40分作業を続けている。流石に疲れてきたけど、魔力の流れに変化が出てきた。

最初はムリヤリ押し出していた魔力が、今は何かに引っ張られている気がする。

そんな変化を見破ってか、パルカさんが頷いてくれる。イシユは静かに見学だ。

さっきまでやんわりとしていた引力がぐんと強くなった。

何かが起こる……気がする。と思ったのに、力はまた弱くなる。

力は、しばらくは何かを計るかのように、弱く、強くを繰り返した。

それが10回ほど繰り返れたころだろうか。

部屋に木枯らしが吹いた。窓はピツタリとしまっている。

木枯らしが幾重にも重なって、大きな風が吹く。

大きな風が重なってまたさらに大きな風が吹く。その繰り返しでいつしか部屋には風が吹き荒れていた。

まるで嵐。雨のない嵐。

遠くで遠吠えが聞こえた気がした。

使い魔（後書き）

薫が初めて城に行った時、親衛隊は？とか聞いてはいけない。

## 契約

激しい風に立っているのもやっとの中、  
風の中におぼろげだけど、何か大きな影が見える。

数分後、飛び出して来たのは…オオカミだった。  
先程の遠吠えも気のせいではなさそうだ。  
私が乗っても大丈夫なぐらい大きい。毛は雪のように白い。

…めちゃくちゃ可愛い！いますぐ近づいて行って、抱きつきたいモ  
フモフしたい！

今の言動で分かると思うが、薫は相当な動物好きである。

オオカミがこちらをじっと見ている。

あ、目が青い。

風は止んでいる。

「ご主人？」

のわっ！喋った！見間違いでは無い。絶対、今喋ったのはあのオオ  
カミだ。

「薫さん、返事をしなさい」

どうしようかと戸惑っていると、パルカさんが小声で教えてくれる。

「はい？」

「貴方が僕のご主人ですね。では、契約を」

契約？え、何それ。おいしいの？

だってパルカさん、ちつとも教えてくれなかったじゃないですかあ  
ああ！

しかし今度は、何か教えてくれそうな気配は無い。……困った。  
分からない時は素直に分からないって言おう！うん。

「あの…できたら、契約の仕方教えてくれたらなーっなんて」

オオカミはじとーっと私を見ながらも、答えてくれた。

「名前を教えて頂ければ良いんですよ」

「なんだー名前かー。…薫と言います」

「僕はカイルです。カイって呼んでください。薫様、よろしくお願  
いします」

そう言つて下から見上げて来るカイ。……ズッキューン！…かわえ  
え。

思わず抱きついてモフモフしそうになる。…危ない危ない。

この子なんとなく敵しそうだから、そんな事したら嫌われそうだ。  
それだけは嫌だ。

私のすぐ下にいるカイは、さっきから私をじーつと見ている。

「何？さっきからじつと見て」

「……薫様！！大好きですっ。さっきは緊張してたんです。冷たく

してごめんなさい」

「…！そうなんだ。良かった。嫌われてるのかと思ってたから…」

「薫様を嫌うなんてあり得ないですよ！大好きです」

「…なんなんだろう。カイはさつきから、大好き？私も大好きだよ。…じゃなくって！何で大好き？」

「何で大好き？」

これにはパルカさんが答えてくれた。

「使い魔つと言うのは、主人が大好き、と言うのは有名な話なんだよ。薫さん。でもそのカイくんはびっくりする程、薫さんが好きな様だね」

「薫様は可愛いし、魔力は大きいし、優しそうだし、大好き！」

「…おい。薫は俺の物だ」

そう言って来たのはもちろんイシュだ。何、言ってるのーっ！！

「薫様、こいつ誰ですか？」

「イシュだよ。えっと…付き合ってるのかな。うん」

「何でこんなヤツと？」

とか言いながら、イシュを睨みつけるカイ。睨み返すイシュ。

何なんだ！

睨み合う2人をなんとか引き離して話を続ける。

「それで、カイってどんな事が出来るの？」

薫様の為なら、僕は何でもできますよ！と言うカイはほっておいて、  
パルカさんに話を聞く。

「使い魔と言うのは基本的に愛玩動物なんだよ。でも、ここぞと言  
う時に、主人を多いに助けてくれる。しかも、普段魔力を使わない  
分、強力だ」

なるほど、だからウサギさんは使い魔を勧めたんだ。

「それから、白い使い魔と言うのは、非常に珍しい。大抵、黒だ。  
別に白だからどうか言う事はないがな」

へえー。でも白、可愛いもんな。

「まあ、仲良くやりなさい」

「はい！ありがとうございます」

「薫、行くぞ」

パルカさんに御礼を言い部屋を後にする。  
もちろん、カイも連れて。



## 相性

パルカさんの部屋を出てからは、イシユの執務室に向かって歩いていったのだが、

それはそれは大変であった。

何が大変かって？もちろんカイとイシユの機嫌が。

「薫様に必要以上に近づかないでください。旦那気取りが」

「あ？お前こそ薫に触るな。クソ犬」

「犬じゃなくてオオカミです。そんな事も分かんないんですか？アホ隊長」

「普段何にも出来ない使い魔の分際で喋るな。それからな、俺の方が薫と仲良いぞ。クソ犬」

「そのうちお前より仲良くなるし。だまれ」

「俺は「やめないともう口きかないよ」

『．．．．』

と言う感じた。喋らなくなった今も、あたりの空気は冷たい。

2人とも子供だ。なんだかお兄ちゃんを思い出す。

ふいに、カイがすり寄ってくる。．．．可愛い。

しかし、それに対抗するように、イシユの手が私の手をつかむ。

今私は2人に挟まれている状態だ。．．．歩きづらい。

それから、私を挟んでバトルするのは止めてほしい。

さつきなんて、後ろでイシュがカイのしっぽを踏んでたし。カイもカイで、イシュに激突してるし。

そろそろ私も限界だ。黙ってれば良いって問題じゃないんだよ？

「イシュもカイも私に触らないで。イシュ？今日は一緒に寝ないから。カイも！お風呂入れてあげようと思ってたけど、やめる」

「．．．っ！まで薫！分かった！もう喧嘩しないから！」

「薫様！ごめんなさい！お風呂入れてください！」

「ダメ」

それから2人はなかなか立ち直らなかつたけど、私が歩きやすくなつたからよし！

執務室に入るとルーさんの姿がある。副隊長と兼用なのかな？

「あつ薫ちゃん？久しぶりだねー」

「薫ちゃん？あなた何言ってますか？僕の薫様に向かって」

「ひい?!」

「お前のじゃない。俺のだ」

「はあ?」

．．．何やってんの。黙ってなさい!

「カイ止めなさい。ルーさん、ごめんなさい。今日、パルカさんに

使い魔をつけてもらっただんです」

「そ、そっか．．．強烈だね。しかも隊長と張り合ってるし」

「困ってます」

「うん、だろうね。隊長ああ見えて、結構アホなところあるから．．．あっすいません！アホとか言っていないです！ホントです！」

今度はイシュが剣を抜いてるし、今日は絶対、厄日だと思うんだ。それよりも、イシュには仕事をしてもらわないとルーさんが可哀想な事になりそうだ。

「イシュ？仕事は？」

「ああ、やる」

そっいいながらも、自分の椅子に座って膝をぽんぽん叩いてるイシュ。

なんだソレは！座れという事か！生憎、怒ってますんで。

「カイと．．．」

はっ！カイにも怒ってるんだっ！どうしよう。やる事ないぞ。

．．．ほらそこ！嬉しそうにしゃべらな！イシュも落ち込むな！

「．．．お城、探検に行つて来ていい？」

上目使いで聞いてみる。はっはっは！イシュはこれに弱い！はず！

「．．．っ！ダメだ！」

そう言っつて目を押さえてしまう。  
顔は真っ赤だけど。

「なんで？」

「心配だ」

「平気だもん」

「何が何でもダメだ．．．アルの妹のどこ行くか？」

ん？アル？王子の事？妹居たのか。でも良いな！こっちに來てから  
初の女友達！

でも、王子の妹だから姫？良いのかな．．．まあいいか。王子に  
も簡単に会えたんだし。

「行きたい！どこ？」

「一緒に行く。お前は來るな。あいつは極度の犬嫌いだ」

「犬じゃない！オオカミだ！」

「変わらない」

イシユの目的はこれか。

「カイ、待っつててくれる？」

申し訳ない気持ちをごめてにつこり微笑むと、ぶつぶつ言いながらも了承してくれた。

姫の部屋は執務室からとても近かった。

それにしても大きな扉だ。見上げていると首が痛くなりそうだ。

しかも扉の両脇に兵士が立っている。まあ、姫だしね。

何か言われるかな？と思ったんだけど、イシユをチラリとみると通してくれた。

兵士の手によって、扉が開かれる。

## 相性（後書き）

とうとうイシユのアホが加速し始めました。

## ルーチエ姫

扉の先は、なんかもう、凄かった。

凝った調度品がたくさん置いてあって、とにかく広い。広すぎて迷うんじゃないかな？私だったら確実に迷う。絶対。

「入るぞ。ルーチエ」

「ルーチエ？それがその子の名前なの？」

「ん。そうだ」

そう言いながらも、イシユは手を絡めてくる。

「あれ？イシユ？」

突然、上の方から声が響いてくる。ん？誰？

「ルーチエ！降りて来い」

ルーチエさんは、大きな本棚の上の方から降りて来た。はしごを使って。お姫さまってもうちよつと、一日中お茶を飲んでる様な人種かと思つてたけど、それはどうやら私の勘違いだったみたい。だつて、今、私達がいるのは、“美女と野獣”に出てきたような本棚のある部屋だ。上から下まで、本だらけ、地震が来たら大変だと思つ。その中を私と同じくらいの女の子が、はしごを使いこなしながら降りて来る姿は男気満載だった。

アルデルさんと一緒に銀髪に碧眼、目がくりっとしてて可愛い。

「イシユ、久しぶりね!…あら?始めまして、ルーチエよ。呼び捨てで良いから」

ルーチエさんは私に気づくとすぐにニッコリ笑ってくれた。うわ、可愛い。

「あつ始めまして!薫です」

「この子が噂の女の子?」

「…そうだ」

噂っていうのはやっぱり、私の事なんだろう。ずいぶん広まっているみたいだし…イヤだなあ恥ずかしい。そんな私の心情をしつてか知らずか、ルーチエは私をじーっと見ると

「……可愛い!イシユを落とした子なんて初めてよ!よろしくね!」

「うん、よろしく!」

うう、恥ずかしさで死ぬ。でもまだ少ししか話していないにも関わらず、じわじわと分かるルーチエの気さくさにはとても好感がもてる。いい友達になれるといいなあ。

私とルーチエが無事友達になったらしい事を見届けるとイシユはすぐに帰って行った。

「ルーチエ、後、頼んだぞ。薫に怪我させるなよ」



「さっさと帰りなさい。イシユはー。私達これから忙しいんだからー！」

「後でね。イシユ」

「ああ」

それにしても、すごい部屋だ。

ルーチエはわたしを興味深げにもう一度見てから、宣言した。

「さあ！じゃあ、イシユとの出会いから聞かせてもらいましょうか」

「え、ええええ！……！」

「いいじゃない！」

「……………」

結局、喋らされましたよ。恥ずかしい。

「ふーん？それで、イシユと住んでるのね」

「うん。そうだよ」

「私、薫に興味があって色々聞いてまわったのよ！魔力が大きいん

ですって？凄いわね！使い魔は？」

「今日、パルカさんにてつだって貰ったの」

「良かったわね！で、何の動物？」

「オオカミ」

「……………イヌ科の？」

ああ、そう言えば犬が嫌いなんだっけ。ルーチェの顔に影がさしている。

「そうだけど、大丈夫！連れて来ないから」

そう言うところルーチェは、そりゃもうすごい剣幕でまくし立てた。

「ええええ！！何で？！それいじめ？！」

は？犬嫌いは克服したの？

「イシユに犬嫌いって聞いたんだけど…違うみたいね？」

「犬っだいつすき！ホントは飼いたいけど、バカ兄が許してくれなくて…」

バカ兄！言われたい放題だなあ。王子なのに。

「そっか…じゃあ、イシユは嘘ついてたんだ？」

「そうよ！コレは許すまじ事だわ！レディに嘘をつくなんて！アホイシユ！」

ルーチエ、姫にしては口が悪いです。

それにしてもイシユは、カイに対抗意識、燃やしすぎだと思う。

「そうだね…でもイシユにはもうお仕置き決めてあるから」

何気なく言った一言だったんだけどルーチエはずいぶん食いついてくれた。

「わあ！凄いわね！どんなの？」

「今日は一緒に寝ない事」

これも結構踏み切った事だったし、割と自信があったのに次に訪れたのはしばらくの沈黙だった。あれ、なんで？私、何か言ったっけ？

「…薫。それお仕置き？」

「え？あ、うん。そうだけど」

「軽いわ！」

「そ、そお？」

「そうよ！イシユは薫にベタ惚れ何だから、もうちょっと…キス一週間禁止とか！」

それはキツイ。イシユは多分耐えられない。

「前にそんなのだしたら、怖かったからなあ……」

「どっちにしろ、もっとキツくしたほうが良いわよ！」

「うーん」

「ルーチェ！余計な事を言つな！」

『……………びっくりした。何だ…イシユね…』

ルーチェとはもった。

だって余りに勢いよく、しかも突然、入って来るから。それに構わずイシユは続ける。

「お前が余計な事言つと、薫の考えが変わるかもしれないんだぞ？やめろ」

「あら、どっちにしろ嘘は良くないわ」

「……………薫、馬車の用意が出来たから、帰るぞ」

「ちょっと、無視しないでくださらない？まあもついいけど、嘘はつかない事よ。薫、また来てね！今度は泊まっていかない？」

「お泊り？うん、是非！」

大分、時間が経ってみたいだから、今日はここまで。  
大人しくイシュに連れられて行ったんだけど、馬車があんなに辛かつた事は無いと思う。

## ルーチエ姫（後書き）

次回、馬車で！

番外編書きたいなあ…。皆様、何か希望ありましたら！

## In the 馬車

馬車に乗るとカイはもう座っていた。  
あの大きい体躯だから、椅子を丸々一個使ってる。  
それにしても…不機嫌。

「薫様の手を離してください？」

「あ”？」

またかよ。何でこんなに仲が悪いんだー！！仲良くしてよね！（切実）

「2人共、ほんとに怒るよ」

「だって薫様！こいつが！」

「あ？お前が先だろ」

「……ケンカするんだったら、帰らないもん」

そう言うと2人はピタリと言い争いをやめて、口をはくはくと動かしながら言い訳を始める。こつこつ、たまに行動が一緒なところ仲良さげなのに。

「…っ！薫！仲良く……喋らない様にするから、帰ろう！！」

「薫様！僕も！僕も突つかからない様にします！一緒にいて下さい  
！」

「……………次、やったら帰らないから」

ふうっ、これで仲良く…は無理かもしれないけど、ケンカはあんまりしないですよ。

これは、お母さんがお父さんとケンカした時、使ってた手口だ。

実家に…って言った途端、お父さんが土下座してた。お母さんってすごいな。

「……………薫」

「何？」

振り向いたら、イシユが捨てられた子犬みたいな目で、こっちを見ていた。

な、何だその目は！

「その…怒ってるのか？…すまなかった」

「…ケンカしないんだったら、いいよ」

そう言った途端、何か切れたかのように抱きしめられる。

カイは居眠り中だ。

「許してくれたから、今日も一緒に寝て良いんだよな」

何言い出すんじゃないー！こいつは！

「ダメだよ！アレはアレだもん」



「……寂しい。今日は薫にあんまり触れてない」

「毎日、触れなくなっただていいでしょ!」

「ヤダ」

「っダメなものはダメなの!……んっ」

唇にイシユのそれが押し当てられる。

ああ、言いたい事は沢山あったのに。イシユはずるい。

「……なあ、薫……いいだろ?……」

「……ふっん……ダメ……」

キスの合間に尋ねられるけど、その手に乗るか!  
イシユの舌が入ってくる。熱い……

「おい!薫様に……!うわーっ薫様あー!」

カイの声が響く。……ん?カイ?あれ、いつから起きてたのおおおお  
?!

流石のイシユも、すんごく不機嫌そうに顔を上げる。

「邪魔するな」

「ああ?!薫様に必要以上にベタベタするな!」

「無理だ」

2人共、約束を思い出したらしく、ここで黙ったけど。恥ずかしい…！カイが見てたなんて！うう。

思わずカイの毛に顔を埋める。そう言えば始めてだ。

ふわふわー。すごい。柔軟剤を使った高級タオルよりふわふわ。

あ…寝ちやいそうだ。眠い…

結局この後、薫は爆睡。

カイは嬉しさを、イシュは苛立ちを隠せなかった様だ。

家に着き、ジャンケンに勝ったイシュに抱き上げられると流石の薫も起きたけど。

「…んー、アレ？おはよう、イシュ」

まだ眠気が残ったような顔で、へにやりと笑う薫を見たイシュは色々大変だったそうなの。

In the 馬車(後書き)

次！番外編行きたい！

## 番外編 ロリコン疑惑（前書き）

番外編について沢山意見をいただきましたので、2つを合体させてみました！

書いてて楽しいので、番外編だけ書く所作ってしまおうか。

## 番外編 ロリコン疑惑

イシユ様親衛隊とは！

一つ！　？？イシユ様を何時もそばからお守りする事！

一つ！　？　？抜け駆け厳禁！

活動は主に隊長宅です。城から徒歩五分。

入会無料。年会費　500万。貴族、女性のみ。

6:00am?

親衛隊の朝は早い。通常、月曜日に行われる朝の朝会の為だ。最近の話題は専ら薫の事である。

イシユの怒りにより、少し落ち着いてはいるが見ただけだ。

朝会と言っても、校長が台に立って意味の無い事をベラベラ喋るあれでは無い。

隊長が中央に座り、厳かにお茶会は始められる。…ように見えた。

「隊長っ！昨日のイシユ様見ましたか！？耳かきしてましたの！」

そう切り出すのは、No.13だ。

「なっ！それは是非とも見たいものですわ！！」

それに激しく食いつく隊長。名は、ミランと言った。

イシユとの出会いは彼女の初めての社交デビューパーティー。その日、会員15名の公認ストーカー軍団が誕生した。

15人、少ないように思えるが、15人にストーカーされてる様を想像していただければお分かり頂けるだろうか。

尚、会費の500万のほとんどは彼女達のお茶代に消えてゆくのだ

った。

「もちろん、写真に収めましてよ！」

「流石。コレは貼り出しますわよ！」

隊長の一言で部屋に貼り出される、イシユの耳かき写真。

『きゃーっ！』

変態である。

普段なら、ここでイシユの出迎えに行き、

その後は各々、イシユを見守るはずだった。ぶっちゃけストーカーだ。だが！この日は違った。

ついに完成したのだ。あのクッキーが。一粒食べると、たちまち子供の姿に戻ると言う不思議なクッキー。効果は1日だが。

「っ、ついに完成しましたのね…」

依頼していた魔術師がもっているクッキーを見ながら、ミランと会員はごくりと喉を鳴らした。そもそも、

「子供のイシユ様はそれはそれはカッコ可愛いのでしょっね…」

と言う誰かの一言から始まった事だ。あれから約半年、それがやっと完成したのだ。それまで行っていたいどれほどの経費が無駄になった事か。そのクッキーはいわば、彼女達の努力の結晶と言えるだろう。それを今…渡そうとしている。

「あ、あの！イシユ様！コレ、私達が頑張って焼きましたの！どうぞ！」

自分で焼いた、というのは本人達いわく、可愛い嘘らしい。

イシユは断ろうと口を開きかけて、口を嚙む。

今、彼の頭には、自分の執務室で待っている薫の姿があった。とたんに緩まる口元を手で隠しながら受け取る。

一応お礼も言っつて。

以外にもクツキーを受け取ってくれたイシユに、いよいよ興奮も高まって来た。

ここまでは計画通り。会員はいそいそと執務室の方に移動する。

「とうとう見る事が出来ますのね！」

「楽しみですわ！」

執務室に戻ったイシユは、普段なら絶対に出さないような柔らかい声で薫を呼ぶ。

その呼びかけに素直に応じた薫を自分の膝に乗せると、彼女の口にクツキーを入れる。

まずい、これは予想外だ。

それをばっちり見ていたストーカー達には既にざわめきが広がっていた。

イシユに可愛がられている薫もそうだが、今の問題はクツキーなのだ。そしてそのクツキーは薫の口の中へ。

「クツキーが！！！」

クッキーを食べた薫は、体から放出されるピンク色の煙に少しづつ巻かれていく。

それに気がついたイシュは目をカツと見開き、薫に呼びかけるが返事はない。どうにかしようとして手を延ばした時、はたと思い出す。このクッキーを焼いた張本人に説明させればわかるはずだ。必ず近くにいるはずの気配に向き直り低い声で尋ねる。

「あのクッキーは何だ？薫に何をした？」

必死の形相のイシュに上手く舌が回らなくなっているが、それでも必死に説明する。

今はイシュの誤解を解かなければ。

「あ、あのお、すみません！イシュ様！アレは…食べた人を子供の姿に戻すモノなのですわ！」

これを聞いてホッと胸をなでおろしたイシュの思考はもう違う事を考え始めていた。

子供？って事はそれは、もしかしたらものすごく可愛いんじゃないか？否、もしかしなくても可愛いはずだ。

しかし問題は期限。

「…元に戻るのか？」

「は、はいっ！一日程で！」

ここまで聞いて、イシュの興味はもう、全く違つところにあった。小さい薫を可愛がりたい。抱き上げて見たい。



今度は緩む頬を隠す事もせずにミラン達を追い返し、薫の方に目を向ける。

すると最初に目に付くのはぶかぶかになってだらしなく床にずって  
いるドレス。

それから、わずかに赤みがさした、ぷっくりした頬。そして、大きな目。

ぺたんと自分の椅子に座る姿はそれはそれは可愛くて、思わず手のばして抱き上げる。

薫は抵抗なく抱き上げられるが、不思議そうに首をちょっと傾ける。

「おにーちゃん、だあれ？」

「…っ！記憶も子供か…俺はイシュだ」

「そっかー！あたしは、かおるーっ！」

そう言ってニコニコ笑う薫に、イシュはもうメロメロである。

いったん薫を下ろして考える、服をどうにかしなければ。取りあえずもとのドレスを軽く巻いておく。

「…おいで薫、俺と一緒に着替えに行こう？」

「行くーっ！いしゅー、だっーっ！」

「もちろん」

出発しようとしたところで、タイミング良くルシファールが入って来て、驚きに目を見開く。

「隊長?! 誰ですかその子! まさか隠し子?! 薫ちゃんに知られたら」落ち着け」

「はあ…。じゃあ、その子が薫ちゃんなんですか…可愛いですね」

「ああ、だから、代わりにドレスを取りに行く」

「言つてらっしゃい…隊長、頑張ってくださいね」

どこか自慢気に答えるイシュにアルデルはため息を尽きながらエールを送ると仕事に戻って行った。

……

アルデルの言葉の意味はすぐに分かる事となった。

ドレスを貸してもらいに行ったルーチエは、薫を着せ替え人形にでもする勢いで次々とドレスを着せては悶え、

それを見に来たアルデルは薫にちゅーしようとして、イシュに殴られ、使用人達はこぞって可愛がった。

その大変な騒ぎの中からもなんとか抜け出し、つかの間の平和とも言えるその時間を、薫とゆっくりと散歩することに費やしていた時。

手がぐい、とひっぱられ、いしゅ、と少し舌つ足らずな声で呼ばれた。

クセになりそうだと思いなながらも、薫と同じ高さまで視線を落とすと、今度は小さな声でおねだりされる。

「あのね、かおる、あそこのお花がほしいの。いしゅ、とって?」

小さな指が指す方を見れば、大きなコスモスが咲いていた。

こんなに可愛いお願いを断るはずがないと、すぐにとって来てやる。すると嬉しそうに頬を緩ませて、ありがとう、とまた小さな声で言う。どういたしまして、とにっこり笑うと、薫がまたなんとも嬉しそうに笑い、

「いしゅ、ありがとうのちゅー」

といいながら、俺の頬に小さくぬくもりを残す。

可愛いなあ、本当に。小さくても薫には敵わない。お返しに、俺も口づけを、唇に差し上げましょう。

その後流れた噂は、隠し子疑惑よりも、ロリコン疑惑。

**番外編 ロリコン疑惑（後書き）**

本編より長く書けた恐怖。

## マジメな話

時は夜、夕御飯もお風呂も終わった時間帯。  
イシユの部屋の前で、悩んでいます。

カイが眠そうにこちらを見上げては、諦めた様に視線を戻す。  
ごめんよ、カイ。でも！悩んでるのよ！

ああ、どうしよう、うさぎさんの事話そうか。どっちにしる話そう  
と思っただけど、いざ話すとなると、ちょっと…うん。恥ずかしい。  
勇者とか勇者とか勇者とか！でも勇気を出すんだ私！

「い、イシユ？」

そつとドアを開けながら呼んでみる。

「…薰か。どうしたんだ？あ、もしかしてやっぱり一緒に寝」違っ  
から

まだ諦めてなかったのか…あつ話がそれた！今の私には目的がある  
のよ！

頑張れ、私！

「あのね、マジメに話したい事があって来たの…聞いてくれる？」

「ああ」

イシユがまたしても膝をポンポン叩いている。

マジメな話なんだってばー！！とりあえず無視してイシユの正面に  
座る。



「危ないから、勇者なんてやるな薫。バカのウサギに何か言われたのか？締めてやるから今度会わせる…」

「やーめーれー！」

「実は信じてもらう事よりも、説得の方が難しいのかもしれない。それにしても…」

「2人共？信じてくれるの？」

「薫の言う事だし、辻褄もあう。信じるしかないだろう？」

「僕は薫様の言う事なら何でも信じます！」

「…ありがとう」

「薫には兄がいたのか…挨拶した方がいいか？」

「薫様！ウサギよりオオカミですよ！オオカミの方が可愛いですよね！」

「…ああ、この人達に出会えて良かった…なんて感動に浸ってたのにムードぶち壊しだ！」

「文句を言おうと思ったら、カイが擦り寄って来る」

「薫様は…元の世界に戻るんですか…？」

「っ！戻るのが！薫！！！」

「…全部終わったら戻ると思うよ。出来れば」

「戻る…」

「…っイシユ」

嫌だ。イシユともカイとも離れたくない。でも…帰らなきゃ。

イシユに手を引っ張られて、そのまま抱きしめられる。

「いしゅ…?」

「俺は…俺は、薫と行く」

「ええ!でっでも、もう皆と会えないんだよ?!アルデルさんとかマーサさんとかとも!」

「いいんだ」

「ダメだよ!」

「俺は…今、何より薫が大切なんだ。薫と離れるんだったら、他の全てを切り離してでも一緒に行く。…だから、もう泣かないでくれ」

「でもっ、さ」

「いいんだもう何も言っな」

「…ありがとうイシユ。…っめんね」

「気にするな」



「薫様、僕も一緒に行きます！……おい、薫様からいい加減離れろ」

「ありがとう…カイ……じゃあ寝ようか」

それでイシユから離れて、自分の部屋に行くことと思ったんだけど、離してくれない。

「イシユ？離し」「一緒に寝よう？」

「……ダメ」

「なんで」

「なんでも」

「心配だ」

「僕がいるから心配無い」

「くそっ…明日の朝起こしに来てくれるか？」

「いいよ」

「約束だからな。じゃあ、おやすみ」

おやすみのキス。軽くだけど、さみしさを訴えてる感じ。

何なんだ！でも…何だかやっぱり可哀想な気がしてくるから、恥ずかしくて話してないアレを囁いてから寝よかな。うん、まあ嫌がらせも兼ねて。

「イシユはね、私の運命の人なんだって…おやすみ」

効いたかどうかはわからないけど、イシユの耳が確かに赤くなっているのを見たから効いてるんだろう。

## 聞いてない(前書き)

旅行に行つてまして、その旅行先でwifiが使えなかった！  
うえーん。更新遅くなりまして、スイマセンー、(；；)ノ

聞いてない

「薫様？僕のベットはこれですか」

「……………多分？」

「一緒に寝ても良いですか」

「……………今日はがんばれ。それも良いよ。野生っぽくて」

「薫様あああ！」

ごめんね！でも、初めての一人寝を阻止される訳には行かないんだ！

あの後、私たちは寝に行った、んだけど一つ問題が。  
カイのベットはもちろん用意してくれていた。

だけど何を間違ったのか、そこには薫の山が置いてあった。  
毛布とかならまだしも、コレには流石に同情する！

「まあ、アレだよ。何でこうなったかは分からないけど、こんなとき  
きはポジティブに！」

「薫様なら、この状況をどうやってポジティブに考えますか？僕ど  
う考えても家畜かなにかですよ……………」

「……………」

うう。否定できない。

がんばって説得して、今日はそこで寝てくれたけど、明日はベットを変えてもらわねば！

—————

あ。眠りについたのに起きてるってことは、ウサギさん？  
とりあえず叫んでみる。

「ウサギさ」うるせえな。おい」

「居たのね。はいっ！質問があります！」

「おう、なんだ！何でも聞け！」

マニュアル小脇に挟みながら、偉そうに言っなよ。  
まあいいけどさ。

「今私の家族はどうなってるの？」

「あちらの世界では、お前の存在は無かった事にされてる」

「……………え」

ショック。何だよそれ。自分勝手にもほどがあるよね！  
ん？…よく考えたら、魔王倒すまで帰れないんだし、心配してないんなら良いか。

「お前が戻れば記憶は戻って、なーんにも無かったかのように日常が続く」

「へえ。じゃあ、私がもしもイシュヤカイと一緒に連れて行った場合？」

「カイ？使い魔か？連れて行けるのは1人だけだ」

……は？

「何で？そんなの知らなかったよ？」

「うつ…でも、それが規則だ。あと…何か、どうしても帰らなきゃと思ってるみえだがよ。別に残ってもいいし、忘れられてるのが悲しいなら、家族にもチラツと会えるし、家族をこっちに移してもいいんだぜ？」

は、初耳ですけどお！何それ！じゃあ、イシュヤが無理してくる事ないじゃん！

そりゃ、帰りたikedさ。家族に会えるんだったら、別に良いかな。うん。

…私って単純？

「そついう重要な事はもっとはやく言おうね？」

「お、おお、すまん……………」

ああ、せつかくイシュヤが決意してくれたけど、もう一度話し合おう。

「あ、ウサギさんには定期的に会えるの？」

「うーん、俺の気が向いたらな。でも俺 新人だし、やる気バリバリだから」

やる気の問題なの？そこ！

## やる事

朝、目が覚めた時、カイはまだぐっすり寝ていたから丁度良いと思  
ってイシュを起こしに行くことにしたけど、全然起きない。はあ…。

「イシュー朝だから起きてー！」

普通に起こしたんじゃ、絶対おきないからイシュのお腹に乗ってみ  
る方法を試し中。

「ん…」

おっナイス反応！これは良いかもしれない！  
調子に乗って飛び跳ねる。

「……………ぐっあ……………薫…やめっ……………」

ふふん、さすがのイシュも起きたわね！苦しそうだけど。

早く降りろと言うように、イシュの手が伸びて来て私の視線がぐる  
りと変わる。

今度は体制が逆になって、身動きとれませーん。…絶対なんかされ  
る！

「薫、おはよう」

身構えていたのに、イシュがしたのは触れるだけの軽いキス。

ん？コレは…変だ！



絶対になか裏がある！裏が！

今までいろいろされて来たから、その辺の信用は薄い。

「あ、そういえば昨日のアレは本当か？薫」

「アレ？アレって…あっ！いやっあの…うっ…本当だよ」

しばらく考えた末に出た結果は、ウサギさんが言った運命の…「こによ」

ああ、あんなの話さなければ良かった。恥ずかしいっ！

「ふーん？で、薫は俺のこと好きか？」

また何を言い出すんだこの人はー！！で、って何よ！で、って！  
恥ずかしいので、そっぽを向いていたら無理やり向きを変えられる。

「かおるー？」

ああ、朝のイシュはフェロモンだ。

寝る時に上を着ないせいで、むき出しになっている腹筋とか特に。

「す、好きだ…よ…」

「良く聞こえない」

イシュがニヤリと笑ながら言う。魔王！魔王だわ！久しぶりに魔王！

「うっ…だ、大好きっ…です…」

「俺も好きだ。薫が思ってるよりもずっと」

改めて言われると嬉しいものだ。  
でも、ニンマリ笑ったまま言うイシュには、裏がある様にしか見えない。

不意にイシュに耳元で囁かれる。

「キスしても良いか？良いよな」

それかー！！裏が来ましたよ！

しかも聞いた意味ないじゃんそれ！

「…んっ…あっ……」

今度はさつきより深くで、濃厚なキス。

イシュの唇が離れる少しの時間に酸素を肺に送り込む。

「薫、ちょっとだけ」

…何？

イシュが鎖骨近くを軽く噛む。チリつとした痛みが走るけど、直ぐに終わる。

キスマーク？独占欲。

あ、こんな見えやすいところにつけてどうしてくれるんだ！もう！

「何でそんな見えちゃう所に付けるの！」

「薫は俺のモノだろう？薫も付けるか？」

ああああ！この人 全然 話がわかってないよ！

「そうじゃなくて！」

「付けないのか？残念。俺は…お前の印欲しいんだがな」

無視なのね！イシュさんキスマークのことで頭が一杯なのね！

「ほら！変なこと言っていないでもう起きようよ！ね？」

「嫌だ」

何でだー！

そんな私の危機を救ったのは朝の恒例行事でした。

「イシュ様ー！朝でございます！あら！朝からなにしてるんですか  
！」

マーサさん万歳！！

一方イシュは眉間にシワを寄せて明らかに不機嫌。

「マーサ…ノックしろ」

「部屋の主がノックしても起きないんじゃないじゃあ意味がないでしょう？」

ごもつとも！

それにこれがないと私が困る！（多分）

「明日からノックしろ。返事がなかったら入れ」

マーサさんは怪訝そうな顔をしてるけど私の顔をチラッとみて答え

る。

「……わかりました。ちゃんと起きてくださいよ？」

ええ！そこOKしたらあかん！

その後、頑張つて講義してみたけどイシユは取り合ってくれないし、笑顔怖いし。

こんな訳で、イシユの朝事情は本来あるべき姿（？）すなわちノックにもどつたのでした。

—————

「今日は稽古だから、薫は家で待つてるか？」

イシユがパンをかじりながら言う。今は朝食だ。

そっか騎士だもんね。やっぱり稽古とかあるんだ。

「うん。そうしようかな。やりたい事もあるし」

ふふん。私だつてやりたい事ぐらいあるんだ！

こっちにくる前はお菓子作り結構してたから、とりあえずお菓子を作りたい。

あと、すっかり忘れ去られてたけど、私の魔力について…とか。

「そうか。じゃあ、行って来る」

そついうと同時に軽くキスして出かけて行つた。

よしっじゃあ、何かやるぞー！

「エマ、サラ、お菓子作りたいんだけど。レモンとパイシートとバ

ターと卵とグラニュー糖、用意してくれるかな？」

「はいっお菓子ですか！良いですね！」

「薫様！それはもちろん味見付きで？」

そう言ったのはサラだ。それにしても味見って…もちろんじゃない！お菓子作りの醍醐味だから！

## やる事(後書き)

ふう、更新！

次回はお菓子作りです！何ができるかお楽しみに！

…って材料聞いたら分かる方いますねw

## 初めての差し入れ

2人に用意してもらったレモンを絞りながら、エマに材料を混ぜてもらおう。

そのさらに奥では、パイシートを持って待機してるサラ。準備万端だ。基本的に簡単なレシピだから、直ぐにできそうだし。パイを無事オーブンに入れ、あとは待つだけだ。

「楽しみですね！薫様！」

そう言ったのはエマだ。

「このまま待つてるのも暇なのでお茶いれましょうか？」

サラは務めてわたしの意見を聞いてるようだけど、顔に書いてある”お茶しても良いですよね”と。

と、言う訳で。

焼けてくるレモンパイの香りの中で、紅茶をすすってます。

ああ、本当は何かこう…魔法的な事がしたかった！お茶も良いけどさ！

何か悔しい。でもそんな時の為に！プランB！

「サラ？今日なんかする事ないかな？暇なんだよね」

これから考えますとも！

「する事ですか？…あっ！パイ沢山焼いたので、イシユ様に差し入れとかどうでしょうか？」

「良いかも。じゃあ、そうしようかな。どうせ余りそうだしね」  
よしっ。やる事は決まった。

イシユの所へ行ったついでにルーチエの所へも行こうかな。うん。

「馬車を用意しておきますね。私たちも同行しましょうか？」

「エマたちは良いよ。大丈夫」

「わかりましたー。…薫様！スカーフは巻いて行ってくださいね？」

「ん？何で？」

「いやっあのお…」

2人が私の首当たりをみながら言った所で検討がついた。

キスマークウウウ！うおおお！恥ずかしい…！

何でだー！何で忘れてたんだーっ！ていうか誰か反応してよ！

「う、うん。していくよ…あの、コレは気づいてなかったただけだから。本当に」

気まずい空気になった所へ丁度良くオーブンが鳴る。

「…できると本当すごい量だね」

「…ですねえ」

なんたってパイ7枚だ。



はじめはそんなに沢山作るつもりなかったけど、楽しくってつい…  
ね？

「じゃあ、わたしは切ってカゴに入れておきますね！その間に配ってきてください」

「はい」

さあ、どこから配るか。大所帯だからなあ。

.....

何だかんだで全て配り終えました！。

みんな喜んでくれて良かった。

特に料理長っぽい人。レモンの調理に悩んでたらしいです。いつも何かしてもらっている人に感謝されるのは嬉しい。

「あつ薫様！パイ冷めないうちに持っていかないと！」

「そうですよ！もう馬車の用意は出来てるんですから！」

2人に急かされて慌ただしく馬車に乗り込んで、出かける。

さつき喜んでくれたのが思いの外嬉しかったから、

イシユにあげるのが楽しみで「ふふ」と笑ってしまふ。

お城がみえてくる頃、すごい事に気がついた。

わたし、稽古場知らない！

…他の人に聞けば良いか。いやそれよりイシユがいなくてお城に入

れるか？

うーん。ここまでできて問題発生。

初めての差し入れ（後書き）

うー、明日も投稿する！ハズ…

稽古場ってどこだあ！

考えてるうちに門が近づいてくる。

あー、入れるかな？でもよく考えたら、サラとエマは何も言っていなかったし入れるよね！

「通行パスお願いします」

止められたあー！！ダメじゃん！あかんじゃん！  
パスって何？知りません！

後ろでめっちゃくちや焦ってる私を気にもせず、トムさんがいつの間にかパスを渡していたようだ。  
馬車がまた進みだす。

ふー、よかった。

焦る必要なかったじゃん！私！どんだけ緊張してんのさ！  
いやしかし、稽古場にはどうやって行こう？

「トムさん稽古場どこか知ってる？」

「いやあ、私は送り迎えだけなので分かりませんの」

知らないのかあ。うーん。

結局、場所は分からないまま外に出る。いい天気だ。

お城は、門から少し入った所に石畳の道が続いていて、そこからすぐに入り口になっている。

入り口にはいつもたくさん人が居るから、そこで誰かに聞こう！うん！

おっよーし！ひと発見！

「あの、稽古場ってどこでしょうか？」

答えてくれたのは無精髭の優しそうなおじさん。

優しそうな人を狙いましたとも。ええ。だって怖いじゃん！

「稽古場？突き当たり曲がって右。今日は確か7番隊だよな。お嬢さんも隊長のファンかい？親衛隊の人たち過激みたいだから、気をつけるんだよ」

なんていい人！教えてくれた上に私の心配までしてくれるなんて！それにしても親衛隊・・・ほんとどこにでも居るなあ。

.....

稽古場に近づくにつれ、活気のある声が聞こえてくる。そしてなんか男臭い。

お兄ちゃん、の部屋もこんなにおいだったなー。

おじさんが教えてくれた通り、稽古場の周りはすごい人垣だった。と、言ってもかなり離れた所で見ている。怒られるから？人ごみの中にマリーナさんを見つけたから、手を振ってみるけど、ぱいっと無視されてしまった。ちよっとシヨック。

そのとき、人垣が割れて稽古場を一瞬見る事が出来た。

「あ、イシユ」

イシユは奥の方で他の人の稽古を見ながらなにかを叫んでいる。

…カッコいい。

なんか、男の人だなあ…横顔とか。

そこらのモデルよりも全然カッコいいから、胸キユン倍増だし。

すぐに人垣がまた元にもどって見えなくなる。

…今思ったけど、こんなに人いたら渡せないじゃんっ！！

中には入れないみたいだし。うーん…どうしよう！

さっぱり思いつかないなあ…今日は諦めるしかないかなあ。

さっきまで聞こえてた稽古の音が消えた。

どうやら休憩に入ったって事らしい。

しかたがない背を向けて帰ろうとしたところに、声が響く。

「薫は？」

あ…イシユ、気づいてたんだ。

目があったようには思わなかったけどなあ…嬉しい。

本当は今日、このまま帰りたくなかったし。

「イシユーココだよー」

イシユに向かって手を降ると、ゆっくりとこちらに歩いてきてくれる。

周りの ” 親衛隊 ” に睨まれたけど、止めるつもりは無いらしい。  
認めてくれたとか！……いや自分で言っという何だけど、ナイナイ。  
だって皆さん強烈だし。アイドルの追っかけみたいなの？

稽古場ってどこだあ！（後書き）

我ながら微妙な切り方w



## 大人げない

イシユは私を見るなり、満足そうに頷いて稽古場の方へ私を促す。その時、さり気なく手をつないでくれるのが嬉しい。

「あのね、レモンパイ焼いたんだ。だからコレ、差し入れに思っ  
て・・・」

「ん。ありがとう」

返事は素っ気ないけど、耳は真っ赤だ。  
うっわー。イシユ可愛いー・・・普段魔王なくせに。

「嬉しいが・・・あんまり一人で外を出歩くな。心配だから」

心配させたみたい。ちょっと反省。

ああ。もしかして、なんだか静かな理由はそれ？

稽古場に目を向けると、全員こちらと言うより、私をじっと見てい  
る。

好奇の目は稽古場に入るとより強くなった。

居心地は悪いけどイヤな感じはしない。ただ純粹に興味を持たれて  
る感じ。

もちろん中にはルシファールさんもいる。

すると一人が前に出て来て、何かを言おうと口を開く。周りの人が  
何も言わず見守る辺り、代表、と言う事らしい。

「隊長！それが噂の、か、か、か、薫ちゃんとか言う・・・」

いやいやいや。どんだけ噛んでるのよ。隊長としてのイシユは相当怖いとか……うん、ありえる。普段だって怖い時あるもの！

「そっこだ」

と、イシユが肯定した途端。今まで張り詰めていた空気が嘘の様にわあっ！とコメントの嵐が巻き起こった。

「っマジかよー！！隊長に彼女！」

「隊長すごいっす！薫ちゃん可愛いっす！」

「噂じゃなかったー！だから言っただろー、マジだったー！」

今まで女性の影が見られなかったイシユに私は特例ってことはわかって来た。分かって来たもの……コレは恥ずかしい。

だんだん熱くなるほっぺたを隠すようにイシユの後ろに隠れると、イシユが手をやんわり握ってくれた。

「うるさい。20分後に再開するからな！」

『は、はいっ』

ほっ、やっと私への興味がそれた。悠長にそんな事を思ってたら視線は再び私に集まる。

否、レモンパイに集まっている。

「薫ちゃん……そのカゴの中身は……」

そう聞いたのは、ルシファールさん。

「あ、レモンパイです」

そう言うと皆、目を輝かせてカゴを見る。こんな分かりやすく正しいのか？

「あの、もし良かったらソレ、俺たちにも…」「俺のだ」

イシュ！どんだけ大人げないのあなた！！これは、みなさんに、です！でもなるべくそつと説得を試みる。なんでってだって、怒っちやうとあとで面倒くさそうだし。

「沢山あるので皆で食べよ？ね。イシュ」

「ヤダ」

あー！めんどくさい！

「イシュには家にも作ってあるから！」

イシュはそれでも悩んでいたけど、悩んだ末に折れた。

隊長が折れた！とかなんとか聞こえてきたけど、イシュっていつもはどんな人なんだろう。本当に分からない。ただ…怖いみたいだけ。

「あ、じゃあ1つずつどうぞ」

そう言った途端に食いつく人達。

甘いもの好きなんだー。スイーツ系男子と言っ言葉を思い出しまし  
た。

大人げない（後書き）

系男子（女子）っとか言うの流行りましたよねー！  
え？もう流行ってない？

ちよつと気分転換に新しい小説たちあげましたー。  
気分転換にどうぞー！

迷子だ！

全員、1つずつ手に取って嬉しそうに頬張ってます。  
ちなみに今だ不機嫌なイシユも。

「うんめえー！そいや、俺たちが差し入れ貰ったのって初めてじゃない？」

「え、そうなんですか？」

「うん、多分そうだよ。いつも隊長ばっかでさー、でも隊長食べないし。俺たちが食べようとすると差し入れた女の子が怒るし」

わお、初耳。貰ってるんだろーとは思ってたけど、食べてなかったんだ。

あああ！まさか甘い物が苦手なのかイシユは！

その辺全然聞いたことなかった！

あー、なんか無理して食べてたりするかなあ。…どうしよ。

「ねえ、イシユさ。もしかして甘い物キライ？」

「ん？別に嫌いじゃないが、あいつらはたまに怪しげな薬が混入してるしな」

キライじゃないんだ、良かった。

それよりも怪しげな薬って何だろう、気になる！

それは今度だれかに聞いてみるとして頭にしっかりメモしとく。  
目標は達成したし、そろそろ帰ろうかな。

「イシユ、じゃあ私そろそろ帰るね」

軽く言っただけで、心配だったらしい。

「っと待て！心配だから、ルーチェと居る。迎えに行くから」だそうです。

一人で帰るぐらい、平気なのに。ちょっと過保護すぎだと思う！

しかも行きすがら、皆いるのにキスされちゃったし。ほっぺだけど。

「知らない奴にはついて行くなよ？」とか言っつて。

小学生じゃないんだから！心配してるのは分かるんだけど……ねえ？

免疫をつけるために、こんど一人でお使いとか行っつてみようかな。

ルーチェに相談してみよう。

今だ心配そうに視線を向けてくるイシユを無視して、ルーチェの部屋へ向かう。

取り合えず、白い柱を右に、だ。

実を言うとお城の構造はまだぜんぜん覚えてない。いつも誰か連れてってくれてたし。道覚えるの苦手なんだよね。いわゆる、方向音痴ってヤツ。

白い柱の角を曲がって39回目、この覚え方の欠点に気がついた。

お城にある柱は全て白でした。

突きつけられた現実に言葉もない。

まさか高校2年生にもなっつて……迷子だ。

迷子だなんて……。お城 怖っ…！

動かないでいると余計に不安になるから、動こう！うん。

歩いてたら見つかるかもだし。行動あるのみ！

あの時の私の判断はあながち間違っではないなかったらしい。  
数分後、あの憎らしい白い柱の影に隠れるルーチエを見つけた。  
うーん、すごく怪しい。

覗いては隠れ、覗いては隠れを繰り返して、どうやら誰かを見てい  
るようだ。いきなり後ろから声をかけたら確実に驚くよね。あれは  
でも、何やってるんだろう、あれ。

まさか…もうこんな堅苦しい生活は嫌っ！とか言っつて、家出？！  
うわー！どうしよう！でも友達としてはここは何としてでも止める  
べきだよね！  
でもまあ、まだ決まったわけじゃ無いし、ここはやっぱり聞きなが  
ら。

強行突破！

「ルーチエ！何してるの？」

ルーチエの肩がビクッと跳ねて、それと同時に叫び出しそうになっ  
たけど、自制した。  
そんなに知られたくない事なのかな。やっぱ……家出しか考えられ  
ない。

「うっわ！びっくりしたあ。やめてよ薫！」

「ごめんね、で何してるの？」

ルーチエのほっぺたがほんのり染まる。

「特別に、薫にだけ教えてあげるわ」



そう言ってまたルーチェは柱の向こう側を覗き見る。

1人の男の人とパルカさんが話してる。

家出……じゃないみたい。よかった。

「私ね……一目惚れしちゃったの」



## 天然タラシ

一目惚れ…すなわち恋！すなわち春！わあ。

思考回路がピンク一色だわ。

友達の恋愛…これは全力で応援しなければ…！

ルーチエは秘密を話した事への恥ずかしさがあとから襲って来て、さっきからしたを向いていてこちらを見もしない。

「ルーチエ！私、応援するから…！」

ルーチエは私の宣言を聞いてやっと顔を上げ、慌てたように注意する。

「こ、声大きいわよ！…でもうん、ありがとう…。」

あ、そうか。覗き見てるんだった。

「うん。頑張ろうね！」

まずはターゲットを確認するべく、柱の影からもう一度覗く。

見上げるほどの長身に、黒髪。

顔立ちは整っていると思うけど、なんだろう、イシユや王子と比べると華がない感じ。腰に剣をさしているから、騎士なんだろう。話し方が優しそうで好印象。

「それで…告白は？」

「で、できないわよそんなの！振られたりしたら…！それに彼、優

しいから、身分とか気にするのよ。多分。それでも一応、二番隊長長なんだけど」

「へえ。隊長なのね。でも告白しないと、気持ちを伝える術はないよ？」

「ええ、わかってるわ、でもなんか「姫はこんな所でどうしたんですか？」

うわっびっくりした。心臓が……。

それはルーチェも同じだったみたいで、心臓の辺りを抑えて息切れしてる。

「っ！ラルはいつからいたの！！びっくりしたわ……」

ラルって言うんだ。近くでみるとさっきより大きい気がする。あ、身長の話ね。

ちなみにそのラル隊長は、さっきからルーチェしか見てない。もしかして相思相愛かと思うんだけど！違うかな。

「すみません。でも、あんなに大きな声で話していたら誰だって気づくでしょう？姫、そこのご婦人は？」

あ、今ちらつとだけ私の事見た。あ、またルーチェしか見てない。

ああ、もう絶対好きだと思う、ルーチェの事。

「ラルも知ってるでしょ？薫、あの、イシユの恋人よ。結婚を前提に……だったかしら、薫？」

爆発発言ってこういうのを言うんだろ。

え？何それ初耳なんだけど！！そうだったの？誰が言ったの？！……  
…何となく流れる的にそうなりそうな感じしたけど！というか、別に  
嫌ではないけどねとか、ごによごによ。

うわやばい軽くパニックだ。

早く質問に答えないと……ルーチエが不思議そうにこっちを見てい  
る！

「いやっ、あの、えー、だからそのっ、その辺の事はほらっ、ね？  
うん、知らないです、はい」

嫌ああ！何か墓穴掘った気がする！

見ないでー私をみないでー！ルーチエ謝らないで良いから！私がパ  
ニックなだけだから！

私がパニックになっても時間は構わず進んで行く。

まああれから、ラルさんがいるいろフォーしてくれて、自己紹介  
も無事に終わった頃、

「あの、じゃあこれから稽古なので失礼します。……ああ、ルーチ  
エ様、髪が絡まってますよ……綺麗な髪なんですから」

「あっ、あ、うん。ありがとう」

ラルさんは稽古に向かいましたとき。ていうか何この大声。

あれからルーチエは走って自室（以外と近かった）に行き、入ってすぐにドアを閉め鍵を閉め、奥の部屋へ行き、叫んだ。

「あの天然タラし野郎おおお！！！！」

ああ、なるほど。

「あれよ、ああ言う所なのよ！綺麗な髪なんですから？やだ、うっかりトキメいちゃうじゃない！！」

要するに、タラシ貴方がすごく好き。だよね？

天然タラシ（後書き）

天然タラシ…マイブームですw

## ガールズトーク

「ねえ、薫はどう思うっ?」

叫び終わってすっきりルーチェに聞かれる。

あんなに叫んでなのに、喉痛くないのかな。

慎重に言葉を選ばないとまた叫び出しそうだから、当たり障りない感じに答える。

「どう思うって……優しそうだね?」

「そうじゃなくてっ告白ってするべきかしら……?」

ああ、そゆこと。

恋してる本人って、なんで気づかないんだろう。絶対好きなのに。

「うん。そう思っけどなあ……ラルさん、絶対ルーチェのこと好きだと思っよ」

「なんで?! そんなこと言われてふられたら泣くわよ!」

「だってずっとルーチェの事しか見てないし」

ルーチェの顔がみるみる内に赤くなって、

何かを言いたそうに口をパクパク動かしたけど反論の言葉は出てこない。

ほらね。



別に恋愛に対して鋭いわげじゃないけど、あれはわかりやすい。

しばらくして決意を固めたらしいルーチェが顔をあげて、宣言する。

「……………私、頑張るから！ 時々相談に乗ってくれるわよね？ 薫」

それはもう、もちろんだけど。

そう言えば相談、私にもあつたんだよね。

「うん！あとさ……………私も相談があるんだけど良い？」

「いいわよ。待って、言わないで。……………イシユのことでしょ？ イシユの過保護には困りそうよねー！」

おお！ その通り！

稽古場からここへ来るのにも心配されたし。なんかなあ。

「そうなのー！ 今日ね、1人でここまで来たんだけど、すっごい心配して。帰るって言った時も、あとで迎えに行くからって言われて」

「うわっすごい。でもそう言う時はガツンと言うのよ！じゃないとズルズル過保護だわ！きつと」

そうだよねえ……………別に一緒に嫌だとかそういうんじゃない。もちろん。

だって好きな人と一緒にいれるわけだし、嫌なわけがない。

でも、いつかトイレにまで着いてきそうで、怖いかも……………それはないか。

まあ、そういう訳で！うん、取り合えずイシユには私が一人でも出

かけられるってことをわかって欲しいの！

「それでね、今度1人でどこかに出かけようと思ってるんだけど」

「いいじゃない！街なんてどうかしら？」

街？！そんなものあったのか……あ、私が行った事ないだけだ。行った事ないところは不安だなあ。

エマとサラを連れていくにしても、はぐれたら戻れないし。うーん。

「私、街って行ったことないんだけど、どんなところ？」

「あら！そうだったのね！街はとにかくたくさんお店があるわ。ブランドから屋台まで……あとはナンパが多いかしらね」

私これでも高校生なんで、ショッピングはめちゃくちゃ好きな訳で。店がたくさんあるのね！と思ったらルーチェが後からつぶやいた言葉は、ぜーんぜん聞こえてなかった。ちなみに、はぐれたら怖いな……とか考えてたこともキレイさっぱり忘れて、三十秒後には街に行こうと決めてましたっ！

「私っ！街に行くー！」

「決定ね！私はいけないと思うけど、楽しんできてね」

その時、奥の扉の方から音が聞こえてきた。

ドンッドンッ！

ルーチェ様ー？イシユ様がお待ちでございますー！

その音を聞いてルーチェが何かを思い出したように立ち上がった。ドアの方に走る。

「私っさっきドアの鍵閉めたこと忘れてたわ!!」

ああ、なるほど。……ていうかイシュね。

直ぐに帰ることになりそうだから、帰り支度を始める。

ルーチェがドアを開けると、そこには不機嫌なイシュが立っていた……らしい。

その証拠にほら、今私を抱き上げようとしたイシュは何故かすんごく不機嫌です。

「薫、帰るぞ」

「え、あ、うん。じゃあ、頑張つてね!ルーチェ!」

「ええ、頑張るわ!薫も!」

手短に挨拶を終えて、私は馬車に連行されたのでした。うう。

## ガールズトーク（後書き）

更新遅くて申し訳ないです……泣

あつでも代わりに勉強頑張ってます！（関係ねーよ）ゝ（ ;

ノ||3||3||3

あ、はい。もう本当すいません！！（スライディング土下座）

どうかこれからも言い訳な私を見捨てないで下さい。。。。）

ノ、（。。。。）

## 不機嫌の理由

ああ、落ち着く。この香り、この感触。

俺の腕にすっぽりおさまった薫が、下から不満そうに見上げて来るが離すつもりは毛頭ない。

……可愛すぎるだろ。

そもそも不機嫌なのは、兵士にも差し入れをした事に妬いてたから。なんて言ったら、またキスしちゃうダメとか、ばーんときそうだから黙っておこう。

馬車の方に歩いていくと、薫がトムに手を降る。

トムもそれに気づいて振り返す。なんか仲良いな。あーっクソ、また嫉妬か。

相手はトムなのに。くだらない事で嫉妬する自分に苦笑したくなる。少し前までは女なんてどこへでも行けって感じだったのが。

薫だけは絶対誰にも触らせたくない。  
不意に薫の声が意識へ飛んで来る。

「イシユ、なんで不機嫌なの？」

上目遣いの薫に見つめられると、理性がヤバイ。

可愛がりたい。そんでもって、ちょっとイジメて見たい。

「……別に」

「でも、怒ってるじゃないっ」

薫の目尻がほんのり赤く染まって、眉間にぎゅっとシワがよる。

その姿を見て堪らなくなつて、既に着いていた馬車のシートにゆつくりと薫を下ろし、少し強引にキスをする。……もちろん薫を傷つけたりしないように。

「んっ……あっ……」

甘い声が、そそる。

そんな声聞いてたら止まらなくなりそうで、今の内に切り上げる。初めの方こそ驚いていたが、最近では薫も俺の舌についてくるようになって、それがまた可愛くて仕方がない。

っ……どこまで惚れればいいんだ。

ふと、コレも運命なんだろうかと言う事が頭をよぎった。

薫にその事を聞いた時、嬉しくもあつたがそれは保険にすぎないと思つた事も覚えてる。

運命がなくても俺は薫に目を奪われただろう。

運命なんてなくても薫を手に入れる自信がある。

運命じゃなくてもいいんだ。俺は絶対薫を見つける。

薫が、いきなり何かを思い出したように勢い良く顔をあげる。

「そついえばっ、カイ……心配したかなあ？」

その問いにまた嫉妬して、眉間には自然とシワがよる。

少し前まで、そう、あの”犬”が来るまで薫の思考は俺が支配していたと言つてもいいぐらいなのに。

「イシユ嫉妬してたの？……ね、そうでしょ」

薫がいたずらつばい笑みを浮かべながら聞く。

もんもんと考えてたら凶星だ。

答えないと薫は怒るだろう。

「ああ、妬いてた。あいつらに差し入れた事も、あの犬の事考えてる事も、全部」

早口で言った事に驚いたらしい、薫がなんだかあぜんとしている。でもすぐに満面の笑みになる。

「ちょっと飽きたけどさ、嬉しいよ。ふふっ」

そんなこと言われて止まる男はいないんだろう！

俺はゆっくりと薫の唇に自分のそれを重ねた。

## カイの叫び。

憎々しい藁の塊から這い出してから数分、スゴい事に気がついた。  
薫様が……！いない！！

待つて待つて、考えないとわかんない。

薫様は僕が寝ている間に何処かへ行ったんだ。うん。

だからアレ、夜に移動したって事だよ。それが明け方。

て事は…薫様はトイレに行ったんだ！

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

アレ、おかしい。

薫様が帰ってこない。おかしい。

ああ、きつとお腹がいたいんだ。うん。そうに決まってる。

?

お腹が痛いにしては長くないか？

きつともものすごくお腹がいたいんだ。大丈夫かな。

取り合えずトイレへ様子を見に行こうかな。

前足を使ってドアを開けて、右方向に歩き始める。

右方向って言うのは野生の勘だ。

その間、何人かとすれ違ったけど皆、僕を見てニコリと笑うだけで  
気にしない。



あ、トイレここか。

ドアをノックして薫様がいるかどうか確かめてみる。

返事がない。　？またやってみる。　？返事がない。

なんだか心配になってきたので耳をドアにぺったりつける。

音がない。　？またやってみる。　？音がない。

コレさ、いないよね薫様。

もう確実にいないよね。僕もトイレのくだりから薄々思ってたけど

…薫様が僕を置いて行くはずないと思って。

そっただっ薫様は僕をおいて行ったりなんか…！

あ、ダメ。前が霞んで見えないや。

取り合えず、寝よう。起きたらきつと薫様もいるはず。

僕は傷心を引きずって寝室に戻った。

どこですかああー！薫様ー！！！！

きつとその叫びが届いたんだ！

僕が横になって程なくして、馬のひずめが聞こえてきた。

馬の音に合わせて僕も走る！

走って走って玄関に！……っ薫様っ！いたああ！

イシユの野郎も一緒だけど！いたああ！

僕に気がついた薫様はアイツとつないでいた手を離して駆け寄ってきてくれた。

あいつには露骨に睨まれたけどさ、ザマーミロ！

「カイ！ごめんね心配したでしょ？今度からは一緒に出かけようね」

「心配しましたが戻ってきてくれたので、いいんです！」

いいんだ！実際は不満もたくさんあるけど。アイツ（イシュ）とか  
アイツ（イシュ）とかアイツ（イシュ）とか。なんで一緒にいるの  
！？

でも、いいんだ！だってほら、僕の中心は薫様だから。

危険。

”ゴ—オオ”

後ろから響いてくる電子音はしばらく止みそうにない。

って言うか、ドライヤーがあるんだったら早く言っただけ良かったな。

イシユは私を膝に乗せながら、私の髪を乾かしている、ちなみにカ  
イは膝の上。

カイは温風にあたってまどろんで来てるし、イシユはどうやら真剣  
に私の髪を乾かしているから、珍しく誰も話さない。

それで、考えてみたんだけど、まずイシユに言う事—！

異世界に行くか。こっちに残るか。

これは重要だよな。

でもさ、なんていうか、気まずいっていうか。ほら、ちょっとシリ  
アスに話し合いが行われた手前、やっぱり止めますってすんごい言  
いずらくない？

それもこれも、全部ウサギさんのせいなんだけどさ。あ、なんかイ  
ライラして来た。

あともう一つは魔王問題。

これは良くわかんないけど、いつもどこかで気になる感じ。

ほら、テスト範囲のわかってないテストみたいな。

うん、そんな感じ。でもこれは情報が全くないから、ウサギさんに  
聞くべきだ。

って言うかウサギさんが話さないのが悪いんだけどさ。  
なんか何なのウサギさん？意味あるのアレ？

うーん、片方は話しづらい、もう片方は話せない。悩ましい…っ。

カイのヨダレが私の夜着にかかりそうになって、ハラハラしてきた頃、電子音が鳴り止んでイシュが私の髪に鼻をうずめる気配がする。

「薰、終わった」

「うん、ありがとー。今度は私がイシュの髪乾かそうか？」

「俺のはもう乾いたからいい。でも薰のはこれから俺がやるから」

うわ、なんかスゴい嬉しい。

人にドライヤーかけてもらうのっていいよね！美容院とかのも好き！  
それにしても、終わっちゃったよドライヤータイム。

話すべきかっ？！……話すべきだよね。憂鬱。

カイとかもう熟睡だし。

「あのね、イシュ？ちよっと……」

「ん？どうした薰？」

イシュは私の腰に回した手を強めながら言う。

「昨日の夜話した事があつたでしょ？それをウサギさんに報告したら、向こうの世界に行けるのは、私とイシュだけなんだって。カイはいけないの」

カイは自分の名前が出たところで、ピクツと耳を動かしたけど、やっぱり起きない。

「うん」

「だから、私がこつちに残ろうと思うの」

「でも、それじゃ薫が家族に会えないだろう？」

「会えるらしいの。ウサギさんが教えてなかっただけで」

「クソっなんだよそのウサギ……薫はそれでいいんだな？不満もないし、心配も……ないな？」

こんな、後からの話で、イシュも相当、覚悟決めててくれたと思うのに、それでも私の心配をしてくれるのは、やっぱりイシュは優しすぎると思う。

「うん、ありがとう、イシュ。大好き」

急にイシュの香りが遠くなったような気がして振り向いてイシュにぎゅーっと抱きつく。カイはまだ膝の上だけ。

イシュが抱きしめ返しえくれる。嬉しいんだけど、待って、なんで夜着に手が入ってきてるの?! あれっあ、押し倒されそうなの私?

イシュはこいつジャマだな。とかいいながらカイを落とすと、私を素早く抱き上げてベッドの上にする。それでも起きなさそうなカイは今日、相当疲れたんだろうなあ。って人の心配してる場合じゃないじゃない私!

取り合えず既に上半身は裸になってしまったイシユさんと、私の肩紐を撮ろうとしているイシユさんを止めようと試みてみる。ほぼ乗りかかられてるから抵抗は愚か、暴れる事も出来そうにない。

「イシユっあの、ストップ！ストップ！」

「無理。もうダメだ」

本当にイシユは止まる気配がない。まだ紐は取れてないけど、今はキスばかりされてる。肩から、顎にかけてにゆっくり。

「薫があんなこと言うのがいけないんだからな？事項自得だ」

複雑に結んであった紐（ありがとう紐！）は解くのを諦めて、今度は違う方法で行こうと思ったみたい。ちょ、マジで危険！

「イシユっお願いっまだ心の準備が出来てないからっ」

「そんなの必要ない。大丈夫だ、優しくするから」

そう言う問題じゃなくてっ！

どうしたら…っ！そうだ、不意をつけばいいのかな？よし……コレしかない。実行。

そういつている間にもイシユは手を止めない。

「イシユ？」

生返事をしながら顔を上げたイシユにキスをする。

私がしていたハズなのに、何時の間にか位置はチェンジ、私がされてる。

「んあ…つぶ…」

口の中で探るように動くイシユの舌は、今日はスキマをくれない。でも、一応身動き取れる状態になった。

イシユの唇が切なげに離れたその一瞬に少し距離を取る。

「薫が欲しいんだ。おいで」

一途な声に負けそうになるけど、乱れた夜着を直しながら答える。

「イシユ、あの、また今度…でもいい？」

「…明後日、でも薫、1つだけ言う事聞いて欲しい」

スゴく簡単に折れてくれたけど、また今度って言うのが重要だったらしい。

この際、お願いごとは気にしない方向で。

突然よりはいいものの、明後日って！早い！怖い！だって痛いんじゃないの？！

「え、あ、うん。ありがとう。だけど明後日は…」薫？

「…はい」

あああ…！！押されてしまった。うつ、どうする私っ？

でも試練はまだ続いた。お願いごと軽く見てたら軽くなかった。

イシユが、ものすごい色っぽいって言うかフェロモンで、薫から

もう一回キスして欲しい。って言うから！

でも、あんな恥ずかしい事もう一回だなんてっ！

……ええ、まあでもしましたよ。

だってあんな目で見られたら。アレは反則だと思う！

結局開放してもらえたのは、かなり遅く。

一緒に寝ようって言われたけど、身の危険を感じたから辞退してきました。

……自分の身が心配です。



## マニユアル自慢

「お前らちょっと、イチャつきすぎじゃねえ？」

私が寝てすぐに、ウサギさん一言。

私が絶句している間にもウサギさんの話は続く。

「先輩からも聞いてたんだけどよ、思ってたよりスゲーな。

ちょっと目を離れたらイチャイチャイチャイチャ、お前あんまデレないほうが襲われたいしねーと思うぜ？まあ、とにかくだなお前ら少しは自重……」

「うわあっあっあああ！なんてっ見てるの?! どうやって?! もうヤダ帰りたい! ……こっち見ないでよ変態ウサギ! …」

あまりのショックに考えるより先に言葉が出た。ちょっと反省。変態なんて言っでごめんね、ウサギさん……やっぱり、変態。

「はああっ?! そりゃ興味本位で覗いたけど、お前誰にいろいろ教わってると思っただ! 変態はねえだろ! …」

ちょっと偉そうな態度にキレてしまったんだと思う。

ウサギさんが先輩とうまくやってるか心配。

「だって人の知らないところで、そう言う個人的な事を覗くのは…  
…あれ? ごめん間違えた。変態じゃないよね」

「…ふっ! そうだろう! 俺様に間違いはないな! ウサギ様と呼べ、ウサギ様と! …」

「それは覗き魔だった」

「それもちがああうー！」

「え、じゃあ何？ ストーカー？ うわ、最悪」

「おまつコノヤロー！」

それからいろいろ言い合って、二人とも悪口が尽きてきた頃にやっと口喧嘩は終わりを迎えて、最終的にどっちも悪いねって話になったんだけど、私絶対悪くないよね。うん、絶対悪くない。

そう言えば、魔王の事を聞こうと思ってたんだ。

ていうか本当にいるのかな。私がこっちに來た理由だし、いなきや話になんないけど。

「魔王って本当にいるの？ ウサギさん」

「いるに決まってるだろうが。何のためにお前が呼ばれたと思ってるんだよ」

「ですよー。でもさ、そうじゃなくて、どう言う人なのかとか。

みたいな事聞いたら、やっぱりマニュアルを取り出して行くつかの項目を読み上げる。」

「魔王はな、黒いぞ。あと変態」

「変態？ そこがスゴく気になるんだけど……マニュアルからじゃダメじゃない？」

「ダメじゃないぜ！何故ならこのマニュアルは対魔王用に、今までのデータを平均したものだからな！ふふふふ」

いや、マニュアル自慢はいいって。……本当好きだねマニュアル。

「魔王の性格が平均して変態なのはわかったけど、あの……」

「魔王は近い。覚悟しておいたほうがいいと思うぜ？」

最後にあっさり大事な事を言い残して、ウサギさんは消えた。何様？  
ああ本当に、めんどくさい。

## 寝坊

開け放たれた窓からのひんやりとした風で目が覚める。  
習慣でイシユを起こしに廊下をぺたぺたと歩く。

「イシユー？朝だよー」

あの時気がつかなかったのが不思議。

布団をめぐった先には、空っぽの布団が残ってるだけだった。

つまりは、イシユもう起きて出かけたって事。

・・・屈辱、寝坊した！

仕方なく、これもほぼ週間と化しそうだけどカイを起こしに行く。

ドアを開けると、エマとサラがベットを直してる所だった。

いつもお世話になってます。

「あ、2人ともありがとう」

「はいっおはようございます！薫様！」

2人とも笑顔で挨拶してくれる。ああ、私、2人のこういうところ大好きだわ。

カイの布団（変えてもらった）にチラリと目を向けると、カイはまだそこに居た。

「カイ？起きてー」

しっぽをパタンと揺らすだけでぜんぜん起きない。

なんで此処の人はみんな朝弱いのか？少なくとも、人を起こす方法で

頭を使ったのは初めてだな。うん。  
まあカイは取りあえず・・・

「イシユはもう起きたよ？カイ、起きて」

お兄ちゃんに張り合う幼稚園児のごとく瞬時に起きたよ。

「薫様、おはようございまっす・・・」

あ、まだ眠いんだ。

語尾がぐだぐだだよ、カイ君。

あ、そっぴやイシユはもう出かけたのかな？

「ねえエマ、イシユってどこに居るの？」

「え？ああ、イシユ様ですか？今日朝早く城とは違う方向に出かけて行きましたよー！薫様が寝坊なんて珍しいですね」

「うんまあ、昨日遅かったから。不覚」

「お一人でお出かけなさるときはいつも馬で行くんですが、今日は馬車だった辺り、どなたかご一緒なのでしょうかねえ」

今のはサラ。

ふーん、誰かと一緒なんだ。

「あいつ友達なんて居たんですね」

お、カイ起きたのね。

なんで、この2人仲悪いんだろう。ちょっと面白い。  
だってこんなに対抗し合う人も珍しいよね。

-----

昼間は、エマとサラとお菓子を作った。

今回はプリンだったから、皆に配る事は出来なかったけど、カイは  
気に入ったみたいで5個も食べてたし、楽しかったなあ。

「カイお腹壊すから、やめなつて！」

「大丈夫です！薫様の作る物に毒物なんて絶対にありませんから！」

「そうじゃなくてー！」

そう言えばそのお茶会でカイとエマとサラはすんごく仲良くなっ  
た。

なんか、悪友みたいな。

そのうち、イシユに何かしそつで怖いけど。

あとは、魔法を使つてみた。傍聴、カイで。

ホントに集中すれば軽く家とか作れるくらい、何でも出来るみたい  
だったから問題は私の空想力みたい。ファンタジー系の本をいつぱ  
い読んで、そういう知識をためる事を検討してみよう。

意見を募つた所、出た意見は、

「矢がビューン！つて炎と一緒に！いやむしろ炎が矢？うんそれが  
いいと思いますー！」

がサラ。何となくイメージは湧いたけど、ちょっと中二臭くないですか。  
ちょっとそう言うのはさける方向で。

「使用者のスペックをめちゃくちやあげるとかどうですかー?! パンチで地面へこむみたいないな!」

がエマ。まあサラより実用的だけど。怖いね。  
もうちょっと威力を下げよう。うん。

「アニマル動物型! 薫様はやっぱリオオカミですか?!」

それカイがやりたいだけだよね...。  
という訳で、検討が必要そう。

イシュは、夕方になっても帰ってこなかった。  
いつもは帰ってくるのに。日もとっぷり暮れて、心配になって来た頃マーサさんが教えに来てくれたんだけど、今日は城に泊まるんだって。

今となっては、それが、ううん。今日の朝からが始まりだったのかもしれない。

イシュは5日経っても帰ってこなかった。

でも、仕事が忙しいんだと思ってたし、その頃はそんなに気にしてなかった。

ただ気になったのは、約束の明後日にも顔すら見せなかった事。イ

シュが言い出した事でしょ？

イシュが居ない間もカイや皆と遊んだりしてたけど何となく寂しかった。

イシュはもう帰ってこない気がした。



寝坊（後書き）

新章はいりまーす！  
いやー長かった！

## 離れる靴先

イシュが城に泊まり込んで5日目の明け方に、遠くから馬のひずめの音が聞こえて来た。

眠くてはつきりしない頭でぼーっと音を聞きながら、体を動かそうと伸びをする。あの音はイシュだ。絶対、イシュが帰って来たんだ。仕事だから会いに行かなかったし、寂しいからなるべく考えないようにしてただけで、本当はずっと会いたかった。

だから、頑張つて起きて「おかえりなさい」って言ってあげよう。

「薫様、アイツ香水臭い奴といいます」

淡い光の中でカイがつぶやいた。

「うわぁ、びっくり。起きてるなら言つてよね。」

「香水臭い？つて女の人つて事？」

「だよ。香水をつけるのは基本的に女の人だ。」

「それともう玄関に着いたみたい。女の人をせいで完全にタイミングを失った。」

「多分、女だと思います。薫様、行きますか？」

「うーん……いいや。待つてるよ。……多分お客さんでしょ？」

頭でこんな明け方に？と言つ声が反響する。

ネガティブにしか思考が回らなくなってるんだ。不安。

あー！気になる！誰だろう？！

「カイ、やっぱり行こうかな」

でもその必要はなかったみたいだ。

部屋のドアが開いて、イシユが入ってくる。

カイの尻尾が不機嫌に揺れる。そんなに警戒しなくてもいいのに。

「イシユっおかえりなさい」

私に近づいて来たイシユにぎゅーっと抱きつく。

でも私の大好きな香りはしなかった。

代わりに鼻にまわり付いたのは、オレンジブロッサムの香水の香り。

イシユのじゃない。

「……しばらく俺に近づくな」

「……お前なに言ってるんだよ。薫様？無視していいです」

何かを察して私の頭は自動的に理解力の低下をはかっただらしい。

聞こえない。カイとイシユの声も聞こえない。

ようやく絞り出したのは苦しい疑問詞。

「……え、なんで」

なんで、全然わかんない。全然。

まずなんで謝られたのかもわかんないし、何で近づいちゃいけないのかもわかんない。

「絶対に俺の名を呼ぶな、触るな、それと……しばらくは帰らない」

ますます分からない。

分かりたくない。受け入れたくない。

イシユの顔を見るのが怖い。見たら全てが終わってしまいそう。

顔をあげるのがただ怖くて、イシユの靴先を見つめる。

どれぐらいそうしていただろう。一時間か、一分か、一秒か。

イシユの靴先は離れて行った。

柔らかい夜着にカイが擦り寄る。

もう、立ってはいられない。

「薫様、ベッドに行きますか？乗ってください」

ベッドに横になると、丁度目覚ましが鳴る。

目覚ましは瞬間、私の頭を覚醒させた。

イシユは、行ってしまった。

もし、あの時顔を上げたら、イシユのくるしそうな顔に気づけただ  
ろうか？



## 痕跡

あまりに苦しかった。

イシユはどこへ行ったんだろう。私を嫌いになった？

考えても考えても、結局最後に頭に浮かぶのはいつも同じ事だった。イシユは行ってしまったのだから。

世界は真っ暗になった。

息の仕方を忘れそう、瞬きってどうやるんだっけ？でも、イシユの事は忘れられない。

毎日が他人のように過ぎて行った。

カイはいつもそばに居てくれた。エマもサラも毎日紅茶を入れてくれた。

毎日来ていたウサギさんは来なくなっていた。

-----

アレから、しばらく。

このぼんやりとした虚無感にも慣れて来た。

落ち着いて来て、あの時の事を考える事も少なくなった。

その分、鮮明に思い出してしまっている気もする。

でもそのおかげで、ある事を思い出した。

イシユはあの時、しばらく俺に近づくなって言ったんだ。”しばらく

く”であつて、ずっとじゃない。……でも、気分はあまり晴れない。

所詮は言葉なわけだから、もうずっと帰って来ないのかもしれない。

「薫様……！やっぱり俺、城にっ」

「カイ、ダメだよ。来ちゃダメって言われたでしょ？」

最近カイは元気が無い私を気にして、城に行くというようになった。理由を知りたい気持ちはあつたけど、今行ったらイシユを確実に困らせてしまう。でもそれよりも、自分が心配だ。イシユの事を考えるとあの苦味が胸に広がる。

「薫様、カイ君、街へ行きましょう！」

エマがお茶を注ぎながら発案してくれた。

うん、いいかもしれない。気分転換は必要だし、前に考えてた事もあつたし。

前に考えたのは…あ、イシユが絡んでたなあ。

「うん。行こうかな？楽しそう」

「じゃあ、馬車を出しましょうか！」

サラが馬車の手配を始めてくれる。どうやら、みんなで行くみたいだ。

サラとエマは本当にいい人だと思う。

あの日から私にスゴく気を使ってくれて、2人は全ては知らないけ

ど、イシユが帰って来ない事も考えて少しわかっているようだった。

少しづつ、また前に進み始めた。



## 痕跡（後書き）

夏休みに入りましたー  
　　○（　）○  
今までよりはハイペースでの更新を目指します！  
次は街です（　・　　・　）ノ

## オレンジブロッサム香り。

幾分マシになったとはいえ、どんよりと暗い私の心と反対に、今日の空は明るすぎる程明るい。

あーあ、日焼けしそう。

街に行くのはスゴく楽しみだけど、日焼けはいつだって乙女の敵だ。そして残念ながら日焼けどめがないこの世界では、乙女の見方は日傘だけ。

私はふちにレースがついた刺繍の日傘を持つ。

もちろん、エマもサラも持っている。

エマは碧、サラは紅。髪の色に合わせたみたい。統一感のある人たちだなあ。

そして私たちは馬車に乗り込む。

いつもの様にカイが乗ると重みで馬車がグラリと揺れる。

カイの体積によって、1つの席が占領されるから、おのずともう片方に3人が座る事になる……のか、でもそれじゃ苦しいよね。流石に。

「どうする？3人で座ってもいいけど、狭いよね？」

「ごめんなさい、薫様。道順知ってれば走りますけど……」

ちよっ危ないでしょ。

引かれるとこも口想像しちゃうからヤメテ。

「いいよ、危ないから」

「そうですねえ、じゃあ1人トムさんの隣行きましょうか」

トムさんの隣かあ、アレだよね、軽トラの荷台に乗り切れなくて1人おじさんの隣に座る。あのちよつと悲しいポジション。

「あつ薫様は結構ですので、私たちで決めますよ!」

「いいよ、いいよ。皆でやろう?カイー?ちよつと待っててね」

だってそう言うのは皆で決めたほうが楽しいじゃん?

「はいーっ勝ち抜いてくださいね薫様!」

結局ジャンケンで決めることになったけど、3人だから時間かかるんだよね。

最終的にサラが外に座る事になり、やつと出発。でも、女子3人つてこんなもんだよね!あ、お待たせしてごめんなさい、トムさん。

「薫様、街では何を買いますか?軍資金はいっぱいあります!」

元気よくエマに聞かれる。

個人的には軍資金の出処が気になるけど、まあそこは気にしない方向で。

「うーん、どうしようかなあ。服は足りてるし……何があるの?」

「何でもありますよ!屋台も美味しいですし、アクセサリーもありますし、文房具も本も!」

おおお、ちよつとストップ。

本、かあ。ウサギさんが追加してくれたスペックでこっちの読み書きはできたはず。ならっ！使わないでどうする！

「本屋さんに行きたいな。でも皆が行きたい処にも行こうね。カイは？」

「まともなベッドが欲しいです！！」

即答。一応変えてもらったのに、まだ根に持ってるのね。ま、いいけど。

「じゃあ、2人の予定は？」

「私たちは、服を見たいですが、薫様優先ですので、最後でいいです！」

「え。いいよ、皆で決めようよ！服が最初でもいいし」

でもコレばかりは譲ってくれなかった。立場的に？  
実はさっきの席でもかなり渋ってた。

仕方のない事だけど、遠慮はいらないのに！

ちなみに、さっきの声は馬車の外から聞こえて来た。サラだね、聞いてみたい。これではば全員の予定は確定。楽しみだなあ。

馬車はお城から反対の方向に走り始めて、いつも見えていたお城が山に隠れて見えなくなった。いつも見ているものが見えないのは、何だか変な気分だ。

しばらく行くと街の”音”が聞こえてくる。

「あ、もうすぐ付きます！」

今のはエマ。サラはずっと外で実況をしてくれた。

なんか、牛がいますー！牛がー！みたいなことを、ずっと。

カイは馬車が走り始めると途端に寝た。

いつも寝不足だけど、馬車は寝やすいのね。

特に最近は眠そうなのが多い。

規則的に聞こえていた馬のひずめの音が止まり、トムさんが扉を開けてくれる。

「すごい……」

外に出て感動した。さっきまで山に隠れていたお城が、今はスゴく大きく、はっきり見える。いや、むしろココが一番よく見える処なんだろう。

いっつ、ミラクル……！！

「えーっと、まずは本屋さんでしたよね。行きましようか！」

本屋さんは街の中心部にあった。

私たちが降りたのは、街のハズレから少し中心に近いぐらいの処だったから、かなり歩いたと思う。一体何キロカロリー消費したんだろう。

天井に向かって伸びる本棚はルーチエの部屋とよく似てる。

と言うか、すごい。日本だったら地震のことを考えるとちよつと心配だけど、きつところは地震なんてないんだろうなあ。とかちよつと余計なお世話なことを考えていたら、サラがポツリとつぶやく。

「ここ地震来たらどうするんでしょうね。確実に潰れますよね」

あ、地震あるんだ……ちょっとガツカリしました。

先に本を見始めていたカイがこちらにパタパタと戻って来て、背中に乗せた本を私に渡す。読めるか心配だったんだけど、ウサギさんにぬかりはなかった。珍しく。ちゃんと読めたよ、ウサギさん。

でもこれは読めなくてよかったかも。カイが私に渡した本の題名はズバリ、「THE バカな男を忘れる本」ああ、気を使ってくれているのが痛い程伝わってくる。ちょっとチヨイス違うけど。でも下の位置から心配そうに見上げてくるカイを見たらそんなことは言えない気がする。

「ありがとう、カイ」

「はいっ！」

和む。カイが嬉しそうにしゃべりを降っている姿はめっちゃくちや和む。すごい和む。すーぱー和む。てなわけで、和みながら本屋さんを出たわけですが、結局買ったのはあの本1冊。カイのキラキラした目線に耐えられなくて……！

エマとサラの方がよっぽど買った。

1人2冊。合計4冊。全部ラブストーリーなサラと、全部サスペン  
スなエマ。

こんど少し貸してもらおう。

次に向かったのはペットショップ……もといカイのためのベッド屋さん。

が、しかしカイの気に入るようなのはなかったみたいだ。まあ、それも納得いくけど。ていうのは、ここのお店のキャッチフレーズは ” あなたのペットも野生の世界で ” 。草やコケの生えたベッドしか売ってなかった。むしろ岩なものもあったし。

そんな訳で、お昼には少し早すぎる時間にメインの予定を終えてしまった私たちは、今度は洋服屋さんに行くことになった。

「私たち、今日はちょっと奮発するんです！なんと貴族の方も御用達のブランドなんですよ！薫様のお洋服もそこで揃えられておりますね」

エマが嬉しそうに話してくれた。ブランドとかあるんだ。

それにしても私の洋服もそこで……って、ちょっと気になってたんだよね。

ここにきて俄然、歩くスピードが速くなりました。カイはちょっとバテてたけど。

店内はまるでおとぎ話の中だった。

こんな世界だから、ズボンは皆無だけど、スカートもスゴくかわいい。

どうしよう可愛い。私の服も常々可愛いと思ってたけど、このデイ Sprey が手伝って、可愛さ増量してる。照明マジックか。

「薫様……僕眠いで、ちょっと寝ます」

女子3人がいままでの倍時間をかけて店内を物色している間にカイの眠気は増量したようだ。ごめん、カイ。でももうすぐ終わるから！多分ね！

それから、少し時間がたってエマとサラの買い物は無事に終わった。2人とも普段も着れるような柔らかい生地ドレスを買って、紙袋を受け取った時のホクホク顔が面白かった。でも、ホクホクにもなるよね。すっごい悩んでたし。

カイを起こしてお店を出た時だった。お店のすぐ前に馬車が止まっている。

扉の脇に紋章がついてるから、いいとこのお家だろう。貴族……とか。

すぐにずれようと思ったんだけど、道が狭くてそれは無理そうだった。

そのせいで、馬車の扉の正面を見据えることになる。悪いけど、あとでどいてもらおう。帰るためにも。

でも、余りに予想外すぎた。

中から出てきたのはイシュ……と、ブロンドの女の人。女の人がイシュの腕をつかんで腕を組む形になっている。イシュはこちらに気づかない。まるで、違う世界にいるような……女の人と目が合う。

「少し横にずれて頂ける？」

その声でイシュがこちらを向き、目を大きく見開いたように見えたけど、瞬時にまたさっきのポーカーフェイスに戻る。

心が痛い。

目の前が歪む。頭痛がする。体の節々が痛い。

イヤ、ここには居たくない。楽しくない。……こんなの、痛いだけ。



やっぱりイシユは戻ってこないんだと思ったら、目の前が真っ暗になった。

あ、倒れる。もう意識を保っていられなくて、私は倒れた。

目が覚めたら、ベットに居た。だけど、朝の清々しさが無い。

あの、あー、寝たっていうアレ。体が重いし、首の後ろはじっとり濡れている。どうやら、熱を出したようだった。誰かいないかと思つて痛い首を少し動かすと

カイが横で寝ている。けどエマがいるみたいだ。

「エマ……?」

「え!? ああ! 薫様! 目が覚めたんですね! よかったー! もういちじはどうなるかと……」

いつもの騒がしさにホツとした。

ホツとしたと同時に、自分が気絶した時のことも思い出した。

あ……女の人。正直、嫉妬した。

「エマ……あの女の人、だれ?」

「あ……あの、私もよくは知らないんですが、イシユ様の婚約者だったと思います」

「そうなんだ」

あの人イシユの婚約者だと知っても、特に何も思わなかった。

いや、思わないようにしている。まさか自分がイシユのことでここまで過剰になるとは思わなかった。気絶したり、泣いたり。イシユの存在は大きい。

「私、ここを出て行った方がいいかな」

やけに落ち着いてる自分が気持ち悪い。

けど、後で1人でなくんだらう。ここで泣いたら、エマを困らせてしまう。

「ダメですっ！私たち、皆ここで泊まり込みですし、行く処なんてないんじゃないですか！無謀なことはやめてください！」

「たしかに、その通りなんだけど、でも……」

「ダメです」

もう一度エマが力強く言う。私の意地は簡単に折れた。引き止めてくれる人がいるんだったら、ここにしよう。結局私は、誰かに甘えたいんだらう。

イシユにはつきり宣言されるまで諦めたくはないんだ。でも……イシユと最後に話ができたら、出て行こうと思う。

エマはもう一度釘を刺して出て行った。サヲを呼んでくるって言うてたから、しばらくかかるだらう。

部屋から誰もいなくなった途端、喉から嗚咽が漏れた。



オレンジプロッサムの香り。(後書き)

次回イッシュ目線いきます!.....多分。  
がんばれ薫ちゃん!



もう閉まってた。

……めんどくさい。

という訳で、どうにか仕事を終わらせてお茶会に来た訳だが、速攻帰りたい。

家に帰れるんだったら帰って薫に会いたい。

何が悲しくて野郎と茶なんて飲まなきゃいけないんだ。

「んーっ紅茶がおいしいねえ。あれ、イシユ手が止まってるぞー」

輝かんばかりの笑顔で話しかけてくるアルに寒気が走る。なんだこいつ、気持ち悪い。しかもあと少なくとも30分はこいつのちゃらんぼらん話を聞いていなくてはならないと思うと頭痛がする。

もういいや、非常に失礼だが要件を聞いてしまおう。こいつも大概失礼なんだから気にしないでだろうし。

「アル、要件はなんだ」

質問した後で気がついた。アルに、要件なんかあるのか。普通に暇だからとか言いそうでいやだ。

「要件？ああ、要件ね。なんかさー、あの子帰って来ちゃっつぱいんだよねー」

思いのほか真剣な声で返答されてすこし戸惑う。

「あの子？」

「うん、マリアちゃん」

しばらくフリーズしていたらしい。アルがもう一度繰り返す。

「イシュ？あんまり長く会ってなくて忘れちゃった？キミの、婚約者だよ」

アルの言葉に記憶が次々とフラッシュバックされる。

もともと、愛ある婚約ではなかった。

マリアの長いホワイトブロンドと、ぱっちりしたアイズブルーの瞳は容姿端麗と評判だったが、何度かパーティーで会う度に性格に難ありな事がわかった。

面食いで自己中心的。しかもあちらの両親はひどく親バカだった。

マリアはアルの従兄弟に当たる人物だ。つまり俺よりも身分が上な訳で。

だから婚約の話が来た時も断れなかったんだ。

そもそも、王族は王族同士で結婚するモノであり、マリアも一度はアルと婚約したが、自己中心的が2人集まったせいか、どうもソリが会わなかったらしい。

以来、2人の仲は壊滅的だ。

この国では王の血を絶やさないため、保険に2、3人と婚約する事が許される不思議な制度がある。もちろん結婚の際は1人に絞るが、簡単にいうと側室なようなモノだろうか。今はそんな制度を引っ張り出してくる物好きなんて居ないと思ってたが、どうやらマリアは例外らしい。

アルと別れたマリアの話は王国中に広がり、同時にマリアが婚約者を直々に選び始めたのも噂になった。それも美男ばかり。流石面白い。

婚約の話は俺のところへもやって来た。相手の言い分はこうだ。

「君は容姿も美しいから、マリアに相應しいだろう？それにマリアはえらく君を気に入っててね」

つまり俺は顔で買われた訳で。ついでに身分も低いから言い返しもしなくて、娘が機嫌を損ねる事もないだろうという訳だ。

それから、いい迷惑な事にマリアは自分でかき集めた他の婚約者を放つたらしに、俺のところへ通い、したくもないお付き合いが始まった。

キスしろ、と言われたらしたし、抱け、と言われたら抱いた。

俺の心は冷えきって、来れからもこんな生活が続くのかと、嫌に悲観的になったりもした。

そんな時、マリアがサパの寄宿学校に通う事になった。

3年程離れる事になると至極残念そうな顔で言われたが、全然残念じゃない。そんなの、むしろ大歓迎だ。

マリアが居なくなつて2年ぐらいの頃か。薫がやって来た。見た途端に運命を感じた。しっかりと。

薫を、好きで好きで仕方ない。ていうか可愛すぎだろ。

離れ難くて、他の男に触られようモノなら自分を制御できるかも分からなかった。取り合えず、マリアなんかと比べ物にならない。

初めは、マリアの事を考え、手を引こうかと思った。しかしそれも最初の数秒。



俺は抗えず手を伸ばした。そしてあの夜、俺は薫の運命とやらだと聞いた時から、なんとか婚約解消出来ないか考えていたのに、今帰ってくるのか。

まだ3年たってないし、空気読め。

「イシユ？ねえちょっと無視しないでよ。きみさ……いい加減僕泣いちゃうよ？王子泣いちゃうよ？」

「……婚約解消」

漢字にするとたった四文字なのにマリアに言えないってどういう事だ。

一応言っておくと、決して怖くはない。いや、ある意味での恐怖がマリアは自分の思い通りにならないモノが気に食わないのだ。だから傷付ける。

もちろんそれが人に向かう事だつてある。それはつまり……つまり、薫にも怒りの矛先が向かいかねないという事だ。

恐怖と、それよりも先に途てつもない怒り。

薫が傷つくかもしれない。

あいつがそんな事をして守りきれぬ自信はある。だけど、絶対に会わせたくない。

「帰る」

「え、ちょ、イシユ！」

城からはしばらく帰れないだろう。薫を傷付ける事になるだろう。相当の覚悟はしていたつもりだったのに。

今、目の前で揺れる小さな肩にどうにかなりそうだった。  
抱きしめようと手を伸ばすが、出来なかった。傷付けたのは、俺だ。

## あと少し

「久しぶりですわね、イシユー！」

「はい。お元気そうで……何よりです」

にっこりと笑うマリアが俺にコツコツと歩み寄って来ると、途端に胸に広がるムカつきがこれが現実だと教えてくれる。

社交辞令に無理やりに貼り付けた笑顔を、どれだけ保っていられるか不安なぐらい俺はイラついていて、それを悟られまいと焦る心中が、さらにそれをヒートアップさせていた。

俺の腕を自分の腕に絡ませて、横でくちやくちやくと聞きたくもない話を続けているマリアに適当に相槌を打ちながらも、頭の大半は、しばらくは会わないと誓ったはずの薫のことが張り付いていた。最初の数日は黙々と執務をこなす事で、気を紛らわす事が出来て居たが、最近は執務すら俺の気を紛らわすには不十分と言っている。う。いわゆる禁断症状。自分が薫を溺愛しているのも甘やかしているのも自覚しているが、正直、予想外の依存度だ。

「イシユのお家にお邪魔してもよろしくて？」

「は？」

ふいに発せられた発言に心からの疑問詞がでる。

家に？家っていうと、家、だよな。聞いていなかったせいで、どうしてそう言う流れになったのか理解出来ない。が、マリアが行くと言ったらいくのだろう。ていうか、なんで突然家だ。ずうずうしいぞこのクソが。いいじゃないか、心の中で悪態をついたってどうせ

外には聞こえないんだから。

「今から、ですか？」

「ええ、行きたいの」

と言つても、今はまだ昼頃なのだ。薫が起きてるんじゃ、行けるわけがない。  
だったら夜の方がマシだろうと、説得を試みる。

「夜にしませんか」

「夜？なんで？」

「夜の方が、その、酒が美味しいでしょう？」

我ながら痛い言い分だとは思つたが、マリアは以外にあっさりと頷いた。

そうして、またズルズルと話し始めたマリアの話に意味のない相槌を永遠と打ちながら、時間だけが過ぎていく。

.....

「イシユ様、引越したんですね」

「え、ああ、はい」

マリアといる時に上の空なのはもう普通の事だからそんなことは気にしない、けどやっぱりやめようとか、薫は寝ているだろうとかかか考えると、足元がどうしてもムズムズしてしまって思わず立ち

上がりそうになるのはいただけない。

通り過ぎて行く景色と比例してどんどん足が重くなって行くようだ。

「あ、つきましたわね！」

マリアの張り切った声と共に馬車が止まった。

重い足を引きずって家に入る。と、途端に鼻先をくすぐる薫の香り。それは俺を唸らせるには充分で、マリアに一言、言い訳を残して早足で薫の部屋に向かっていた。

ドアを一瞬の戸惑いもなく開けた俺はバカだ。ここまで、何をしに来たかというと、ただ薫の寝顔を見て願わくばキスを一つ、とか思ってただけだ。起きてる薫に会ったら、傷つけることは目に見えていいるから、それはどうにかして避けたかったのに、なぜ中の寝息を確認することなく入ってしまったんだろう。

実際、薫は起きていた。

薫は俺が来るのを分かっていたように俺に走り寄り、ぎゅっと抱きついた。

「イシユっおかえりなさい」

ああ、やっぱり可愛い。だけど、抱きしめ返そうと伸びた手は、一瞬の気の迷いによって脱力した。なんとなく、マリアに触った手では薫には触りたくない。それに、やっぱり起きてる薫には会いたくなかった。こんなに、揺らぐなんて。

俺の微かな強張りが伝わったのだろう、薫がさっと離れて不安そうに見上げて来る。

ああ、今俺の顔はどうなっているんだろうか。すまない、ごめん、

「ごめん、こんな事言いたくないのに、

「……………しばらく俺に近づくな」

「……………お前なに言ってるんだよ。薫様？無視していいです」

一言も話さなかったクソ犬が、俺の言葉を聞いて低く唸りながら怒りの声を発する。録音されたかのように硬い声に、薫がひゅんっと息を飲むのが聞こえる。

一秒一秒、後悔の念が襲ってきて肩が鉛のように重くなっていく。しばらく、という言葉に往生際の悪さがにじみ出ている。完全に突き放したりは出来ないから。

「……………え、なんで」

俯いたまま顔をあげない薫は泣いているのだろうか。泣かせたくないかないのに、でも、後少しだ、すぐに問題を片付けて戻ってくればいい。でもその間だけ、ごめん、ごめん。

「絶対に俺の名を呼ぶな、触るな、それと……………しばらくは帰らない」

自己嫌悪しすぎて気持ち悪い。俺は何を躊躇っているのだろう、さつさと婚約解消して早く戻ってこよう。すぐに帰って来る、と心の中で呟いて扉を閉めた。

## あと少し（後書き）

久々の更新となりました！

ほんつと全然更新できてなくて申し訳ないです！もっと頑張ります

、（；；）ノ

## 逮捕状は。

「婚約解消、してください」

「は、今、なんて？」

気に食わない。目の前でそんなことを口走った男が。思えば学校から久々に里帰りして、イシユの家を訪ねた、その後から様子は変わった。常にどこか遠くを見据えているような。それでいて、私の話にはちゃんと相槌を打っていて、時折こちらをじつと見据える。

イシユが徹底的に変だったのは街に出かけた時。ブティックの前で少女と、馬鹿でかいオオカミと、格好からして使用人らしき2人会った。少女はイシユと目が合った途端に倒れ、それを見たイシユが一瞬、私の手を振り払って駆け寄ろうとした。そこからは、私が話しかけてもほとんど応答せずに、ただひたすらに少女が倒れた方向をじつと見ていて、その態度にムカついた。

それから1日経った後、あの冒頭のセリフだ。

アルデルと破断してからかき集めた、顔だけはいい男たちの中でも時折そういう類の事を口走るヤツがいた。けれどそれも、最初にそんな事を言い始めたヤツの家を父様が潰してからはそんな事もすっかりなくなっていたし、この男の元にもその噂は届いているはずだったのに。家が潰れるのが怖くはないのだろうか。例え現王子と親しい間柄の上級貴族だったとしても、父様が家を潰す事は容易い。

それほどまでに、私と破断したいのには、どうにもあの少女が関わっているように思えた。折角、折角この私がイシユを1番のお気に



入りにしてやっていたのに。もうお終い、イシユがいけないのよ、そんな事を言うから。気に入ってた分ひとときわム力つくのでイシユと、あの少女と、両家いつきに潰してやろう。

「婚約解消、と言ったんです。マリア」

「何故？」

私が不快感あらわに精一杯眉間にシワを寄せても、イシユのポーカ―フェイスが崩れる予定はなさそうだった。

「あなたがいない間に沢山の事があつたんですよ、ブティックの前で会ったでしょう？あの少女と私は、特別な関係にあります」

私というものがあひながらこの男は平然と浮気を報告していて、拷問にかけてやろうかと思った。あり得ない、完璧な私の前でよくもこうも間違いをさらしてくれた物だ。すぐにでも家を潰そうと思っただけど、やめた。そんな事をすれば、結局イシユとあの少女はくっ付いてしまふし、それで2人は幸せなのだ。それよりは、絶対に婚約解消なんて許さないことだ。

「ああ、そうなの。だけど、婚約解消なんて許さない。ねえ、イシユはご存知？私、綺麗なものも、可愛いものも、美味しいものも、大好きですよ。気に入った物は全部手に入れて、毎日楽しく暮らすの」

ふふ、今度はイシユが動揺する番だった。あそこまで言って、私が承諾しないなんてあり得ないと思つたのかしら、だけど残念ね、私は特別な人間だから、全部手に入れる権利があるの。

「許して頂ければと願っていたのですが、」

刹那、何が起きたのかわからなかった。首にひんやりとした物があるがわれて、下腹からぞわっと何か嫌な物が駆け上がりて来るようなかんじがした。イシュが、剣を抜いたのだ。私の事を冷たい目で見下ろしながら、口元だけはいかにもかんじ良く笑っている。

「無礼お許しくださいマリア様。けれどこれで分かっていただけです。婚約解消、させていただきます」

レディに、その上王族で、完璧な私に婚約解消を迫り、拳刃物まで当てた。

……殺してやりたい。

次の瞬間には私の手には、父様に緊急時用に手渡された違法の猛毒が握られていた。いつもはボディガードがいるからこんなのは必要ないと思っていたけれど、本当に人に殺意を覚えたのは2回目だ。1度目はもちろん、全ての元凶のアルデルと破断した時。あいつは私よりも上級だから、手を出す事は出来なかったけれど、イシュなら。

イシュに見えない様に左手にくるむ様にしながら蓋を外し、いつでもかけられる様に準備して、その後はイシュにかけた後あの少女をどうやって苦しめようかと考える。あら、そうだわ、2人がそんなに結ばれたいと願っているなら、同じ種名の毒で殺してやりましょうか。同じ死に方で同じく死んで、仲良しこよしでいいじゃない。

いよいよ毒をかけようという時、イシュが突然に剣を引いてさやに収めた。今更になって後悔でもしたのかしら。遅いわよ。貴方はここであの少女もろとも死ぬの。その想像がどうにも楽しくって、思わず口元が緩んだ。

イシュが剣を引いた瞬間に跪いて許しを乞うのかと思ったのに、イシュが取ったのは全く別の行動だった。イシュは、絶対にイシュからは見えない様に気を使っていたはずの毒が握られている私の左手を凝視し、すぐに確信に満ちた目でドアに向かった。

「どうしましたの？」

これには私もすぐに反応した。だってこんな、私を完全に無視しているような行動は、

「はい、マリアちゃん確保ー！」

イシュが扉を何の断りもなく開けて入って来たのは、アルデルは筆頭にいた王城勤務、4番隊。よくある光景だけど、違っているのはアルデルと、4番隊全員が対毒用のスーツをまとっていることだった。その男たちが私に向かって来て、あれよあれよという間に私の手には手錠がかけられる。何が起きたか分からずに混乱していてもイシュを殺してやりたいという気持ちは収まらなくて、すぐに毒をかけた。けれど手錠のせいであまりはいかず、毒はぼしゃりと間抜けな音を立てて床に落ちた。

イシュは冷ややかな目でこちらを見おろし、アルデルが私をバカにしたように口を開く。

「はは、マリアちゃん全然分かってないでしょ。君、今逮捕されるんだよ？」

ぬめえ、と効果音がつきそうなべったりした声だった。だけどそれは私が理解する時間を十分に与えてくれて、その言葉を聞き取るか聞き取らないかのうちに腰をあげて逃げようとした。けれどそれもかなわず、ガシツと腕をつかまれて、腰が抜ける。

「マリアちゃんは往生際が悪いなあ。実を言うとな、君の愛しの父様も逮捕済みだよ。逮捕状は、毒物違法所持及び生産、あと殺人。マリアちゃんも同じ逮捕状だけど、まだ殺人は含まれてないよ。イシユのおかげでね、感謝したら？」

「誰がそんなことっ！だいたい、同じ王族が私にこんな事をして許されると思ってた？」

私の今の全精力を使った一言だったのに、まるで小枝か何かをポキツと折るように簡単にあしらわれてしまった。

「あのね、さつき僕の父親も意思を表明したんだ。至極残念がってたけど、マリアちゃんはもう王族じゃないんだよ」

キツネのように目を弓形に細めてニッコリと笑いながら話しているアルデルは、その一言だけでいとも簡単に私を地獄に突き落としした。小さな頃から贅沢な暮らしをしてきて手に入らない物なんてないと思ったのに。

家が、潰された。



逮捕状は。(後書き)

少しわかりずらかったかも。一応、マリアちゃん視点です。  
――  
――

## 揺れる袖口。

薫が倒れるのがまるでコマ送りのように見えた。一瞬の戸惑いもな  
くただ本能のままに動こうとした俺は、はたとマリアのことを思い  
出し、ギリギリの理性を総動員してじわじわと元の場所に戻る。代  
わりに全神経をそちらに向けた。

ぼすっという柔らかい音がして、どうやらあの犬、いや白オオカミ  
が薫を受け止めてくれたんだろうと理解する。ギツと睨まれた気配  
がしたが、やり返す気はなかった。なぜなら俺は、始めてカイに感  
謝していたのだから。

そんなこともあって、俺の気分は最悪で、心の安らぎどころか自分  
への嫌悪感が募って行くだけの日々が続いていた時。

「イシュがこんなに弱つてるとこなんて、子供の時以来じゃないの  
？写真とつとこつ」

マリアが来てからというものの、パツタリと消息を立っていたアルデ  
ールが何処からかまた湧き出て、この夜中に俺を訪ねてきた。寝  
たいのに強制的に話をする体制に持つていかれて、それだけでスト  
レスが溜まっているような。……過労死しそうだ、早く帰ってくれ。

「うざい帰れ、写真撮るなアホ、話ってなんだ早く終わらせろうざ  
いから」

「ひどいなあ、イシュは。最近僕がどれほど君のために働いたと思  
ってるの」

そのヘラリとした笑顔をやめて欲しい。お前は人を労わることを知らないのか、ていうか本当に帰ってくれないか。口を開くのも億劫になってきて、心の中で悪態をつきながらも、俺は渋々話を聞く体制を整えた。というのも、こいつが仕事をしたというのは俺の興味をそそる話題TOP10に入るのだ。それぐらい、珍しい。

「うわ、何その目ヤメテくんない、俺結構ナイーブだからね。ていうか今絶対ひどいこと考えてるでしょ」

「前振りはもういいから話を始めろよ……」

続きを促すと、やっとと言うか何と言うか、アルデルの顔が久しぶりに引き締まった。

「分かったよ。一応言っておくけど、今から話すことは機密事項だから、情報漏れは許されないよ」

マリアの家が不正を働いていて、その証拠をつかんだ。まだ公にはされていないが時期に王位の剥奪と逮捕措置が取られるだろう。また、この件にはマリアも関わっているとされており、証拠を掴み次第、同等の措置を取る予定。

「つきましては、イシュ・エドワール7番隊長に正式にマリア嬢の誘導をお願いしたい」



その話は結果として俺の眠気を吹き飛ばし、更には気力まで取り戻した。これは、多分アルデールに感謝せざるをえないだろう。

「……喜んでお受けいたします、アルデール王子」

俺は何年ぶりにアルデールにこうべを垂れた。

計画が実行されたのはそれから約2日後。まずは俺が婚約解消を切り出す。そこがスタートラインだ。マリアは面白いほど簡単に苛立ちを見せた。マリアの眉間には深くシワが寄せられている。

「何故？」

「あなたがいない間に沢山の事があつたんですよ、ブティックの前で会ったでしょう？あの少女と私は、特別な関係にあります」

愚問だ。きつとこんな計画がなくても俺ははつきり理由を言えた。そしてこれは、第1の引っ掛けでもあつた。ここで、マリアの中で何か切れるだろう。その証拠にマリアはじつとうつむき、少し肩を揺らし、直後、口元に笑みを浮かべながら話し出した。

「ああ、そうなの。だけど、婚約解消なんて許さない。ねえ、イシユはご存知？私、綺麗なものも、可愛いものも、美味しいものも、大好きですよ。気に入った物は全部手に入れて、毎日楽しく暮らすの」

こういう女だ。人が幸せになるぐらいなら、自分の幸せを投げ打つてでも人を不幸にしたい。……哀れ、俺は何の戸惑いもなく剣を抜いた。

「許して頂ければと願っていたのですが、」

これは、最終段階であり、賭でもあった。ここでマリアが逆上して毒の使用を早まれば俺の負け、冷静さを残して俺の行動を見極めるようなら俺の勝ちだ。マリアの体が不自然にこわばって数秒、俺はマリアの左袖が微かに振れるのを見逃さなかった。自前に情報がなければ見逃してしまうような、微かな動き。

確定だ。今度こそ、ハッキリと見た。袖口からチラリと見えたのは、一見、何も入っていないかのように見える小瓶。

ああ、賭けは俺の勝ちだ。剣を素早く引くと、マリアの笑みが濃くなった。しかしそれも、俺がドアに向かうまで。次の瞬間聞こえてきた、マリアの焦ったような、微かに疑問を含んだ声が聞こえるか聞こえないかのうちにドアは開かれ、4番隊の面々が確保に向った。

間もなくかしゃり、と確かに手錠のかかった音が聞こえて振り向くと、憎悪に染まった真っ青な目がこちらを見すえていて、ふと気がついて足元を見る。無色透明の液体が小さな小瓶と共に転がっていた。もう流石に何も感じることはなく、俺はただだまってマリアを見据えた。

それからのことはただ怒涛、とも言つべきか、アルデルの一言でマリアは決定的に崩されて恐ろしく従順になった。どうやらこれから取り調べを受けるようだ。

「お疲れー俺は部屋に帰って寝るから、イシュも帰るなりなんなり好きにしてよー？じゃあねー」

アルデルはマリアを完全に4番隊に任せて、部屋に帰って行った。やはり相変わらずユルいやつ、と思う。

俺はこれから報告書、アルデルには始末書がそれぞれ綺麗に残されていただけ、俺だって今日は帰りたい……久々に。

普段ならやってしまっし、家に仕事は持ち込みたくないタイプだ。だけど今、俺は一刻も早く薫に会いたかった。はやく薫に会って抱きしめて、それで……そんなことを考え始めたら、もう馬車を呼んで待っている時間なんて俺にはなくて、馬小屋に走った。

久々に馬にまたがり、一心不乱に坂を下る。……もうすぐ会える。もう、なにも問題なく、誰も邪魔なんてしない。

揺れる袖口。(後書き)

もうすぐシリウス章終わります!!

ただいま。

マリアさんを始めて見てショックを受けた、あの日からなんとなくいない昼間のことだったと思う。なんだかスゴく嫌な予感がして取り敢えず布団に入る。なぜだか部屋にはカイモエマモサラもないなくて、空気が乾燥したまま固まったような部屋に私1人だった。

あー、布団つてあつたかくて安心する。この変な予感も何か分からないし、このまま行くと確実に熟睡コースだ。まあ最近は何ともしていることも多いし、このまま寝ちゃってもいいかな、とか。そんなことを考えながら視線をチロリと机の上に移した。

最近、手紙をしたためている。やっぱりほら、イシユが帰ってきた時に、言いたい事がまとまってた方がいいかなと思って。つまりまあ、原稿。だけど、その原稿もイシユは私のことが嫌いになったのか、の問題に達した時に筆が進まなくなって結局そこで止まったまま……眉間にシワを寄せて考えているうちにやっぱり眠くなって、欲望に任せてずっと目を閉じた。

西日が差し始めたのに気がついて、ふわりふわりと目が覚める。少しずつ伸びをしながら起き上がって大きく深呼吸する。うん、大丈夫。寝起きの動作を一通り終えて、まだ布団からは出たくないなーなんて考えていた時に、部屋の扉がノックされた。

び、びつくりしたあぁー…控えめだけど、自己主張はかかさないその大きな音は私を飛び上がらせるには十分、何ととっても寝起きだし。あせって舌を噛みそうになったよ！

「はい、どうぞ?」

返事をしたにも関わらず、ドアはなかなか開かない。だけど、すぐに聞こえた返答に開かなくて本当に良かったと思った。だって、もしかしなくてもこの低くて優しげな声は、イシュ、のはず。ここはイシュの家だし、こんなことをいうのは変だけど、あまり現実感がない。

「薫?俺だ、入ってもいいか……?」

あ、ほんとにイシュだ。なんて落ち着いてられるわけないじゃん!ど、どうしよう、どうしよう!私もそりゃ原稿書いてたはしてたけど、いきなりじゃ心の準備なんてできてないし、でもイシュが前持って連絡なんてそんなことするはずないし、あれそれじゃ、いつ心の準備なんてすればいいの?

布団に入ったままバタバタと手を動かす。でも、布団でバタバタしているのも何だから、取り敢えず立ってから、まず落ち着いて、それから考えよう。新鮮な空気を大きく吸い込みながら布団から起き上がる。

イシュと会うのは本当は嬉しいはずなのに、今はどうしても不安が残ってしまうから怖い、それで会いたくないんだ。でももしかすると、会えるのはこれで最後で、今ここで先延ばしにしたりしたらもう会えないかもしれない。怖いけど、それはもつと嫌だ。

「うん、い、いいよ」

つとめて大きく出した声はそれでも震える。う、怖い。このままじ

や会った時にパニックになる！思わず書きかけの原稿を握りしめた。ああ、こんなことなら何と少しでも原稿を書き上げるべきだった。

ドアが閉まるとコツコツと床を叩く靴の音が部屋に響いて、私の前でピタリと止まった。勢いに任せてぐいっとな顔をあげるとイシユの深い瞳と目が合って、ま思わず目を逸らす。

沈黙。う、しゃべって欲しい。でもとても私からはしゃべれない。

結局、沈黙を破ったのは懐かしいイシユの声。

「不安にさせたか？俺も、不安だった」

そんなこというんだったら、なんであの時あんな事言ったのよ。しかもその一言で私が舞い上がってしまった。別れを告げにきたわけじゃないのかもしれないとか、そんな期待がムクムクふくらんで止まらない。そんなことを思ったら抱きしめて欲しくなって、それについて、その思いを載せたままイシユを見上げた。

でもすぐにまだ記憶に新しい拒絶を思い出して身が震えた。私の考えなし！傷つくのは目に見えてるのに！

イシユを見上げたまま葛藤を始めてしまったから、イシユの少し鋭い目がふわりと緩んでいることに気がつかなかった。

……………私の意識が思考回路の中に潜ってしまった後に、突然ぬくもりを感じた。あの、懐かしい大きな手が私を、抱きしめてた。

「薫……………ごめん、遅くなった。ただいま」

イシユの声が静かに意識にしみる。イシユは、帰ってきた……………頭の

中で何回か繰り返して、やっとじわじわと現実感がやってきて、やっと理解した、次の瞬間、私は爆発的な幸福感にみたされた。嬉しくて、指先からつま先まで、身体中がパチパチと輝いている。イシユは帰ってきたんだ……！

引き攣ったような声で謝りながらイシユがきつくきつく抱きしめてくる。あ、イシユの体温だ、嗅ぎ慣れた匂い、全てが懐かしいもの。それがなんだか妙にリアルで、安心する、ああ、本当にこれは、夢なんかじゃない。そう思ったら今度はなんだか急に泣けてきて、少し鼻を鳴らす。

「イシユっ……もう、いいの？終わったの？イシユに触っても良いの？」

「もう大丈夫だ、今まで通り……ごめん」

ここで涙腺が本格的に崩壊した。イシユと話せたら出て行くとか、そんなものはイシユに抱きしめられた時に消えてなくなってしまった。おそろおそろイシユのシャツをつかんで背中に手を回す。

もう全部もと通りのはずだけど、まだひとつ聞けてないことがある。

「イシユ、私のこと今も好き？」

イシユの目が甘く溶けて視線が絡む。

「当たり前だ。嫌いになったことも、忘れたことも片時もない……好きだ」

その言葉で遂に私の中にあつた硬い石の様なゴツゴツは、しゅわし



ゆわ弾けるようになって、かわりに心臓が文字通り、まるで早鐘の様に胸を叩いた。

ああ、きつと今私の顔は真っ赤。だって、だってだって、イシユはまだ私のことが好きだし、私だってその気持ちが変わることはない。

イシユの手が私の頬をゆっくり包んで、優しくキスされた。しゅんわり溶けてしまいそうなキスだった。それはじわじわと身体をしびれさせて、やっぱりいつも通りイシユにしがみつくようになってしまった。

「ん……………っあ」

イシユの熱い舌がじんわりとわたしの口内を侵食して、思考までも囚われる様な甘い感覚に酔いしれる。

ただいま。(後書き)

ああ、やっと長編が一段落しました……！

あのあと、イシユの香り。

あの後イシユは多分ほとんど全部話してくれた。私を膝に乗せたままで。というのは、イシユが唇を離しても、私がまだくっついていたかったから。イシユは始終嬉しそうに笑ってたけど、マリアさんとの婚約についてのくだりは、それはそれは不機嫌だった。一つ分かったのは、イシユはマリアさんに惹かれた事なんて一度もないという事。安心するのは、仕方ないよね。正直、この事実を聞いて、嬉しくて仕方がないんだもん。

「マリアさん、どうなったの？」

「……逮捕された、毒物違法所持で、あとは殺人未遂」

「え。イシユが殺されそうになったって事？」

「まあ、そうだな」

逮捕？しかも毒物って……コレは私の偽善心だけど、さっきまでは曲がり並みにもイシユが好きだったのに可哀想、とか思ってた。だけどイシユを殺しそうになったっていうのは、スゴく嫌だ。……私マリアさん嫌い。

「……大丈夫だったの？」

「ああ、大丈夫」

心配そうな私を見てか、イシユがまた目をとろけさせて私の頬を撫でた。前はこういふことされると恥ずかしくて仕方なかったけど、

今はそれよりも一緒にいれることが嬉しくて、イシユが私に触れるたびに心臓がバクバク鳴る。

私の話もしたかったけど、正直私は寝てばかりだったからどんな様子だったかなんてわからない。イシユは多分、後でマーサさんがエマかサラに聞くんだろう。

イシユが着替えるために私の部屋から自分の部屋に移る時でさえ、私はなんだか不安になって、なかなかイシユの袖を離せなかった。うわ、恥ずかしい。イシユは別に気にしないだろうけど、流石に私が気にするので、自分から手を離れた。

もう外は暗くなり始めていて、イシユが移動した後にはすぐ、カイが入ってきた。尻尾をぶんぶん降りながら近づいて来て私の膝に顎を乗せる。可愛いなあもう。

「あいつ、帰って来ましたね」

「うん……ありがとね、カイ」

カイは、イシユがいなくなった時に私を支えてくれた。多分、カイがいなかったら私はあのまま暗闇に飲み込まれて、溺れたように目の前が見えなくなっていた。だからカイには、助けてくれてありがとうって言いたかったのに、カイは何だか拗ねたように俯いた。

「薫様は許すんですか。俺は嫌ですよ、あんな酷いことしておいてひよっこり戻ってくる奴なんて、あんな奴、俺は絶対……」

尻尾をダランと垂らしたり、突然跳ね上げたりするカイの様子はすごく、こう、ぐっとくるものがあった。真面目に話を聞かなきゃっ

て思うのに、尻尾の様子が気になって、うかうか話も聞いてられない。

でも何となく、カイの言いたいことは分かる。あんなに仲の悪い二人だから、つまりカイは、嫉妬してるんだと思う。もちろん私の身を心配してくれてるのは分かるけど、でもやっぱり、イシユが帰ってきたのは嬉しいんだよ。

「私を心配してくれてたんだよね、カイ。ホントにありがとう。でも今は、もう大丈夫って思いたいのに」

私が言い終えるか、それより前にカイは頭を上げて、決心したように宣言した。

「俺は、僕は絶対、薫様のそばにいますから！」

真っ直ぐな瞳が嬉しくって、ありがとう、と呟くと満足したようにカイは部屋を出て行った。

そのあと、私は自分からイシユを探してずっとくっついてた。今は本当に何よりも、イシユがいることが嬉しくて、抱きしめる力を強めるとイシユは何度でも言ってくれるのだ、好きだ、と。

流石にそのままお風呂タイムに突入しそうになった時は、遠慮したけど。今は書斎で、またさっきの様に隣に座って、頭はそのままイシユに預けてる。

「薫？眠いのか？」

イシユが心配そうな顔で尋ねてくる。正直いうと、少し、いや、か

なり眠いんだけど、朝起きたらイシユがいなくなってたらどうしよう、とか思うと眠れない。もう大丈夫って言われても、あの恐怖は大きくてなかなか忘れることなんて出来ないんだもん。だからその気持ちを正直に話してみた。あと、すっごく恥ずかしかったけど、今日、一緒に寝ることも。

話を聞くと、イシユはたちまちにやけた。うん、嬉しいんだろうけど、その顔は何かしなないといけないと思う。いや、変わらずカッコいいけど？何か私が身の危険を感じる。

「不安にさせてごめん、薫。大丈夫だから一緒に寝に行こう？」

そう言うといシユは、私の返事を待たないで、そのままベッドに向かって歩き始めた。久しぶりにイシユの布団に沈み込むと、大好きなあの香りに包まれる。この香りを嗅ぐと安心して、なんかすごく眠くなるんだよなあ、いつも。

イシユの大きな手が背中をぐっと引き寄せて、私は久しぶりに、世界で一番好きな人の腕の中で眠った。今思えば、あんなに安眠できたのは久しぶりだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5878p/>

---

異世界と私と時々ウサギ

2011年12月20日01時47分発行